

KAPPA NOVELS

トラベル・ミステリー傑作集 PART5

日本海からの殺意の風

寝台特急「出雲（いずも）」殺人事件

西村京太郎

KOBUNSHA

東京に生まれ育った私にとって、旅というのは、東京を離れることを意味していた。従って、当然のことながら、地方の人が東京へ上京する気持ちは、わからなかったし、それが旅という感じはなかった。

七年前から京都に住むようになって、東京へ行くのも旅なのだということが、実感として、少しずつわかってきた。

旅の目的地としての東京は、どこか薄気味が悪い。やたらに建物ばかりが多く、人も多いせいだろう。「日本海からの殺意の風」は、こんな気持ちから生まれた作品である。

「著者のことば」

カバー・イラスト　中山隆右

カバー印刷　近代美術

トラベル・ミステリー傑作集 PART5

日本海からの殺意の風

寝台特急「出雲」殺人事件

西村京太郎



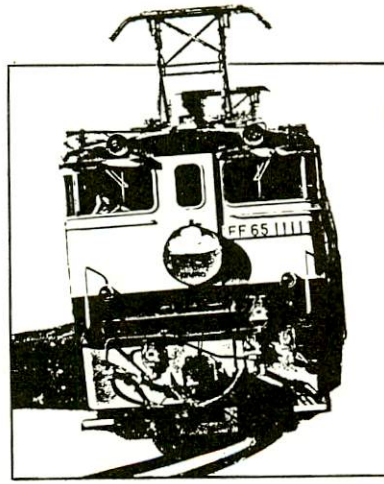
カッパ・ノベルス

目次

日本海からの殺意の風……5
殺人へのミニ・トリップ……111
潮風にのせた死の便り……167

イラストレーション　中山隆右（なかやまたかすけ）

日本海からの殺意の風



第一章　真昼の死

1

東京駅丸の内側の高層ビル街は、八月に入ってからの土曜日ともなると、夏休みをとる会社もあるし、週休二日制の大会社もあって、昼間でもひっそりと静かである。

いつもの昼休みなら、夏でもきちんとネクタイを締めたエリート・サラリーマンが行きかうビルの谷間のストリートに、人の気配がない。

まるで、ゴーストタウンのように見える。

八月九日の土曜日も、むっとする暑さの中で、このビル街の谷間は、死んだように静かだった。

しかし、完全に死んでいるわけではなかった。

社員が休んでいる会社でも守衛は来ているし、ビルの一角を借りて仕事をしている小さな会社の中には、土曜日でも社員が出勤しているところがあるからである。

Kビルの一階にある「東日旅行社」の社員たちも、この日、出社していた。社員たちといっても、全員で七人という小さな旅行社である。

昼休みになって、弁当持参でない社員三人は、東京駅近くの食堂まで昼食を食べに出かけた。いつもなら、自分のビルの地下に洋食のレストランと更科そばの店があるので、そこで食事ができるのだが、今日は休みになってしまっている。

三人は、ぶつぶつ文句をいいながらビルの谷間を歩いて行った。三人ともまだ独身の青年である。

「大会社が、羨ましいよ」

「大手の会社じゃ、夏休みが十日もあるそうだぜ」
どうしても、こんな会話が歩きながら続くことになる。
その三人が、急に足を止めた。
ビルの谷間の陽かげのコンクリートの上に、人間が一人、倒れているのが見えたからである。
着物姿の小柄な老婆だった。
「暑さに参って、倒れちまったのかな？」
「それにしても、見かけない婆さんだな」
「どこから来たのかね」
三人の青年は勝手なことをいいながらも、倒れている老婆の傍に屈み込んで声をかけた。
だが、応答はない。
「死んでるみたいだぜ」
「どうしたらいいんだ？」
「救急車を呼んだほうが、いいんじゃないか」
三人は、しばらく立ち止まって話し合ってから、中の一人が一一九番をかけた。
五分して、救急車が駈けつけた。
二人の救急隊員が、三人の青年から話を聞いたあと、一人が倒れている老婆の手首を握って脈を診た。
「死んでいるみたいだな」
と、彼は小声で同僚にいった。
それでも救急車にのせると、近くの救急病院に運んで行った。
中年の医者は、あっさりと、
「もう、死んでいるよ」
と、救急隊員にいった。

2

さらに十二分後、警視庁捜査一課の十津川警部たちに連絡されてきたのは、死んでいる老婆ののど首に、圧迫された痕が見つかったからである。

十津川は、病院の地下霊安室に横たえられている老婆の死体に対面した。

一四〇センチぐらいしかない小さな身体である。陽焼けしたしわの多い顔、手や足は小さいが、がっしりしている。

地味な着物姿で、年齢は七十歳前後だろうか。真新しい草履をはいているのだが、そんなものより、地下足袋のほうが似合いそうだった。きっと、まだかくしゃくとして、働き者の老婆だったに違いない。

死体の発見者の三人の青年が、待合室にいてくれた。

十津川は、彼らから事情を聞いた。

所持品は、何もなかったと、彼らは、いう。

「とにかく、場違いな婆さんだなと思いましたよ」

と、一人が十津川にいった。

十津川と部下の亀井刑事は、彼らに案内してもらって、老婆の倒れていた場所に行ってみた。

場違い——と、青年の一人がいった理由がわかった。

幅五メートルほどのコンクリートの道路に立って、周囲を見廻してみる。

両側には、近代的なビルがそびえ立っている。鋼鉄のシャッターが下りた入口は、頑固に人間を拒絶しているように見える。

窓ガラスが陽の光を受けて、きらきら光っている。ここにあるのは、鋼鉄とコンクリートとアルミ合金、強化ガラスだけである。自然らしいものは、何一つ見当たらない。

それに反して、死んだ老婆は、田のあぜ道か磯の匂いのする海辺の漁村が似合っている感じがする。

発見者のサラリーマンが、場違いだと感じても不思議はない。

「なぜ、こんな所で、殺されていたんでしょうか

ね？」

亀井が首をかしげている。

「私にも、それが不思議だよ」

と、十津川もいった。

「このビル街を抜けると、皇居ですからね。ひょっとして、あの婆さんは、二重橋を見に行こうとして、このビル街に迷い込んでしまったんじゃありませんかね」

「皇居か」

「あそこなら、お上りさんがよく行きますから」

「しかし、たいてい団体で来るんじゃないかね」

「ええ。その団体にはぐれてしまったということも考えられます」

「すると、物盗りの犯行ということかい？」

「一生に一度、東京見物をしたいと思って、小金を溜めて、新しい着物に新しい草履をはいて、やって来たんじゃありませんかね。あの婆さんは、身体は小さいが手足は頑丈ですよ」

「それは、見てすぐわかったよ」

「青森の私の田舎にも、よくああいう婆さんがいたもんですよ。七十歳過ぎても、元気で野良仕事をしていましてね。そういう婆さんや爺さんが、東京見物に来たんじゃありませんかね。小金を持っているから、狙われやすいと思いますよ」

「しかし、カメさん。仲間とはぐれて、このビル街に迷い込んだんだとすると、仲間が必死になって探しているはずだと思うんだがね」

と、十津川はいった。

亀井は、すぐ現場周辺の派出所に当たってみた。

そうした届け出がなかったかどうかである。皇居に近い派出所、銀座の派出所、あるいは東京駅の派出所に、亀井は、電話を入れてきいてみた。

しかし、どの派出所にも問い合わせはなかったということだった。

身元不明のまま、捜査本部が設けられた。

身長　一四二センチ
体重　四六キロ
年齢　七十歳前後
丸顔で、骨太、肉体労働に従事していたものと思われる。
国産の腕時計以外は、所持品なし。
肌着は古いが、着物と草履は新品である。
盲腸の手術痕跡あり。
血液型は、B型。

これが、その日のうちに、わかったことのすべてだった。
死体は、警察病院で解剖されることになった。
その日の夕刊に、事件のことがのった。
老婆の似顔絵ものったし、身体の特徴も書かれた記事である。
十津川は、これで老婆の家族が連絡してくるだろうと期待したのだが、翌日の日曜日になっても、いっこうに問い合わせの電話は、かかって来なかった。
解剖の結果は、日曜日、八月十日の午後一時に、十津川に知らされた。
死因は、やはり頸部圧迫による窒息。
死亡推定時刻は、八月九日の午前十時から十一時。
その間をとって十時半に殺されたとすると、発見されたのが十二時十二、三分であるから、二時間近く見つけられずに、あのビルの谷間のコンクリートの上に放置されていたことになる。
これといった進展のないままに、十日が終わってしまった。身元は、わからないままである。
十一日の月曜日になっても、捜査本部に問い合わせの電話は、二本しかかかって来なかった。しかし、その二本もいたずら電話だった。

「東京駅へ行ってみよう」

と、十津川は亀井にいった。

被害者が東京の人間ではないだろうという点で、二人の意見は、一致していた。

上京して来て殺されたのだとすれば、おそらく、東京駅で降りたのだろう。十津川は、そう思い、東京駅での聞き込みに期待したのである。

十津川たちは、東京駅に行き、白石駅長に会って、協力を求めた。

白石駅長は、五十四歳、新潟の生まれである。

「私も、二十四歳のときに上京して来たので、他人事とは思えません。喜んで協力させてもらいますよ」

と、白石はいってくれた。

東京駅は日本の玄関といわれるだけに、さまざまな方面から列車が入ってくる。

九州、中国、近畿、東海地区から、特急、急行、あるいは、普通列車が到着する。四国からは、直接、東京駅へ来る列車はないが、四国の高松から連絡船で宇野へ出れば、そこからは、東京までブルートレインの「瀬戸」が出ている。

東北や北陸方面からの列車は、上野が終着駅だが、上野駅から国電で東京駅へ来た可能性もあるわけだから、被害者が北から来たことも考えなければならない。

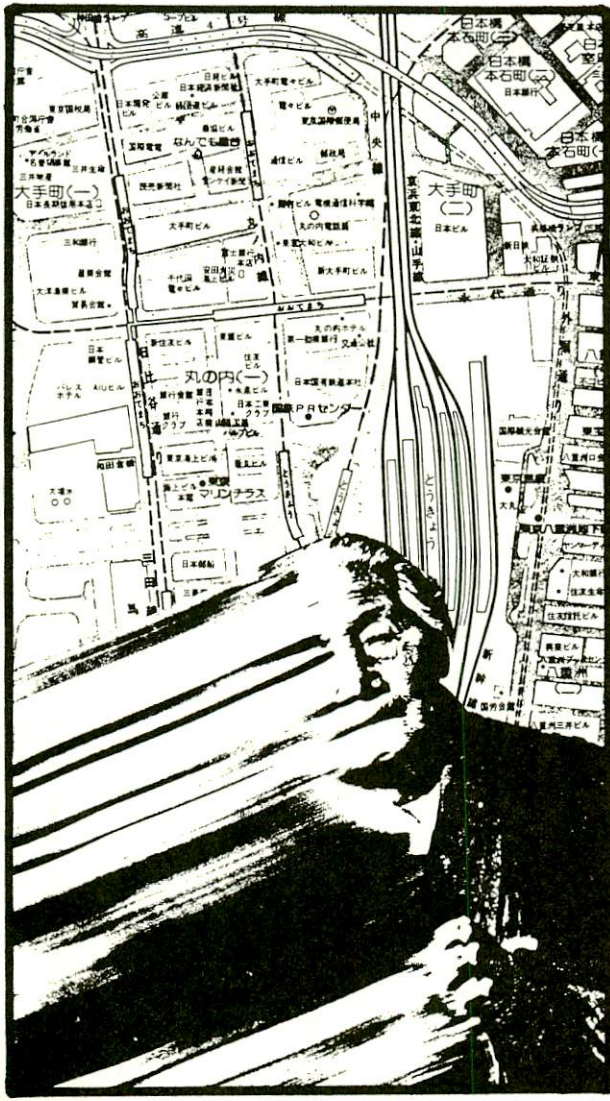
いずれにしろ、八月九日に、被害者が東京駅で降りたとすれば、駅員が彼女を見ている可能性があるのだ。

十津川は、被害者の似顔絵のコピーを駅員に配ってもらい、九日の午前中に、この老婆を見なかったかどうか、きいて廻った。

反応が二つあった。

第一の反応は、丸の内側ではなく、八重洲口のインフォメーション・センターからだった。

そこで働いている太田という職員が、被害者に会ったのを思い出してくれたのである。
「確かに九日の土曜日でした。このお婆さんが、私にききに来たのを覚えています」
「何を、あなたにきいたんですか？」
「地図を持ってましたよ。それを見せて、ここに行くのはどうしたらいいか、きかれたんです」
「どこの地図でした？」
「丸の内のビル街の地図でしたね。だから、反対側に降りてしまったんだといいましたよ。丸の内側に抜ける地下道を教えてあげましたが」
「丸の内のビル街のどのビルか、その地図には書いてありましたか？」
「いや、書いてありませんでしたね。『丸の内のビルがたくさんある場所』としか書いてなかったんです。それで、何という会社に用があるのか、きいてみました。あのお婆さんは、東京が生まれて初めてみたいに見えましたし、危なっかしく見えたもんですから」
「そうしたら、何といいました？」
「名前をいってましたよ」
「会社の？」
「いや。それなら覚えているし、調べてあげられたんですが、個人の名前をいうんですよ。男の名前でしたね。その男に会いに行くというんです。だから、会社の名前がわからないと無理だといったんですが、行ってしまいました」
「その男の名前を覚えていますか？」
「それを思い出そうとしてるんですが、どうしても思い出せないんです。一日、何十人ときに寄るので、思い出せないんですよ。申しわけありませんが」
「彼女が来たのは、何時ごろでしたか？」
と、十津川がきいた。


高速4号線
日本橋
本石町(二)
日本橋
本石町(一)
日本銀行
大手町
(二)
日本ビル
大手町(一)
日本長期信用銀行
なんでも屋
中央線
丸の内(一)
丸の内PRセンター
マリンテラス
三田線
日比谷通
永代通
外堀通り
八重洲
東京駅
新幹線
国労会館
とうきょう

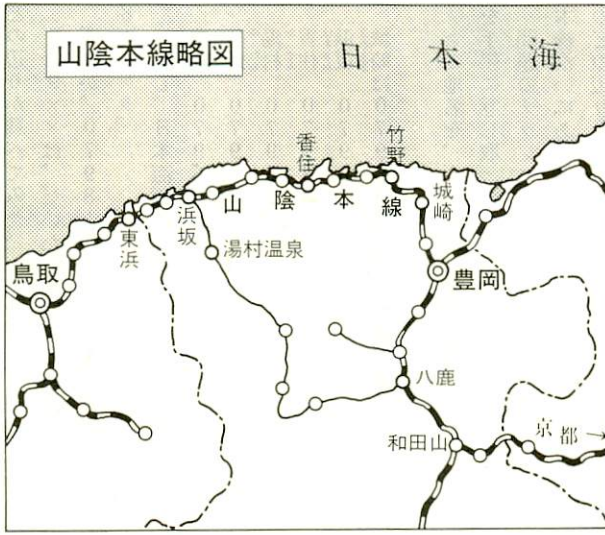
「確か、午前八時ごろだったと思いますね」
「彼女の様子は、どうでしたか？」
「ひどく疲れた様子でしたね。多分、自分一人で探し歩いていたんじゃないかと思いますよ。とうとうわからなくなって、私どものインフォメーション・センターに、聞きに寄ったんだと思いますね」
「彼女は、手に何か持っていましたか？」
「布製の手さげのようなものを持っていましたね。昔の女の人がよく持っていた――」
「信玄袋ですか？」
「ああ、それです。珍しかったので覚えているんです」
「他に、彼女のことで、何か気がついたことは、ありませんか？」
亀井がきいた。
「今も申しあげたように、忙しいですからね。特に土曜日は、地方から上京して来た人が多くて、このセンターは、混み合うんです」
「もう一度、確認しますが、彼女に連れはなかったんですね？」
と、十津川が相手の顔を見た。
「一人でした。離れたところに連れがいたら、話は別ですが、そんな気配は、ありませんでしたね」
「彼女が見せた地図ですが、どんな紙に書いてあったか覚えていますか？」
十津川がきくと、太田は、不思議そうな顔をして、
「そんなことまで、調べるんですか？」
と、きいた。
「被害者の身元が、まったくわかりませんのでね。藁をもつかみたいというやつです」
十津川は、肩をすくめるようにしていった。
太田は、じっと考えていたが、
「確か、広告の裏でしたよ」
「広告？　新聞に入ってくるチラシのことです

か？」
「ええ。その裏に、サインペンで下手くそな地図が描いてありましたね」
「何の広告だったか、わかりませんか？」
「さあ、そこまで見ませんでした」
と、太田はいった。
彼が被害者のことで覚えているのは、そこまでだった。

3

もう一人は、当日、丸の内側の中央口にいた池内という三十歳の公安官だった。
「間違いなく、このお婆さんでした」
と、池内は、似顔絵を見てから十津川にいった。
「私を警察官と間違えていたようで、『おまわりさん』と、声をかけて来ました。地図を見せて、そこへ行く道を教えてくれといいましたよ」
「丸の内側のビル街の地図ですか？」
「そうです」
「そこの何というビルに行きたいのか、いいませんでしたか？」
十津川がきくと、池内は、
「私のほうから、きいてみました。そこの何というビルに行くのかとです」
「それで、返事は？」
「ビルの名前は、知らないみたいでしたね。地図にも下手な字で、『丸の内のビルがたくさんある場所』としか、書き込んでありませんでしたから」
「男の名前をいいませんでしたか？　自分が会いに行く男の名前です」
「さあ、それは、聞きませんでした。ただ、口の中で、ぶつぶつ何かいいながら、駅を出て行きましたが」

「彼女の喋り方は、どうでした？　どこかの訛りがありませんでしたか？」
「東京の言葉じゃありませんでしたが、どこの訛りといわれても、私には、わかりませんね」
「あなたは、どこの出身です？」
「福島です」
「すると、福島訛りではなかったということですね？」
「それは、確かです」
と、池内はいった。
先刻、インフォメーション・センターの太田にも同じことをきいたのだが、彼も同じ、いい方をした。太田は、秋田の生まれだというから、どうやら被害者は、東北の人間ではなさそうである。
「被害者が、あなたに見せた地図ですが、チラシの裏に描かれていませんでしたか？」
と、十津川はきいた。
池内は、微笑した。
「そのとおりですよ。こういうお年寄りは、物を大切にするんだなと、感心したのを覚えています。私のおふくろも、よくチラシの裏を使って計算なんかしていましたから」
「何のチラシ広告だったか覚えていますか？」
「裏も見たから覚えていますよ。スーパーの大売出しのチラシでしたね」
「何というスーパーだったかは、覚えていませんか？」
「それは覚えていませんね。ただ、電話番号は、覚えていますよ」
「本当ですか？」
十津川が半信半疑できき返すと、池内は、急に困ったという顔になって、
「全部の電話番号を覚えているわけじゃないんです。局番が、東京と違って妙に長いんで、覚えているん



ですよ」

「どんな局番ですか？」

「最初に0がついていましたね。それから、数字がずらっと並んでいました。０７９までは、覚えています。そのあとに、まだ数字が二つ、くっついていましたよ」

「すると、全部で五ケタですか？」

「そうです。私の福島の田舎も局番は五ケタです。それで、余計、はっきり覚えているんです。私の田舎は、０２４５６ですが」

「彼女が持っていたチラシのスーパーは、０７９××という局番だったわけですね？」

「そうです。最後の二ケタの数字が、どうしても思い出せません。それでも、何かの役に立ちますか？」

「大いに役に立ちますよ」

と、十津川はいった。

十津川と亀井は、すぐ、０７９××という局番が、

どの辺りか調べてみた。
０７９××は、だいたい兵庫県である。
西宮が、０７９８と四ケタである。神戸は、０７８と三ケタ。
しかし、日本海側にいくと五ケタになる。
豊岡（とよおか）　０７９６２
竹野（たけの）　０７９６４
湯村（ゆむら）　０７９６９
香住（かすみ）　０７９６３
浜坂（はまさか）　０７９６８
城崎（きのさき）は０７９６３２と、六ケタである。

この地名を、十津川は、地図で調べていき、それを手帳に写し取った。
問題のチラシにのっているスーパーは、この山陰本線沿いにあると見ていいかもしれない。だが、このどの辺りか見当がつかないし、そのスーパーと被害者が、どんな関係かも不明である。
「私は、被害者が、この沿線の人間と見ていいと思いますね」
亀井は、かなり自信ありげにいった。
「理由は？」
と、十津川はきいた。
「二つあります。一つは、彼女の身体つきです。小柄だが骨太で、手足は、最近まで労働していたことを感じさせます。顔も陽焼けしていますからね。私は、農村か漁村で働いていた婆さんだと思うんです。その点、この沿線は、漁村が続いていますから条件を満たしています。もう一つは、彼女の持っていたはずの地図が失くなっていることです。物盗りの犯行なら、チラシの裏に描かれた地図なんか持っていかないでしょう。犯人が持っていったとすると、その地図が見つかることが困ることだったからに違いありません。地図には、駅員と公安官の証言を聞く

限り、東京丸の内側のビル街しか描かれていなかったと思われます。発見されても、犯人は、別に困らなかったと思います。それなのに犯人が持ち去ったのは、それがチラシだったからではないかと思うのです」

「つまり、スーパーの広告だったから、犯人は、持ち去ったということかね？」

「そうです。そのスーパーが被害者の身元を知る手掛かりになり、当然、犯人自身を明らかにするものだと考えて持ち去ったんだと思います。従って、被害者もスーパーの近くに住んでいたのではないか、つまり、この沿線に住んでいたと思うわけです」

「兵庫県警に頼むことにするかね」

「私たちも、一度、この沿線を歩いてみたいですね」

「いっそのこと、明日、向こうへ行ってみようじゃないか」

と、十津川はいった。

4

翌日、十津川と亀井は、兵庫県警に連絡してから新幹線に乗った。

豊岡警察署で、兵庫県警の仁科という警部が、待っていてくれることになった。

京都に一〇時二九分に着き、ここからは、一一時発の急行「丹後3号」に乗ることになった。

六両編成で、城崎行きである。

いつも、山陰本線に乗りかえるときに思うのだが、新幹線からだと歩くのが大変である。京都駅の一番端から反対側の端まで歩くことになるからだ。

八月十五日の旧盆が迫っているせいか、新幹線も混んでいたが、急行「丹後3号」も満員に近かった。

一両だけついているグリーン車も、八十パーセン

トぐらい乗客がある。帰省客が多いのだろう。
ともかく、向かい合って座席に腰を下ろしてから、二人は、さっそく京都駅で買った駅弁を広げた。
豊岡に着くのは、午後二時前である。
箸を動かしているうちに、「丹後3号」は、気動車特有のエンジンの音をひびかせて発車した。
子供が多いので、車内は賑やかである。
「カメさんのところも、もう夏休みだったね」
十津川は、亀井が二人の子持ちだったことを思い出していった。
「毎日、家にいるんで、うるさくてかないません。仙台に親戚がいるので、一週間ほど家内が連れて行くといっているんですが」
と、亀井が、笑いながらいった。
「うるさいといっても、私には、カメさんが羨ましいよ」
「警部のところは、まだ、気配はありませんか？」
「ないねえ。家内も欲しがっているんだがね」
十津川は、四十歳で結婚した。おそい結婚を悔やんだことはないが、唯一、残念だと思うのは、四十代で子供がないことだった。
「子供がいることが、果たして幸福かどうか、わかりませんよ」
と、亀井がいう。
「なぜだい？」
「子供たちが大きくなったとき、この日本が、いい社会かどうかわかりませんしね。それに、息子や娘が大きくなって、親孝行してくれるかどうかわかりません。私も家内も、期待はしていないといっているんですが、それでも内心では、親孝行な息子や娘であってほしいと思っていますからね」
「そういえば、母親に保険をかけて殺した息子がいたねえ」
「あんなニュースを聞くと、子供がいたほうがいい

のか、警部のようにいないほうがいいのか、わかりませんよ」

そんな話をしている間に、「丹後3号」は、いつの間にか保津峡を過ぎ、亀岡に着いていた。

この辺りは、京都のベッド・タウンになっているらしく、車窓からも宅地化の進んでいるのがわかる。園部、綾部、福知山、和田山と停まって、豊岡に着いたのは、一三時四六分である。

天橋立や、西舞鶴へ行く宮津線は、この豊岡で、乗りかえである。

改札口を出たが、待ってくれているはずの仁科という兵庫県警の警部の姿がなかった。

「身長一七五センチ、体重八〇キロの大きな男ですから、すぐわかりますよ」

と、電話でいってくれたのだが、いくら見廻しても、それらしい男は、見つからなかった。

「時間の打ち合わせは、されたんですか？」

亀井がきいた。

「ああ、したよ。急行『丹後3号』で行くと、いっておいたんだがね」

「勝手に豊岡警察署へ行ってみますか？」

「そうするより仕方がないみたいだね」

十津川は、もう一度、駅の構内に戻ってみた。

それでも、仁科がいないと確認して、タクシーを拾いに行こうとしたとき、駅員が、

「東京警視庁の十津川さんじゃありませんか？」

と、声をかけて来た。

「そうですが？」

「今、豊岡署の仁科という警部さんから、電話が入っています」

と、駅員はいい、十津川を駅の事務室に案内した。

礼をいって、机の上に置かれた受話器を取った。

「十津川ですが」

と、いうと、聞き覚えのある声で、

「仁科です。お迎えに行かれなくて申しわけありません。実は、こちらで殺人事件が発生しまして、今、その捜査を開始したばかりなんです」
「それは大変ですね。私のほうは、勝手にそちらへ行きますよ」
と、十津川はいった。

第二章　山陰海岸

1

十津川と亀井は、駅前でタクシーを拾って、豊岡警察署に向かった。
豊岡市は、京極氏の城下町だったところである。駅のある辺りが大手町で、その隣りが千代田町という。何となく、東京警視庁のある東京駅周辺に名前が似ているのが、十津川には、面白かった。
豊岡警察署は、仁科のいったとおり、市内で起きた殺人事件のために騒然としていた。
十津川たちは、署長の畑に会った。

エリート・コースを歩いて来た感じの若い署長である。

「こんなときに、お邪魔して、申しわけありません」

と、十津川はいった。

「いや、構いませんよ。仁科警部も間もなく戻って来るはずです」

と、三十二、三歳に見える畑は、ニコニコ笑いながらいった。

「殺されたのは、どんな人間ですか？」

亀井がきいた。

「まだ、くわしいことはわかりませんが、若い女だということです」

とだけ、畑はいった。

八分ほどして、仁科警部が戻ってきた。

なるほど大きな男であって、しきりにハンカチで汗を拭きながら、十津川に、

「本当に、失礼しました」

と、頭を下げた。

「殺されたのは、女だそうですね」

十津川が、きいた。

「二十五、六歳の若い女性です。どうも旅行者のようです。身元もわからないので、長引くかもしれませんね」

仁科は、相変わらず汗を拭っている。太っているだけに汗っかきなのだろう。

「所持品がないんですか？」

「ハンドバッグとか、ボストン・バッグといったものは、見つからんのです。従って、物盗りの犯行らしくも見えるんですがね」

「遺体を見せていただけますか」

と、十津川はいった。別に、こちらで起きた事件に口を挟む気はなかった。

ただ、所持品が無くて、身元がわからないという

点で、東京で起きた事件と似ていると思ったのである。
「どうぞ。見てください」
仁科は、十津川と亀井を遺体のところへ案内した。
仰向けに寝かされている遺体は、まだ生きているように見えた。
純白のワンピースが、よく似合っている。
ペンダントと指輪は、揃いのエメラルドである。
「死因は、何ですか？」
亀井がきくと、仁科は、
「後頭部を強打されていて、それが死因と思われます。ハンマーかスパナで殴ったんじゃないかと思いますが。ひどいもんです」
と、顔をしかめた。
よく見れば、寝かされている毛布の頭部の辺りが、血で汚れている。
「このペンダントと指輪は、本物ですかね？」
十津川は、きいた。
「それは、わかりませんが、腕時計は、本物のピアジェらしいですよ」
と、仁科はいった。
なるほど、被害者の左手にはめられた腕時計には、ピアジェの文字が入っている。
「何百万もするものでしょうね？」
「そうらしいです。だから、物盗りの可能性は、ほとんどないんですが」
と、仁科はいった。
「それで、今は、どんな捜査を？」
「現場周辺の聞き込みをやらせていますので、何かわかるんじゃないかと期待してます」
と、仁科はいってから、
「十津川さんのほうの仕事をやりましょう」
「いいんですか？」
「私より、部下の刑事のほうが優秀ですからね。私

がいないほうが能率があがるかもしれません」

と、仁科は、笑った。

十津川と亀井は、二階の部屋に案内された。

仁科は、机の上に山陰の海岸線の地図を広げて、

「ご照会のあった浜坂から城崎にかけての海岸は、景色のいいところで有名です」

と、いった。

日本海の激しい波に浸蝕されて、地形が複雑に入りくみ、断崖が続く。いわゆる、浸蝕海岸が長く続く。

東から、但馬、香住、浜坂海岸という名前がつけられている。

城崎の生まれだという仁科が自慢そうに、いかにその景色が美しいか、話してくれた。

「マリン・ラインと呼ばれる道路が、海岸線に沿って走っているので、車からの眺めもいいですが、今ごろなら、遊覧船に乗って海から眺めるのもいいものですよ」

「この辺りの女性は、働き者ですか？」

「そりゃあ、よく働きますよ」

と、仁科はいってから、

「東京で殺されたお婆さんのことですが、ひょっとすると、行商をやっていたんじゃないかと思うんですよ」

「行商ですか？」

「そうです。というのは、この浜坂駅から毎朝、普通列車が出ているんです。福知山行きです。この列車は、行商列車ともいわれていましてね。この海岸に漁港があり、魚市場があるので、途中から行商人がどっと乗ってくるんですよ。そして、豊岡で降りて商売をするわけです。この行商人に、五十歳以上のお婆さんが多いんです。みんな頑健で明るいですよ」

「どこへ行ったら、その人たちに会えますか？」

「一番早いのは、その行商列車に乗ることですね。いやでも会えますよ」
「浜坂発は、何時ですか？」
亀井がきいた。
「確か、午前四時四一分です」
「なるほど早朝ですね。明日、乗ってみます」
と、十津川はいった。

2

この日は、浜坂へ行って泊まることにした。
浜坂は、近くに浜坂温泉があって、温泉と冬の名物のカニで有名だが、最近は、NHKのテレビドラマ「夢千代日記」の舞台となった湯村温泉の玄関口としても、利用者が増えている。
閑なときなら、駅から車で二十五、六分の湯村温泉に行くのだが、明朝のことがあるので、十津川と亀井は、駅近くの小さな旅館に泊まることにした。
翌朝、四時に起きて、十津川と亀井は、旅館を出た。
まだ、外は、暗い。さすがに眠かった。
浜坂の駅に着いたのは、四時半である。少しずつ夜が明けてくる。
駅自体も、まだ眠っている感じだった。
ホームに入ると、蛍光灯の明かりの中に、問題の列車がすでに停車して、出発を待っていた。
「古い車両ですね」
亀井が感心したようにいった。
わずか三両だけの客車である。DD51型と呼ばれるディーゼル機関車が、三両の客車を引っ張って走る。
亀井が感心したようにいったのは、最後尾の客車である。
前の二両も年代物の客車だが、最後尾のそれは、

座席の背もたれも窓枠もドアも木製で、昔なつかしいニスの香りがする代物だった。

十津川は、中学生のころに乗った記憶があった。昭和三十年代である。もちろん、そのころは真新しい客車だったのだが。

クーラーの設備はなく、天井には、扇風機がついている。

二人は、わざわざ最後尾のその客車に乗った。かたい座席に腰を下ろすと、亀井は、嬉しそうに車内を見廻して、

「青森から、初めて上京するときに乗った急行列車の客車が、こんなでしたよ」

と、十津川にいった。

次の時刻表の改正のときには、多分、このなつかしい客車も消えてしまうことだろう。

四時四一分。通称「行商列車」と呼ばれる、福知山行きの542列車は、浜坂駅を発車した。

行商人らしい男女が、五、六人、乗っているのだが、まだ、荷物は、運び込まれていなかった。

(これから、どうなるのだろう?)

と、十津川は、興味を持って、がらんとした車内を見廻した。

十津川も、行商列車というのを写真で見たことがある。

車内に、魚などを入れた箱が積み重ねられ、行商の男女が、その傍で話し込んでいる写真である。だが、静止した一枚の写真なので、喧騒も匂いも伝わって来ないものだった。

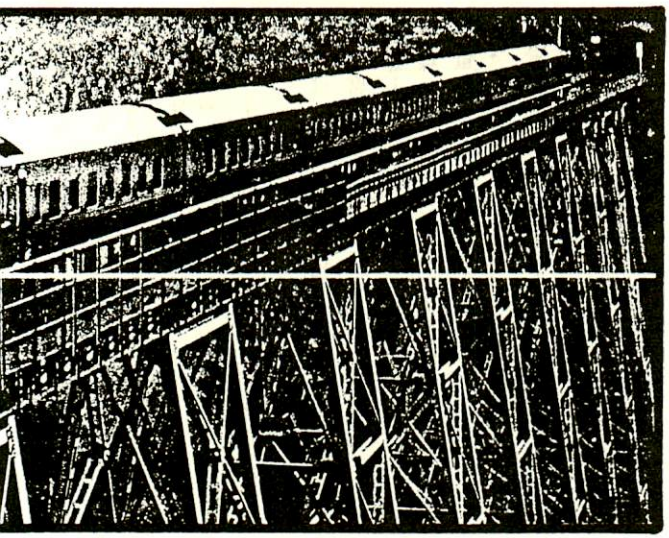
次の久谷駅に着いた。が、相変わらず、車内は、静かである。

二つ目は、餘部駅だが、ここでも何事もない。

「今日は、休みなのかね」

と、十津川は呟いた。

三両目の客車にも行商人らしい老人が乗っている



のだが、違うのだろうか？

餘部駅を出るとすぐ、有名な餘部鉄橋を渡る。地上からの高さ四〇メートル、長さ三一一メートルの鉄橋で、明治四十二年着工し、四十四年に完成している。

朝の光の中で、この鉄橋の上からの眺めは素晴らしい。日本海側の入江が左手に見え、反対側には餘部の集落が見える。

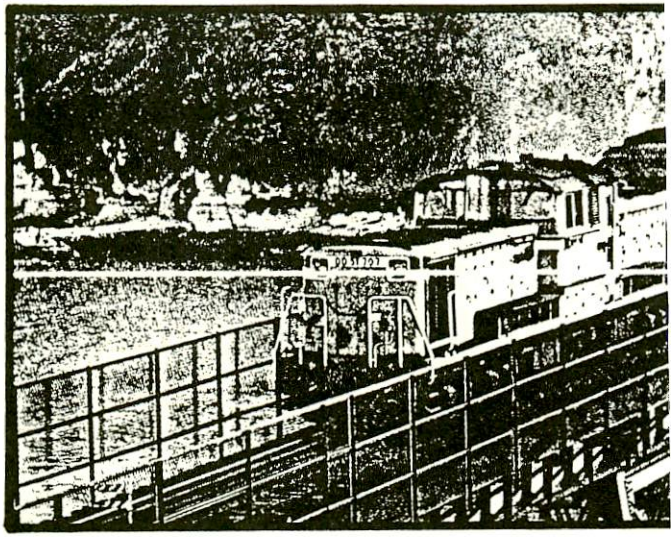
突然、行商人らしい男が立ち上がって、窓という窓を開け始めた。

もう一人が、座席を素早くひっくり返していく。ラシャの部分が下になって、平らな木の部分が上になる。まるで、ひっくり返された亀みたいな感じである。

そこへ今度は、ダンボールを敷いていく。

次の鎧駅に着いて、その理由が呑み込めた。

列車が着いたとたんに、開けた窓から一斉に、魚



や干物などを詰めた発泡スチロールやダンボールの箱が飛び込んできた。

ホームに待ち構えていた行商人が差し入れるのを、車内の仲間が受け取って、素早く座席の上に積み重ねていくのである。

客車の中は、たちまち魚の匂いで充満した。

次の香住では、もっと大きな荷物が窓から運び込まれ、行商の男の人が乗り込んできた。

十津川と亀井は、はじき出されるみたいにデッキに出た。

「まるで、戦場ですね」

と、亀井はいったが、その顔は、笑っていた。彼の生まれ育った東北でも、同じような行商人の姿があるからだろう。

通路にも荷物があふれ、車内では商談が始まった。

若い人の姿はない。男も女も年寄りである。年寄りだが、元気で声が大きい。

その中に、六十五、六のお婆さんが、デッキに出て来て、煙管でうまそうに煙草を吸い始めた。
「お早よう」
と、十津川は、声をかけた。
「朝早くから、大変だね」
「毎日のことだからね」
と、相手は、陽焼けした顔でいった。
「この人を探しているんだが、知らないかな？」
十津川は、例の似顔絵を見せた。
「ひょっとすると、あんたの仲間じゃないかと思うんだ」
「あんたたちは？」
婆さんは、じろりと十津川を見、亀井を見た。
十津川は、警察手帳を見せた。
婆さんは、急に当惑した顔になると、
「ちょっと待ってくださいよ」
と、いって、小柄な七十歳ぐらいの男を連れて来た。
どうやら、この老人が、一行の責任者らしい。見事に陽焼けした顔で、老人は、
「何だね？」
と、十津川にきいた。
十津川は、彼にも似顔絵を見せた。
老人は、「うーん」と、唸りながら見ていたが、黙って、似顔絵を持ったまま仲間のところへ戻ってしまった。
十津川と亀井が、顔を見合わせていると、老人は、今度は六十五、六歳の別の婆さんを連れて来た。
「このきよさんが、ふみさんに似てるといってる」
と、老人がいった。
その間にも列車は、小さな無人駅に停車し、また動き出している。
「そのふみさんについて、くわしく聞きたいんだが」

十津川は、きよさんという婆さんにいった。
「もうじき降りなくちゃならないから」
と、きよさんは、いう。
「どこで、降りるの？」
「豊岡だよ」
「じゃあ、商売がすんでから、もう一度、会って、ふみさんの話を聞かせてくれないかな？」
「昼になってしまうよ」
「それでも、結構だ」
と、十津川はいった。
きよさんは、ちょっと考えてから、豊岡の市内で、いつもお昼に弁当を使うところがあるから、そこへ十二時に来てくれといった。
十津川は、その店の名前と場所を手帳に書き込んでから、
「一つだけ、今、教えてもらいたいんだが、ふみさんの姓は、何というの？」
「田代ふみさんだよ」
と、相手はいった。

3

十津川と亀井は、豊岡で降りた。
行商の人々も、あらかた豊岡で降りて、大きな荷物を担いで改札口を通って行った。
まだ、午前六時を回ったばかりである。
駅前で、開いている食堂を見つけて、二人は、朝食をすませた。
そのあと、豊岡警察署に戻ると、仁科警部が、
「どうでした？」
と、きいた。
「昼になると、何か有力な情報が得られそうです。こちらの事件は、どうですか？」
十津川がきき返すと、仁科は、当惑した顔で、

「それが、なかなか、うまく進まんのです。まだ身元がつかめません」
「聞き込みの結果は、どうでした？」
「被害者を、現場附近で見かけたという人間は、三人ほどいたんですが、それが、どうも妙なんですよ」
「どう妙なんですか？」
「三人のうち二人が、被害者から田代ふみという女性のことをきかれているんです。この辺りに住んでいるはずだが、知らないかとですよ」
「田代ふみ――ですか？」
「ご存じなんですか？」
「実は、行商列車で会った婆さんから、田代ふみという名前を聞いているんです。くわしいことは、昼に、もう一度会って聞くことになっていますが」
「同一人物ですかね？」
仁科も、眼を光らせた。
「そちらの、妙だというのは、どういうことなんですか？」
と、十津川がきいた。
「現場附近で、被害者が二人の通行人に、田代ふみという女性が、この辺に住んでいるはずだといっているので、徹底的に住民票で調べてみたんです。近くの交番からも情報を集めました。ところが、現場附近に田代ふみという住人はいないんですよ」
「すると、被害者が住所を間違えていたということでしょうか？」
「と、思っているんですがねえ」
「この田代ふみが同一人だと、お互いのためにいいですね。二つの事件の共通項になりますから」
「私も、そうあってもらいたいと思います」
と、仁科はいった。
十津川と亀井は、昼近くに、きよさんと約束した場所へ出かけた。

豊岡市内にある「菊水」という料亭である。
どうやら、きよさんは、その料亭に魚を運んでいるらしい。
きよさんは、この料亭の調理場の隅で弁当を使っていた。
十津川たちも、その傍に腰を下ろした。きよさんは、早川きよという名前である。
「田代ふみさんのことを話してもらいたいんだよ」
と、十津川はいった。
きよは、弁当を食べおわり、お茶を口に運んでから、
「ふみさんとは、二十年近くも一緒に働いていたんだよ」
と、いった。
「それで、今は？」
「それが、この間から急に姿を見せなくなってね。病気になったんじゃないかと心配してるんだよ」
「住所を教えてくれないかな」
「香住の駅の近くだよ。あたしは、鍛だけどね」
「豊岡の街じゃないの？」
「ふみさんが？　違うよ。香住だよ。二、三度行ったことがあるけど、あの人は、ひとりで住んでいたね」
「家族はいないのかね？」
「息子と娘が一人ずついるって聞いたことがあるよ。でも、一緒に住んでいないんだ。ふみさんも、働けるうちは家族の厄介にはなりたくないって、いってたんでね。ふみさんが病気なら、息子か娘が看病に帰っているんじゃないかね」
「彼女の家に案内してくれないかな？」
と、十津川は頼んだ。
「いいよ。どうせ帰り道だから」
と、きよはいった。
十津川と亀井は、早川きよと一緒に、豊岡発一四

時〇九分の米子行きの普通列車に乗った。
香住に着いたのは、一五時〇四分である。
小さな無人駅の多いこの辺りでは、比較的大きな駅だった。
今朝の行商列車では、この駅から乗り込んで来た行商人が一番多かったし、荷物の運び込みも一番多かったことを、十津川は、思い出した。
ここは漁港の町である。
海水浴場もあるという。駅を出てから、歩いて十分ほどのところにある木造のアパートに、きよは、十津川たちを案内した。
「さくら荘」という看板の出た、二階建てのアパートである。
その一階の角の部屋に、「田代」と筆で書かれた紙が貼ってあった。
「ここだよ」
と、きよはいい、「ふみさん！」と、大声で呼びながらドアを叩いた。
「いないのかな？」
きよが首をかしげた。
亀井が管理人を連れて来た。
十津川が、相手に警察手帳を見せて、
「この田代さんは？」
「ここんところ顔を見ませんね。どこかへ出かけたんじゃありませんか？」
「開けてくれませんか」
と、十津川はいった。
このアパートでは、管理人がマスター・キーを持っていて開けてくれた。
六畳一間に台所とトイレがついた部屋である。
調度品は、あまりなかったが、部屋の中は、きちんと整理整頓されている。
桐のタンス、鏡台、丸い卓袱台、どれも古いものだが、よく磨かれていた。

管理人と早川きよに立ち合ってもらって、十津川と亀井は、タンスや鏡台の引出しを調べてみた。

手紙の類いや写真などは、まとめて卓袱台の上にのせた。

写真も手紙も、驚くほど少なかった。

写真は、二十一枚。最近、写したと思われるものは、たった三枚で、残りの十八枚は、セピア色に変色した古いものだった。

最近まで、元気に働いていたというが、精神的には、昔の思い出の中に生きていたのだろうか？

最近の三枚は、すべて行商の仲間と一緒に撮ったものである。どこかの温泉に行ったときのものらしく、旅館の浴衣を着ている。早川きよも写っていた。

きよに見せると、その中の一人を指さした。

「被害者に、よく似ていますよ」

と、横から亀井がいった。

確かに、そこに写っている人物は、東京で死んだ被害者によく似ていた。

十津川は、古い写真のほうに眼をやった。

生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた二十五、六歳の母親の写真である。明らかに、田代ふみの若いときの写真である。

七・五・三のときの兄妹の写真もあった。五歳の兄も三歳の妹も緊張した顔付きなのは、どこかの写真館で撮ったものだからだろう。

この兄妹が大きくなってからの写真は、一枚もなかった。なぜなのかわからない。

亡くなった夫と撮っている写真もあった。

その写真を見ると、彼女の夫が漁師だったことがわかる。何か、海の事故で死んだのか、病死したのかわからないが。

次に、手紙のほうを調べてみた。

手紙は、封書、ハガキ、とりまぜて三十四通、見つかった。

そのうち最近のものは、わずか六通で、残りはすべて二十年以上前のものだった。

十津川は、最近の六通から、内容に眼を通してみた。

彼女の息子や、娘から来た手紙はないかと期待したのだが、それらしいものは見つからなかった。

六通のうち、年賀ハガキが四通。住所などからみて、行商に行く、お得意の料亭などから来たものだった。

あとの二通は、封書である。

一通は、大阪市内の女学生からで、偶然乗った行商列車の中で、田代ふみから面白い話を聞くことができたという礼状だった。一緒に撮った写真も二枚入っていた。

これは、どう考えても、事件には関係なさそうである。

もう一通のほうには、十津川は、興味を覚えた。

「田代ふみ殿」と、かたい書き方で、表書きが書いてある。

差出人の名前は、東京、世田谷代田の「矢代勇一郎」となっている。

消印は、今年の三月二十一日だった。

中の便箋に書かれた文字は、大いに、十津川の関心を引いた。

〈止むを得ず、あなたに手紙を書くことになりました。私は、あなたの娘の田代有子とつき合いのあったものです。二年にわたるつき合いの間に、五百万円近い大金を有子に貸したにも拘らず、まったく返してくれません。それどころか、最近になって姿を消してしまったのです。私としても、苦しい生活の中から貸したもので、どうしても返してもらいたい。同封したのは、あなたの娘が書いた借用書の写しです。筆跡は、母親だから見覚え

があると思いますよ。すぐ、返してもらいたい。もし、返済してくれない場合は、弁護士に相談して、有子だけでなく、兄さんが立派な地位にいると聞いたから、必ず見つけ出して告訴するつもりでいる。

必ず、返済してください〉

同封したという借用書の写しは、見つからなかった。

この手紙で、田代ふみの娘の名前が田代有子とわかった。東京に戻って、この手紙の主に会えば、さらに何かわかるだろう。

十津川は、この手紙と田代ふみの写真を持ち帰ることにした。

二人は、もう一度、室内を探した。

五百万円の返済を迫られたふみが、どうしたか知りたかったからである。

預金通帳が見つかった。

香住にある信用金庫の通帳である。

現在の預金高は、百五十万円だが、最近では八月七日に百万円おろしていた。

東京に行く直前である。

さらに、三月末ごろのところを見ていくと、翌四月八日に五百万円をおろしていることもわかった。

その他には、ほとんど預金をおろしていないのである。

こつこつと溜めた金を、娘のためにおろし、また、東京行きに当たって、また引き出したという感じだった。

「東京の丸の内ビル街で、彼女を殺した犯人は、その百万円も奪い取ったようですね」

と、亀井はいった。

十津川は、管理人室の電話を借りると、東京の捜査本部にいる西本(にしもと)刑事に連絡をとった。

「被害者の名前は、田代ふみだ。東京世田谷区代田の矢代勇一郎という男に会って来てくれ。被害者の娘に五百万貸したといって、その金の返済を迫っていた男だ」
「わかりました」
と、西本はいった。

4

十津川と亀井は、アパートの管理人と住人から、田代ふみについて聞き込みを始めた。
管理人も他の住人たちも、彼女は「気さくで、働き者だ」と、いった。
「とにかく、あの年齢で元気でしたねえ」
管理人は、感心したようにいった。
「子供のことを、何か、いっていませんでしたかね？」
と、十津川は質問した。
管理人は、あまり子供のことは話さなかったといったが、ふみの隣室を借りている杉本良子という四十歳の美容師は、
「ときどき、お子さんのことを話していましたよ」
と、いった。
「どんなふうにですか？」
「自慢してましたねえ。なんでも、息子さんは、大きな会社のエリート・サラリーマンだそうですよ。それから、娘さんは、デザイナーで成功しているとかで」
「息子さんの名前は、知りませんか？」
「いつも、アキオといっていましたね。どんな字を書くのか知りませんけど」
（明夫だろうか？）
と、その字を思い浮かべながら、十津川は、
「その息子さんの勤めている会社の名前を、ふみさ

んがいったことはありませんか？」
と、きいた。
「聞いたかもしれませんが、覚えていないんですよ。東京の会社だとはいってましたがねえ」
「息子さんや娘さんを見たことがありますか？」
「それが、ないんですよ。一度、ふみさんの自慢の息子さんや娘さんに会いたいと思っていたんですけどねえ」
と、杉本良子はいった。
管理人や他の住人も、同じように、見ていないといった。
東京に出て行ったと思われる田代ふみの子供たちは、一度も、この香住に帰って来なかったのだろうか？
「そのことで、ふみさんは、どういっていました？」
と、亀井がきいた。
「二人とも忙しいんだから、帰って来なくてもいいんだといってましたけどねえ。本当は、寂しかったんじゃないですか。連絡は、ときどき、あるといってましたよ」
と、杉本良子が、いう。
しかし、息子や娘からの手紙は、部屋にはなかった。本当に、連絡があったのだろうか？
「田代ふみの戸籍を調べてみたいね」
と、十津川は、亀井にいった。
二人は、管理人や早川きよたちに礼をいってアパートを出ると、香住町の町役場に足を運んだ。
ここでも警察手帳を見せて、田代ふみの戸籍謄本と住民票を見せてもらった。
夫の晋吉は、二十年前に死亡していることがわかった。
問題は、子供である。
田代夫婦の間には、五人の子供が生まれたことがわかった。

三男二女である。しかし、男の子二人と女の子一人が死亡し、残ったのは、三男の明夫と次女の有子の二人だけである。

田代明夫の年齢は、三十五歳。現在の住所は、東京都渋谷区初台のマンションになっている。

田代有子の年齢は、二十七歳。こちらは、世田谷区三軒茶屋に転出したことになっている。

十津川は、戸籍謄本をコピーしてもらってから、もう一度、アパート「さくら荘」に戻った。

管理人に会って、この近くにスーパーマーケットはないか、ときいてみた。

二百メートルほど離れたところに、最近できたスーパーがあるという。

「そのスーパーの広告が配られて来ませんか？」

と、亀井がきいた。

管理人は、笑って、

「よく、新聞にはさんで配って来ますよ。今朝の新聞にも入ってたんじゃないかな」

と、いい、そのチラシを見つけて、十津川たちに広げて見せてくれた。

スーパー「くろだ」という店の名前だった。電話番号もちゃんと印刷されている。

局番は、０７９６３である。

このチラシも、貰っていくことにした。

十津川と亀井が豊岡署に戻ったのは、陽が暮れてからである。

十津川は、仁科警部に、香住でわかったことを伝えた。

「すると、この豊岡で殺されたのは、田代ふみの娘の有子ですかね？」

仁科が、相変わらずハンカチで顔の汗を拭きながら、十津川にいった。

「違うと思いますね。彼女は、田代ふみの家を探していて殺されたわけでしょう？　しかし、田代ふみ

の家は、豊岡でなく香住です。娘の有子なら、それを知っていたと思いますよ」

「そうですな。それに、被害者が身につけていた宝石ですが、ペンダントも指輪も、どちらも本物のエメラルドとわかりました。どちらも、二百万から三百万はするものだそうです。ああ、腕時計もです。十津川さんの話では、田代ふみの娘のほうは、五百万円の借金をしていて、その返済を迫られていたようですから、あんな宝石や腕時計を身につけているはずがありませんな」

「そう思います」

「いぜんとして、身元不明か」

仁科は、大きな身体をゆするようにして、溜息をついた。

十津川は、電話を借りて、東京の西本刑事に連絡をとってみた。

「どうだったね？　矢代勇一郎という男から、話を聞けたかね？」

「それなんですが、すでに引っ越してしまったあとでした。引っ越したのは、今年の四月十二日です」

「行き先は、わからないのか？」

「矢代のいた家は、借家だったんですが、家主も知らないうちに、突然、引っ越してしまったそうです。現在、聞き込みなどで移転先を探しています」

「田代ふみから五百万円を取りあげたあと、姿を消したということかもしれんな。私とカメさんは、明日、帰る」

「そっちの殺人事件は、どうなんですか？」

「どうも、根は同じ事件のような気がするね。多分、合同捜査ということになるだろう」

と、十津川は、いってから、田代明夫と有子の住所を西本に書き取らせた。

「その二人をつかまえられたら、被害者の遺体の写真を見せて、母親かどうか確認させるんだ」

と、十津川はいった。
これで、捜査は、進展してくれるだろうか？

第三章　兄妹

1

八月十四日、十津川と亀井は、朝早く豊岡を発って、東京に戻った。
豊岡からは、特急「はまかぜ2号」で大阪へ出て、新大阪から新幹線を使うルートで、東京に着いたのは午後二時過ぎだった。
捜査本部に帰ると、西本刑事が二人を迎えて、
「田代明夫も、有子も、所在不明です」
と、いった。
十津川は、上衣を脱いで、汗の吹き出た顔をク

ラーで冷やしながら、
「二人ともかね」
「そうなんです。明夫も、有子も、一年以上前から、この住所にはおりません」
「行き先は？」
「目下のところ不明です。どちらも行き先を告げず、いなくなっていますから」
「その時期は似ているのかね？」
「だいたい同じです。去年の七月末に、明夫が渋谷区初台の高級マンションからいなくなり、九月初めに、有子が世田谷区三軒茶屋のマンションから姿を消しています」
「みんないなくなっているのか」
と、呟いたのは亀井である。
この二人の他、矢代勇一郎という男も姿を消してしまっている。
東京という大都会では、ある日マンションの隣人が、突然、いなくなるといったことは、日常茶飯事だし、誰もそれを気にしたりはしない。
サラ金苦をはじめとして、姿を消さなければならない理由はいくらでもある。時には、何週間も前に死亡していても、近所の人たちは、気付かないことだってある。
だが、関係のある三人が、あいついで消えたというのは、異常というべきだろう。しかも、もう一人の関係者、田代ふみは、丸の内のビル街で何者かに殺されているのだ。
十津川は、午後四時に捜査会議を開いた。
豊岡、香住でわかったことを、まず、十津川が、捜査本部長に報告したあと、西本刑事たちに、消えてしまった兄妹のことを報告させた。
渋谷区初台のマンションに、田代明夫を訪ねた西本が、次のように話した。
「このマンションは、部屋代が月二十五万と高額で

す。３ＬＤＫで、応接セットなどがついたマンションです。田代明夫は、ここに一年間ほど住んでいました。管理人や隣り近所の住人には、中央商事の企画部長をやっているといっていたようで、管理人たちは、みな、そのことを信じていたようです」

「中央商事といえば中堅の商社だが、企画部長というのは嘘なのかね？」

と、十津川がきいた。

「問い合わせてみましたが、企画部長どころか社員にも、田代明夫の名前はありません」

「マンションでの評判は、どうだったんだ？」

「それが、悪くないんですよ。大会社の部長なのに、腰が低く愛想のいい人だということです。部屋代も、きちんと払っていました」

「中央商事の部長が嘘だとすると、田代明夫は、いったい何をしていたのかね？」

「毎朝、きちんと背広を着て、アタッシェケースを持って出かけていたので、エリート・サラリーマンだと、みんなが思い込んでいたようです」

「結婚はしていなかったのかね？」

「独身だったようです。管理人には、一度結婚したが死別して、それ以来ひとりでいるのだといっていたようです。なかなかの美男子ですし、エリート・サラリーマンだと思い込んでいた住人の中には、本気で見合い写真を持ち込んだ人もいたということです。それで、田代明夫の本当の仕事ですが、ひょっとすると、結婚サギのようなことをやっていたんじゃないかと思うんです。中央商事の企画部長といった肩書きも、結婚サギの小道具の一つかもしれないと思います」

「結婚サギの証拠でもあるのかね？」

「管理人の話によると、ときどき、女性が訪ねて来て、時には、田代明夫のところで、女同士が鉢合わせしたこともあったそうです。それから、私立探偵

と思われる人間が、管理人に田代の女関係をききに来ています。もう一つ、田代が、突然、姿を消してから、管理人のところに、田代と結婚を約束したのだが、どこへ引っ越したか教えてくれと、三十歳くらいの女がやって来たといっています」

「田代明夫に、前科はないのかね？」

「指紋を採って調べましたが、ありません」

と、西本はいった。

次は、日下刑事が、田代有子の件を報告した。

「新玉川線の三軒茶屋から歩いて、七、八分のところにあるマンションでした。この六階に、田代有子は、一年半ほど住んでいましたが、彼女の評判はよくありません。大きなことばかりいっていて、金を借りては、ぜんぜん返さないというのです。借金が重なって、身動きがとれなくなって逃げ出したのかもしれません」

「そのマンションの部屋代は、いくらなんだ？」

「十五万円で、２ＬＤＫです」

「田代有子は、何をやっていたんだろう？」

「わかりません。近所の人たちには、いろいろとホラを吹いていたようです。銀座でブティックをやっているとか、実家は山陰の豊岡で、大きな旅館をやっているとかです。派手な服装で、真っ赤なスポーツカーを乗り廻していたので、本当に、銀座でブティックをやっていると信じていた人も多かったようです」

「その車も、消えているんだろうね？」

「消えています。ナンバーを管理人が覚えているので、本当に田代有子のものだったかどうか調べてみようと思っています」

「田代有子の男関係は、どうなんだ？」

「管理人は、一年半の間に、二人ほど男がマンションへやって来たことを覚えていると、いっていましたね。どちらも中年の男だったそうです。片方は、

ベンツでよく遊びに来ていたということです」
「彼女は、実家は豊岡といっていたんだね？」
「そうです。豊岡で旅館をやっていると、いっていたそうです。豊岡という地名も、何度もいっていたので、隣りの住人は、覚えてしまったといっていました。城崎の近くの豊岡です」
「豊岡というのは、面白いね」
と、十津川は、亀井にいった。
田代ふみの家は、実際には香住のアパートである。しかし、豊岡で殺された女は、そこに田代ふみの家があると思い込んでいたらしい。十津川は、そのことを思い出していた。
「もう一つ、面白いことが、あります」
と、亀井がいった。
「田代明夫が、勤めていたと自慢していた中央商事ですが、確か、本社は東京丸の内側のビル街にあったはずですよ」

2

何となく、不幸の構図みたいなものが、十津川の頭の中に浮かんで来た。
田代明夫と有子の写真は、見つからなかったが、マンションの管理人や住人の証言をもとに、二人の似顔絵が作られた。
明夫のほうは、恰幅のいい美男子だし、有子のほうは、スタイルのいい美人である。
明夫が中央商事の企画部長を自称して、それを誰も疑わなかったのも不思議がないような気がする。
また、有子が、この美貌で派手な服装だったら、銀座のブティック経営者といっても、おかしくはないだろう。
「豊岡で殺されていた女じゃありませんね」
亀井は、似顔絵を見て、十津川にいった。

「そうだな。顔が違うね。しかし、田代ふみの家を探していたとすると、どこかで、田代兄妹につながっていると見ていいんじゃないかね」
「これから、どうしますか？」
「とにかく、田代兄妹を見つけ出すことだよ。田代ふみは、息子の明夫に会いに東京へやって来たと見ていいと思う。彼女は、息子が本当に中央商事に勤めていると思っていたんじゃないかね」
「まさか、嘘がばれたので、息子の明夫が母親を殺したんじゃないでしょうね」
西本がいうのへ、亀井が顔をしかめて、
「ばかなことをいうなよ。それじゃあ、殺された田代ふみが、可哀そう過ぎるじゃないか」
と、叱るようにいった。
田代ふみは、きっと、渋谷区初台の息子のマンションに電話したのだろう。だが、どこかへ引っ越してしまっていた。それで、止むを得ず、わざわざ上京して、中央商事を訪ねようとしたに違いない。
息子の明夫は、中央商事の企画部長をしていると嘘をついていた。そんな明夫が、母親に中央商事に来てくれというはずがない。むしろ、逆に、絶対に会社には来ないでくれ、連絡しないでくれと、いっていたに違いないのだ。
それなのに、ふみが、わざわざ上京して中央商事を訪ねようとしたのは、よほど切羽つまった用事があったに違いない。
「田代ふみが死んでいた場所は、中央商事本社に近いのかね？」
十津川は、確認する意味で、亀井にきいた。
亀井は、東京駅周辺の地図を、持ち出して来て調べていたが、
「近いですね。百五十メートルほどのところに、中央商事本社のビルがあります」
と、十津川にいった。

「土曜日だったのが、田代ふみにとって不運だったんだな」
「そうですね。普通の日なら、あのビル街にも人通りがありますから、犯人も簡単には、あの通りで殺人はできなかったと思いますね」
「彼女は、まさか、土曜日が休みだとは思っていなかったんだろうね。行商というと、休みなんかないんだろうから」
「百万円を、彼女は、上京する直前におろしていますが、何に使う気だったんでしょうか？」
「その問題もあるね」
十津川は、考え込んだ。
田代ふみは、百万円を持って上京し、息子に会いに行った。
しかし、彼女は、殺され、百万円も手にしていた信玄袋も消えてしまった。
（息子の明夫が、百万円持って来てくれと、母親のふみに頼んだのだろうか？）
あり得ると、十津川は、思う。
娘の田代有子は、矢代勇一郎という男に五百万円の借金を作り、ふみは、それを返済したと思われるから、息子に頼まれれば、百万円を用立てたろう。
「カメさんは、どう思うね？」
と、十津川は、亀井にきいてみた。
「そうですね。息子に頼まれて、百万円をおろして持って行ったというのが、一番可能性があると思いますが、ただ、それなら、明夫は、母親を中央商事には呼ばないと思うんです。中央商事に勤めているというのは嘘だったわけですから」
と、亀井はいった。
「しかし、カメさん。田代ふみは、誰かに強制されて東京へやって来たとは、思われないんだよ。東京駅で、インフォメーション・センターの職員と丸の内側の鉄道公安官が、八月九日に被害者田代ふみに

会っているが、二人とも彼女はひとりだったといっているんだ。誰かに連れて来られたとは思えない。自分の意志で東京にやって来て、息子に会いたくて中央商事を探していたと思えるんだよ」

「そうですね」

「それでも、カメさんは、息子の田代明夫が呼んだとは思えないかね？」

「警部のいわれるとおり、田代ふみは、自分の意志で息子に会いに来たんだと思います。しかし、彼が東京丸の内に来てくれと、ふみを呼ぶはずはありません。きっと別の場所に呼ぶと思うんです」

「それなら、なぜ、ふみは、東京丸の内に行ったんだろう？」

と、十津川は自問するようないい方をした。

疑問は、堂々めぐりの形で元へ戻ってしまうのである。

疑問は、他にもある。

田代ふみは、どの列車に乗って山陰の香住から上京して来たのだろうか？

犯人は、彼女を、ずっと尾行していたのだろうか？

豊岡で起きた殺人事件との関係も、不明のことが多い。

兵庫県警の仁科警部からの連絡では、まだ、被害者の身元は、わかっていないのである。

彼女は、田代ふみの家を探していて殺されている。とすれば、前に起きた東京の事件と無関係とは思われない。

しかし、どう関係してくるのだろうか？

被害者と、田代ふみは、知り合いだったのか？

田代ふみの住居は香住なのに、被害者は、なぜ、豊岡市内を探していたのだろうか？

「田代ふみが乗って来た列車だがね」

十津川は、時刻表を見ながら亀井にいった。

「インフォメーション・センターの職員は、午前八時前後に田代ふみに会っているから、その前に着いた列車から降りたことは間違いない。山陰の香住から東京へ来る列車というと――」

「二つ考えられますね。直通のブルートレインを利用するか、京都、大阪へ出て、新幹線を利用するかです」

亀井も、時刻表を見ながら、いう。

「あとのほうはいいね。京都からでも、新幹線で二時間五十一分はかかるんだ。東京に八時までに着くには、午前五時九分以前に京都を出ていなければならない。そうなると、香住を発つのは午前二時ということになってしまう。特急でも、香住―京都間は、三時間はかかるからね。もちろん、こんな時間に香住を出る列車はあり得ない」

「すると、寝台列車ですね。山陰からというと、ブルートレインの『出雲』ですか」

「二本ある。『出雲2号』か、『出雲4号』だ」

と、十津川はいった。

出雲2号は、一六時四七分に出雲市を出て、翌日の午前六時三〇分に東京に着く。

出雲4号は、一五時三〇分に浜田を出て、翌日の午前六時五八分に東京に着く。

「午前八時に近い時間に着くには、あとの『出雲4号』のほうですね」

と、亀井がいう。

「そうだがね。『出雲4号』のほうは、肝心の香住に停車しないんだ」

「すると、早く着く『出雲2号』に乗ったことになりますか？」

「と、いいたいんだが、気になるのは、豊岡で殺された女のことなんだ。彼女は、豊岡に田代ふみが住んでいると思っていたらしい。もし、その思い込みが事実とすると、『出雲4号』に乗ったということ

も考えられるんだ。豊岡には、両方の列車が停まるからね」

「両方の列車に当たってみましょう。車掌が三名は乗務していたはずですから、田代ふみを見ているかもしれません」

「それに、『出雲4号』のほうには食堂車がついている。その従業員にも当たってみてくれ。彼女が、車内で食事をしているかもしれない」

と、十津川はいった。

3

亀井と西本たちは、八月八日から九日にかけて、「出雲2号」と「出雲4号」に乗務した車掌と食堂車の人間に、会いに出かけた。

「出雲2号」のほうではなく、「出雲4号」のほうに反応があった。

帰って来た亀井は、十津川に、

「『出雲4号』の専務車掌の一人が、田代ふみを覚えていてくれました」

と、眼を輝かせていった。

「やっぱり、『出雲4号』のほうか」

「今井という五十四歳の専務車掌です。列車が鯰海を過ぎたころ、洗面所で顔を洗っていたお婆さんが、今井専務車掌を呼び止めていろいろと質問した。それを覚えていたんだそうです」

「どんな質問をしたのかね？」

「東京に着く時間を、まず、きいたそうです。たいていの乗客がする質問だということです。それだけなら印象に残っていなかったが、そのあとで、東京に丸の内というところはあるかとか、そこには大きな会社はあるのかといったことを、矢つぎ早にきかれたと、いっています」

「なるほどね」

「そのあと、下手くそな地図を見せられたとも、いっていました」
「例の地図かな？」
「そう思いました。今井車掌は、何かの裏に書いてあったといいますから。その地図を見せて、これが、間違っていないかどうか、きいたそうです」
「それで、今井という車掌は、どう答えたのかね？」
「地図は、だいたい合っていたから、これでいいと、いったそうです。ただ、あとで考えると、八重洲口と丸の内口が反対になっていたような気がするとも、今井車掌は、いっていました」
「それで、田代ふみは、最初、八重洲口に降りてしまったのかもしれないな」
「私も、そう思います」
「彼女が、どこから乗ったかわからないのかね？」
「それは、今のところわかりません。それから、食堂車の従業員のほうは駄目でした。田代ふみを見たという人間はいません」
「食堂車は、豊岡辺りで営業を停止するのかもしれないね。豊岡着が午後九時を過ぎているからね」
「それに、彼女のようなタイプは、食堂車を使わずに駅弁を使うんじゃないかと思います」
「そうだな。これで、田代ふみが、『出雲4号』で上京したことだけはわかったね」
「香住には停車しませんから、城崎か豊岡で乗ったことになりますが」
「そこが問題だな。やはり、田代ふみは、豊岡に何か関係があるのかもしれない」
「あるとすると、どういうことでしょうか？」
「それが、わからないんだ。兵庫県警に、調べてもらえば、何かわかるかもしれん。もう一つ、『出雲4号』で上京した田代ふみに、連れがいたかどうかも知りたいね」
「今井専務車掌は、自分に質問していたときは、彼

女は、ひとりだったといっていますが、もう一度、聞き込みにいってみます」
「そうしてくれ。どう考えても、犯人は、彼女と一緒に上京したに違いないんだ」
と、十津川はいった。
「今井車掌の話では、田代ふみは、6号車に乗っていたようなので、その線で何かわかるかもしれません」
と、亀井がいった。

4

十津川は、すぐ、兵庫県警豊岡署にいる仁科警部に連絡を取った。
「田代ふみは、『出雲4号』で上京したことは間違いありません。とすると、彼女は、城崎か豊岡から、この列車に乗ったと思われるんです」
「なるほど、そうすると、田代ふみは、豊岡に住居があることも考えられるわけですね」
電話の向こうで仁科の声がはずむのがわかった。
「そこが、何ともいえないんです。私と亀井刑事が、香住の町や行商列車で調べた限りでは、田代ふみは、香住のアパートに住み、行商をして働いています」
「もう一度、女が殺されていた周辺を、徹底的に調べてみますよ。田代ふみと関係のある何かがわかるかもしれません」
と、仁科はいった。
一方、田代兄妹の行方は、いぜんとして不明だった。
この大東京では、区役所に届けず、息をひそめて暮らすことぐらい簡単なのだろうか。
矢代勇一郎のほうは、少し進展があった。
矢代が姿を消す前、近くで自動車修理工場をやっている浅田という男を、銀座のクラブに誘ったこと

があった。それを、日下刑事が、調べ出して来たのである。

十津川も、浅田という工場主に会った。

「うちで、二度ばかり矢代さんの車を修理したことがありましてね。それだけのことなのに、銀座のクラブに誘ってくれたんですよ」

と、浅田は、ニコニコ笑いながらいった。

「それで、何という店に行ったんですか？」

「確か、『シオン』というクラブです。かなり高級な店でしたね」

「矢代さんは、そこの常連でしたか？」

「ママと親しい感じでしたね。こういう高級な店に、よく来るんですかってきいたら、得意そうに笑っていましたよ」

「彼は、何をしているんだと、あなたにいっていました？」

十津川がきくと、浅田は、首をひねりながら、

「ママには中央商事とかいっていたんですが、それが、よくわからないんですよ。私がきくと、いろいろと金になることをやってるんだといっていましたがね。札束を見せびらかすことがあるかと思うと、私に、二万貸してくれみたいに、いうこともありましたからね。よくわからない人でした」

と、いった。

十津川は、夜になってから、銀座のクラブ「シオン」に行ってみた。

三十坪くらいありそうな大きな店で、いかにも調度品に金をかけた感じだった。

浅田が高級なクラブといった意味が、わかる気がした。

ママは、林美代子という、まだ、三十五歳の女である。

「矢代さん？」

と、彼女は、十津川の口にした名前を、おうむ返

しにいってから、
「ああ、中央商事の矢代さんなら知っていますわ」
と、微笑した。
「中央商事？　彼は、そういっていたんですか？」
「ええ。名刺を頂きましたわ」
美代子は、その名刺を見せてくれた。
なるほど、「中央商事　専務取締役　矢代勇一郎」と、印刷されている。自宅は、世田谷である。
「中央商事というのは同族会社で、矢代さんは、社長さんの弟なんですって。だから、いつか社長になるとおっしゃっていましたわ」
「中央商事へ確かめに行ったことが、ありますか？」
「いいえ。いつも支払いはきちんとしてたから、確かめには行きませんわ。それに、サラリーマンの方は、会社に行くといやがるでしょう。特に地位のある方は」
「では、この名刺を信じていたんですか？」
十津川がきくと、美代子は、急に不安気な表情になって、
「中央商事の人じゃなかったんですか？」
と、逆にきき返した。
「何か、損害を与えられたんですか？」
「でも、一緒によく企画部長さんが見えて、支払いは、その部長さんがきちんきちんとされるんで、信用していたんですよ」
「企画部長？」
「ええ。田代さんという名前で、若いけど、いかにもエリート・サラリーマンの感じの方ですわ」
「この男じゃありませんか？」
十津川は、田代明夫の似顔絵を相手に見せた。
「ええ。この人ですわ。名刺も頂いていますけど」
「それで、何か被害がありましたか？」
「株を買いましたけど」
「中央商事の？」

「中央商事が、今度、新会社を作って、レジャー産業に進出することになったんですって。新会社の株は一株千円だが、すぐ値上がりするし、簡単には手に入らない。五万株ぐらいなら用意してあげられるといわれたんですよ」
「それで、買ったんですか？」
「ええ」
肯きながら、彼女の顔色は変わっていた。
「簡単に信用してしまったんですか？」
十津川がきくと、美代子は、首を横に振って、
「とんでもない。ちゃんと調べましたわ。中央商事が、レジャー産業に進出するのは本当だし、新会社の株が、有利な投資対象として狙われていることも確かめましたわ。株にくわしい人に聞いても、値上がりは確実だと、いわれたんですよ」
美代子は、その株券を取り寄せてくれた。
〈中央興業株式会社〉
という新会社の株券である。精巧にできていて、ニセモノとは思えない。
「矢代勇一郎とか田代明夫という男たちのことを、中央商事に問い合わせなかったんですか？」
十津川がきくと、美代子は、
「今もいったように、会社に電話するのは失礼だと思ったし、社員が新会社の株券をあっせんするのは禁じられているといわれたので、問い合わせなかったんですよ。この株券は、インチキだったんですか？」
「多分ね」
「どうしたらいいんですか？　五千万円も使っちゃったんですよ」
「いつごろ、買ったんですか？」
「今年の五月末ごろです。ねえ、どうしたらいいん

ですか？」
「彼らは、矢代と田代の二人だけでしたか？　他に仲間がいるということは、ありませんでしたか？」
と、十津川はきいた。
「若い女が一緒のことがありましたわ。矢代専務の秘書という人ですよ。スタイルが良くて美人で、いかにも大会社の秘書というタイプでしたわ」
「名前は、いいませんでしたか？」
「覚えていませんわ。さりげなく、中央商事の社内の話などしていたんです。それで、余計に信用してしまったんですわ」
「この女じゃありませんか？」
十津川は、田代有子の似顔絵を見せた。
案の定、美代子は眼を光らせて、
「この女だわ。インチキなら、すぐ、捕まえてください」
「もちろん、捕まえますよ。あなたの他にも、この株券を買った人は、いるんですか？」
十津川がきくと、美代子は、一層、青い顔になって、
「そうだわ。いろんな人にすすめて、買わせてしまったんだわ。どうしよう？」
「この辺のクラブの人ですか」
「ええ。最近、マネーゲームが流行でしょう？　銀行に預けても利子は安いし、かといって土地を買うには、今は億単位のお金が必要だわ。それで、顔が合うと、何かいいお金儲けはないかしらって、いい合っていたんです」
「それで、この株をすすめたんですか？」
「ええ。中央商事の子会社なら、絶対に大丈夫だろうと思ってですわ。これが、インチキだとわかったら、どうなるのかしら？」
美代子は、落着きを失ってしまっている。
十津川は、豊岡で殺された女のことを考えていた。

年齢は、二十七、八歳。高価な指輪や腕時計をつけていた。

今、眼の前にいる美代子と同じように、クラブのママかホステスではないのだろうか？

彼女も、矢代たちにニセの株券を買わされた。

しかし、矢代も田代兄妹も、相ついで姿を消してしまって、捕まえることができない。

必死になって探した末、田代兄妹の母親が豊岡にいることを確かめて、乗り込んだのではないのか。

彼女が、林美代子の紹介で買ったとは思えない。それなら、まず、美代子に文句をいって来ただろうからである。

十津川は、問題の株券を一枚、美代子から借りて帰った。

5

翌日、十津川は、その株券を証券会社の知人に見せた。

大学時代の松野（まつの）という友人である。松野は、本物の「中央興業」の株券を見せてくれた。

「ニセモノとしては、よくできてるよ」

と、松野はいった。

素人の十津川には、まったく同じように見えた。

「このくらい精巧なものを刷るには、金がかかるだろうね？」

十津川がきくと、松野は、笑って、

「それは、印刷の専門家にきいたほうがいいね。おれにはわからんよ。それより、中央興業のニセの株券が出まわっているという噂は聞いていたんだ。それが、これか」

「君も、見るのは初めてなのか？」

「ああ、初めて見るんだ。買った当人が、まだ、ニセモノを買ったと気付かずにいるんじゃないかな」

「中央興業は、ニセの株券が売られていることは知っているんだろうか？」
「噂は聞いていると思うよ。こういうことには、企業は、神経質だからね」
と、松野はいった。
「本物の中央興業の株は、値上がりしそうなのか？」
「値上がりするね。君が買いたいんなら推薦するよ」
と、いって、松野は笑った。
十津川が、捜査本部に戻って亀井に話すと、亀井は、
「これで、だいぶ事件の姿が、見えて来ましたね」
と、嬉しそうに、いった。
「私も、そう思っているんだ。矢代勇一郎という男と田代兄妹が組んで、株券サギを計画した。だが、ニセの株券を印刷するのに金がかかる。そこで、矢代が田代ふみの親心を利用して、五百万円を巻きあげた。それが四月の上旬だ。そのあと、中央興業のニセの株券を印刷し、金のあるクラブのママなどに売りつけ、姿を消した」
「それの結果として、東京と豊岡で二つの殺人事件が起きたということでしょうか？」
「そう思うね」
「しかし、彼らは、大金を手に入れたわけでしょう？　それなのに、なぜ、殺人を犯したりしたんですかね？　しかも、殺された田代ふみは、一味、田代兄妹の母親ですよ」
「その理由は、私にもわからないが、一つだけ、はっきりしているのは、彼らが、まだ、海外へ逃げ出していないということだ。捕まえるチャンスは、残されているよ」
と、十津川はいってから、
「カメさんのほうは、どうだね？」
「一つだけ、収穫がありました。田代ふみは、『出

雲4号』の6号車に乗っていたわけですが、同じ6号車に五人のグループが乗っていたんです。山陰に旅行して来た若者のグループです」

「よくわかったね」

「今井という、この前の専務車掌ですが、車内で親切にしてくれたといって、このグループの一人から礼状が来たんだそうです。それで、彼らの住所や名前がわかったというわけです。これから、日下君と、彼らに会って来ようと思っています。同じ6号車ですから、田代ふみのことを何か覚えているかもしれません」

亀井は、そういって、若い日下刑事を連れて出かけて行った。

二人が、戻って来たのは昼過ぎである。

「相変わらず、外は、暑いですよ」

と、亀井は、顔をしかめて、汗を拭いてから、十津川に、

「彼らは、田代ふみのことをよく覚えていましたよ」

「そうか」

「写真まで撮っていました」

亀井が、机の上に置いた三枚の写真には、二十代の若者と一緒に、田代ふみが写っていた。

「彼らは、田代ふみから行商の話を聞いて、とても面白かったといっていました」

「他には、何を覚えていてくれたのかね？」

「彼らは、松江から、『出雲4号』に乗ったんです。田代ふみと話をしたわけですが、彼女は豊岡から乗ったといっていたといっています」

「やっぱり、豊岡か」

「それから、田代ふみの連れの件ですが」

「何か、わかったかね？」

「翌朝、グループの一人が、眼をさまして顔を洗いに行くと、田代ふみが中年の男と話をしていたそう

です」
「彼女が、今井専務車掌に話しかける前だね？」
「そうだと思います。男のほうは、きちんと背広を着て鞄をさげていたそうです。田代ふみは、その男に向かって、しきりに頭を下げて、何か頼みごとをしているように見えたと、いっています」
「それで、その男は、どうしたのかね？」
「横浜で降りて行ったそうです」
「横浜で降りたのか？」
「そうです」
「その男の顔かたちや体型も聞いて来たんだろうね？」
「どうも、それが、矢代勇一郎のように思えるんです。よく似ているんです。ただ、矢代は、田代ふみから五百万円ふんだくった男ですからね。その男に、田代ふみが、ものを頼むというのは妙なんですが」
と、亀井はいった。
「それは、おかしくないよ。田代ふみは、矢代に五百万円を手渡さず、送金したんだとすれば、矢代の顔は知らないわけだよ。矢代が、名前をいわず、息子さんの上司だとだけいえば、田代ふみは、頼りに思うんじゃないのかね」
「そうですね。それなら理屈に合います」
「横浜で降りたというのは、気に食わないね。てっきり、犯人も田代ふみと一緒に、東京駅までやって来たんだと思っていたんだが」
「これから、どうしますか？」
「中央商事本社へ行って来ようと思っている」
と、十津川がいうと、亀井は、変な顔をして、
「しかし、警部、彼ら三人は、中央商事の社員じゃないんですよ。そう自称していただけのことです」
「わかってるさ。だが、なぜ、中央商事を利用したのかと思ってね。なぜ、他の商社じゃなかったのか」

「どこかで、中央商事と関わりがあったというわけですか？」
「あるのではないかと思うんだ。中央商事を憎んでいたということだってあり得るよ」
「行ってみましょう」
と、亀井がいった。
二人は、丸の内にある中央商事の本社を訪ねた。
沼田という総務部長に会った。
会社のことには詳しいという感じの男だった。
十津川は、まず、矢代たちのことを、何の説明も加えずに話した。殺人事件をのぞいてである。話し終わってから、
「どう思われますか？」
と、十津川はきいた。
沼田は、無表情に、
「どうも、こまったものですね」
「それだけですか？」
「他に、いいようはありませんよ。向こうは勝手に、わが社の名前を利用しているわけですから」
「私は、何かの意味で、矢代勇一郎、田代明夫、田代有子の三人が、中央商事と関係があったのではないかと思っているんですよ。この三人は、前に中央商事に勤めていたんじゃありませんか？」
「そんなことはないと思いますがねえ」
「調べてくれませんか」
「何をですか？」
「わかっているでしょう。今いった三人が、かつて中央商事にいたことがあるかどうか、調べてほしいんですよ。退職者のリストがあるんじゃありませんか？」
「そりゃあ、ありますが」
「では、そのリストを見せてください」
「お見せしなければいけませんか？」
「実は、これは殺人事件が絡んでいるんですよ。ぜ

ひ、見せていただきたいですね」
「ちょっと待ってください」
沼田部長は、席を立つと、十津川たちを残して応接室を出て行った。
しばらく待たされた。
二十分近くも経って、やっと沼田は、戻って来た。
彼は、堅い表情で腰を下ろすと、
「申しわけありませんが、見つからないんですよ」
と、いった。
「見つからないって、何がですか？」
「退職者のリストがです。ずいぶん探したんですが見つかりません。申しわけありませんが」
「しかし、どの会社でも、毎年、社員名簿を新しく作り直すでしょう。それに、退職者のページもついているはずですよ。それでいいんですよ」
と、十津川はいった。
だが、沼田は、顔の表情を変えずに、というより、表情を動かさずに、
「申しわけありませんが、その社員名簿が見つからないんです。見つかり次第、お電話を差しあげますので、今日のところはお帰り願えませんか」
「しかし、部長さん、社員名簿というのは、毎年、沢山印刷して、置いておくものじゃありませんか？」
十津川は、食いさがった。
「そのとおりなんですが、なぜか見つからないのです。今、総務部の者を督励して探させたんですが、どうしても見つかりません。見つかりましたら警部さんのところに、お持ちします。それはお約束しますよ」
沼田は、見つからないを繰り返した。
のれんに腕押しの感じだった。
（明らかに嘘をついている）
と、十津川は思った。が、まさか、亀井と一緒に、総務部の部屋を探し廻るわけにはいかなかった。

「嘘をついては、困りますね」
亀井が、むっとした顔で睨んだ。が、沼田は、押し黙ったままである。
そのまま、五、六分が過ぎた。
「カメさん、帰ろう」
と、十津川は、急に立ち上がった。

6

戻る道でも、亀井は、腹を立てていた。
「あの部長は、明らかに嘘をついていますよ。退職者のリストがないなんて信じられません。どこの会社だって作っています」
「ああ、そのとおりさ」
「それを見せないというのは、どういうことなんですかね」
「多分、その退職者リストに、矢代勇一郎たちの名前があるんだろう」
「三人全部のですか？」
亀井がきく。
「彼らの一人ぐらいがリストにのっているんなら、平気でわれわれに見せたと思うね。そのくらいの偶然なら、明らかに問題にはならないからだ。しかし、三人全部がこの中央商事の退職者だとなると、何かあると思う。だから、見せなかったんだ」
「それにしても、むかつく部長でしたね」
と、亀井が顔をしかめた。
十津川は、笑って、
「あの部長は、ひたすら会社に忠実なだけだよ。きっと、上のほうで、見せるなといったに違いないんだ。二十分近くも彼は、戻って来なかったからね」
「矢代勇一郎、田代兄妹のことを調べられると、何か中央商事が困るようなことがあるんですかね？」
「何かあるんだと思うね。だから、あの部長が、必

死になってリストを見せるのを拒否したんだし、矢代たちも中央商事の名前を執拗に使っていたんだと思うね」

と、十津川はいった。

「令状を貰って、退職者リストを探し出しますか？」

亀井がきいた。

十津川は、首を横に振った。

「別に、中央商事が犯罪を犯しているという証拠があるわけじゃないし、向こうも、リストが見つからないといっているだけだからね。令状を取ってというわけにはいかないよ」

「しかし、むかつきますよ」

「何とかして、中央商事の社員名簿を手に入れることにしよう。それに、退職者の名前ものっていると思うんだよ。大きな会社だから手に入ると思うね」

と、十津川はいった。

その日から、中央商事の社員名簿を手に入れる作業が始まった。

マーケットリサーチの発達した今の社会では、大会社の社員名簿は、金さえ出せばそのコピーが手に入るようになっているようだった。

十津川は、あるリサーチ会社から、中央商事の社員名簿を手に入れることができた。

分厚い、立派な社員名簿である。

その別紙のところに、「退職者一覧」というページがあった。

アイウエオ順に、名前だけがのっている。

十津川は、「タ」のページと「ヤ」のところを見てみた。

やはり、のっていた。

矢代勇一郎

田代明夫

田代有子

この三人は、中央商事の退職者なのだ。しかも、

同じ三年前に、揃って退職していることがわかった。
「何かありますね」
と、亀井もいった。
あの総務部長に、もう一度、会ったところで、何も聞けないだろう。
退職者リストさえ見せなかった相手である。何もなかったで、押し通すに決まっていた。
（どうしたものだろうか？）
と、十津川が考え込んでいたとき、兵庫県警の仁科警部から電話が入った。
仁科の声は、はずんでいた。
「十津川さん。見つけましたよ！」
と、いきなりいわれて、十津川は、一瞬、何のことかわからなくて、
「え？　何を見つけたんですか？」
「田代ふみの住居を見つけたんです！」

第四章　寝台特急「出雲（いずも）」

1

「やっぱり、彼女の住居は、豊岡にもあったんですか？」
十津川も、勢い込んで、きいた。
「そうなんです。ただ、住居といっていいかどうかは、わかりません。田代ふみは、現場付近の家の離れを借りていたんです。八畳一間ぐらいの部屋です。なんでも、その家では、受験期の娘のために庭に勉強部屋として建てたものだということです。トイレに、簡単な洗面所もついています。その娘が東京の

大学へ行ってしまって空いたのを、田代ふみが借りたというのです」
「彼女は、そこを何に使っていたんですか？　そこに、住んでいたんですかね？　住所は、香住のアパートのはずなんだが」
「住居じゃないんですよ。そこに住んでいて表札が出ていれば、われわれも、すぐ、見つけられたんですが、田代ふみは、その離れを物置に使っていたんです」
「何の物置ですか？」
「彼女は、香住から行商列車に乗って、だいたい豊岡市内で商売をしていました。ナマの魚は、毎朝、例の列車で運んでくるんですが、カツオ節とか干物など保存がきくものは、現地から配達してもらって、その離れに積んでおくわけです。そうしておけば、いちいち香住まで戻って運んで来なくてすむし、時には、その離れに泊まることもできるわけです。いかにも働き者の田代ふみらしいやり方なんです」
「なるほど」
「行ってみましたが、完全な離れで、入口には錠がおりていましたね」
「表札は出ていないんですか？」
「出ていません。持ち主は、酒井という人なんですが、田代ふみは、酒井さん宛に干物なんかを送っていて、この家の奥さんが心得ていて、そうした品物は、すべて離れに入れておいたわけです」
「今、その離れは、どうなっています？」
「中に入ってみたら、八畳の部屋には、ダンボールに入れた干物やカツオ節なんかが、一杯、積みあげてありましたよ。それから、布団も一組だけありましたね。ときどき、田代ふみが寝泊まりしたんだと思います」
「豊岡で殺された女は、そこに田代ふみが物置を借りていることを知っていたわけですね？」

「そう思います。ただ、正確な場所は知らなかったんでしょう」
「その離れにあった干物なんかは、高価なものですか？」
「そうですね。全部で、せいぜい五、六十万円のものだと思いますよ」
「どうも、わかりませんね」
「何がですか？」
「殺された女の行動ですよ。彼女は、すごく高い宝石なんかを身につけていたわけでしょう？」
「そうです。全部で五、六百万円近いものを身につけていたと思いますね」
「彼女は、多分、矢代たち三人にニセの株券をつかまされた一人だと思うんです。少しでも取り戻そうとして、豊岡まで出かけたに違いないと思いますがね」
「その点は、同感ですね」
「とすると、五、六十万円のものしかない物置に行っても、どうしようもなかったんじゃないですかね」
「理屈としては、そうですがね。女にしたら、少しでも損した金を取り戻したくて、田代兄妹の母親を訪ねて行ったんじゃありませんかね」
「矢代勇一郎や田代兄妹は、その離れのことを知っていたんですかね？」
「持ち主の酒井の奥さんにきいてみたんですが、田代ふみは、三年前から借りているようです。それから、一度、田代明夫と思われる男が来たことがあったそうです」
「その離れというか物置というかですが、家主の酒井さんに知られずに入ることはできるんですか？」
「できますよ。門を入って右に、問題の離れがあるんです。門は、カンヌキがかかるようになっていますが、酒井さんは、ほとんどかけてないということ

ですよ。物置には、酒井さんのものは何も置いてないからでしょうね」
「すると、誰かが、そこへ入ったとしても、酒井さんが気がつかないことがあり得るわけですね？」
「それは、あるでしょうね。ただ、今日行ったときは、錠がおりていましたからね。錠をこわした形跡もなかったですよ」
「それで思い出したんですが、東京丸の内で殺されていた田代ふみですが、所持品がすべて奪われていたんです。信玄袋を持っていたはずなのに、それがありませんでしたからね。その中には、きっと、香住町のアパートの鍵や、その離れの鍵も入っていたと思うんですよ」
「なるほど」
「田代ふみを殺した犯人は、その二つの鍵を持っているはずなんです」
「とすると、その鍵を使って、あの離れに出入りしたかもしれませんね」
と、仁科は、いってから、
「しかし、あんな干物を持ち出したって、仕方がないでしょう。今もいったように重いばかりで、全部、持ち出しても、五、六十万のものですからね」
「そういわれれば、そうですが――」
「それより、こちらとしては、一刻も早く殺された女の身元を知りたいですよ。東京の水商売の女のような気がするので、今度、私がそちらに伺います」
と、仁科はいった。

2

十津川は、矢代たち三人が、同じ時期に中央商事を辞めたことに注目した。
（何かあったに違いない）
と、思う。

ひょっとすると、そのことが今度の事件の根になっているのかもしれない。

沼田部長にきいても、真相は話してくれないだろう。

他の社員も、あとが怖いから、話してくれるかどうかわからない。中央商事にとって、まずいことがあったとすれば、なおさらである。

すでに中央商事を辞めている人間が、何か知っていれば話してくれるのではないか。

手に入れた職員録の退職者リストには、矢代たちと同じ時期に中央商事を辞めた者の名前もある。

だが、住所や電話番号がのってないのだ。

十津川は、彼らの名前と電話帳の名前とを照合してみた。

もちろん、東京都の電話帳に同じ名前があったからといって、退職者本人とは限らない。同名異人の場合もあるし、本人が退職後も東京にいるとは限らないからである。

それでも、三人の名前を十津川は、マークした。

電話帳と、退職者リストの両方にある名前である。

十津川は、その三人に電話をかけてみた。

二人は、中央商事とは関係ないといったが、「森田裕介」という男が、十津川の質問に対して、

「ああ、前に中央商事にいましたよ」

と、電話口でいった。

十津川と亀井は、その森田に、新宿の喫茶店で会った。

三十二歳で、三年前に中央商事を辞めたあとは、退職金をもとに小さな喫茶店を三鷹でやっているという。

「矢代勇一郎さんなら覚えていますよ」

と、森田は、十津川に向かっていった。

「当時、彼は、どんな地位にいたんですか？」

「企画部の下にある計画課長をしていましたよ」

「企画部の下の課長ですか」
十津川と亀井は、顔を見合わせた。矢代は重役の名刺を作り、田代明夫は、企画部長を自称していた。それは、三年前の矢代の地位と関係があるのか。
「それで、矢代課長は、なぜ三年前に退職したんですかね？」
と、亀井がきいた。
森田は、コーヒーカップを下に置き、煙草に火をつけてから、
「正直にいって、僕も、はっきりしたことは知らないんですが、あのころ中央商事の社内に、ごたごたがあったんですよ。それに関係して辞めたんじゃないですかね。僕は、それと無関係に、サラリーマン生活が嫌になって退社したんですが」
「どんなごたごたですか？」
と、十津川がきいた。
「中央商事というのは、中堅の商社で優良会社ということになっていますが、もともと同族会社みたいなところがありましてね。会社の主要部門は、野見山一族でおさえているんです」
「それは、聞いたことがありますよ」
「野見山社長は、立派な人ですが、中には駄目な人間でも一族の一人ということで部長とか重役に据えてしまう。その一人が企画部長の君島という男でしてね」
「矢代課長の上にいた男ですね」
「そうです。あのころ、三十五、六歳の若さでしたよ。社長の親戚で、一応、頭も切れるんですが、問題ばかり起こしていましたね」
「どんな問題でした？」
「女性問題で、ときどき週刊誌なんかに書かれていたのは、知っていますよ。社内では評判でしたからね」
「今は、どうしているんですか？」

「新しい中央興業に出て行ったという話を聞いたことがありますが、もし、本当だとすると、社長が持て余して、新会社に放り出したんじゃありませんかね」

「その君島企画部長のスキャンダルと、矢代課長の退社とは、何か関係があるんですかね？」

十津川がきくと、森田は「さあ」と、首をかしげて、

「僕が知ってるのは、矢代課長が君島部長の腰巾着だったことだけですよ」

「それは本当なんですか？」

「これも社内では評判でしたから、みんな知ってますよ。矢代さんにしてみれば、君島部長にくっついていれば安心だと思っていたんじゃありませんか」

「それなのに、彼は、三年前に退社してしまった」

「そうなんですよ。だから、かえって何かあるんじゃないかと思いましたがね。結局、わからないんです」

「どんなことが、考えられますか？」

と、十津川はきいた。

「何ともいえません。僕にとっちゃあ上のほうのことですからね。矢代さんの退社が突然だったので、いろいろと噂が出たのは覚えていますがね」

「どんな噂ですか？」

「矢代さんが君島部長のだらしない面を知り過ぎてしまって、それが煙たくなったので、強引に追い出したんじゃないかという噂もありましたね。その代わり、退職金は規定の二倍払ったとか」

「他には、どんな噂ですか？」

「ひどい噂もありましたよ。君島部長が、会社の若い女に手をつけて妊娠させた。そのスキャンダルが公けになったら大変なんで、腰巾着の矢代課長に彼女を押しつけた。仕方なく、矢代さんは、大金を貰って会社を辞めたんだといった噂です。このほうは、

あんまり真実性がありませんがね」
と、森田は笑った。
しかし、十津川は、このほうが、ひょっとすると事実なのではないかと思った。
田代有子のことが、あるからである。森田のいう会社の若い女というのは、田代有子のことだったのではないのか。そろそろ、矢代勇一郎と田代兄妹の結びつきの理由が納得できるのではないだろうか。
「会社を辞めてから、矢代さんに会ったことはありませんか？」
と、亀井がきいた。
「友人に連れられて、銀座へ飲みに行ったとき、似た人とすれ違いましたよ。あれは、矢代さんだったのかな」
と、森田はいっただけだった。

3

翌日、兵庫県警の仁科警部が上京して来た。
持参したのは、いぜんとして身元不明の被害者の似顔絵と、彼女が身につけていた宝石、腕時計だった。
おそらく、こうした宝石やスイス製の腕時計は、東京の有名店で買ったものだろうから、そうした店を廻って歩けば、買った人間がわかるのではないか。
仁科がこう考え、十津川も賛成した。
十津川は、彼を案内して、銀座周辺の宝石店を廻ることにした。
夏本番で、このところ連日の猛暑である。太っている仁科は、汗だらけで十津川と一緒に歩いた。
有名宝石店を一軒ずつ廻ったのだが、なかなか反応がなかった。その経過でわかったのは、こうした

有名店では、被害者が身につけていた宝石などは、高級品には入らないということである。

「さすがに東京ですな」

と、仁科は妙な感心の仕方をしていた。専門店の次はデパートだった。

Mデパートの時計、宝石売場で、やっと最初の反応があった。

宝石ではない、腕時計のほうだった。

売場の女性が、仁科の出したピアジェの腕時計を見、ナンバーを調べてから、ここで売ったものに間違いないといった。

「今年の五月に、お売りしたものですわ」

と、四十歳ぐらいの女子店員が、しっかりした口調でいった。

「買った人の名前は、わかりますか？」

「アフターケアが大切なので、お得意様の名簿にのせさせていただきました」

彼女は、その名簿を見せてくれた。

〈東京都渋谷区神宮前　Kマンション内

伊東(いとう)けい子〉

「何をしている人か、わかりますか？」

仁科がきいた。

「そこまでは、わかりませんけど」

「では、これを見てください」

仁科は、持って来た被害者の似顔絵を店員に見せた。

彼女の表情が動いた。

「この方ですわ」

「彼女は、ひとりで来たんですか？」

「男の方と一緒でしたわ。代金も、その方が小切手で払ってくださったんです」

「矢代勇一郎か田代明夫という名前じゃありませんか？」

十津川がきいた。
店員は、首を振って、
「お名前は、君島弘様ですわ」
「君島？」
十津川は、その名前に記憶があった。昨日、中央商事を辞めた森田という男が教えてくれた名前である。
「何をしている人ですか？」
十津川がきくと、店員は、
「名刺を頂きましたわ」
と、いい、取り出して見せてくれた。
〈中央興業副社長　君島　弘〉
と、ある名刺だった。
中央商事の企画部長から、子会社の副社長になったらしい。
森田にいわせれば、持て余して新会社に押し込んだということになる。
十津川は、仁科に原宿の地図を描いて渡してから、自分は、経済新聞で働いている友人に会った。
「中央興業という新しい会社のことを教えてもらいたいんだ」
と、十津川は、小林というその友人に会うなり頼んだ。
小林は、笑って、
「何だい？　あの会社で殺人事件でも起きているのか？」
「ただ、知りたいんだ。中央商事の子会社で、レジャー部門への進出を狙っているというのは知ってるんだ」
「今、ああいうのがはやりでね。鉄の会社が農業に手を出したり、商社が養殖漁業に進出したりするのがね。中央興業もその一つさ。しかし、評判はいいから、成功すると思うね」

「副社長に、君島という中央商事の企画部長がなっているが、これは、どうなんだろう？」
「いろいろと知ってるじゃないか。君島という男は、前から中央商事じゃ持て余し者でね。中央商事としては、体よく新会社に放り出したということだろうな。中央興業の副社長の地位は、完全な閑職だからね」
と、小林は、笑った。
「彼の給料は、どのくらいなんだ？」
「そこまでは知らないが、せいぜい五、六十万くらいのものだろう」
「君島は、副社長の地位に、満足しているんだろうか？」
「満足しているはずがないじゃないか。何もさせてもらえないんだから」
「すると、君島は腹を立てているのかな？」
十津川がきくと、小林は、「だろうね」と、いった。
「自分じゃあ、野見山一族だという自負がある。ところが、閑職に放り込まれてしまったんだ。まったく面白みのない地位だよ」
「じゃあ、自分を子会社に放り出した野見山社長には、腹を立てているとみていいね？」
「そりゃあそうだよ。君島が、野見山社長と大ゲンカをしたという話も聞いたことがあるよ」
と、小林がいった。
だいたい、十津川が期待したような言葉を聞くことができた。
十津川が捜査本部に戻ると、仁科警部も帰って来た。
「おかげで、被害者の身元がわかりました」
と、仁科は、十津川にいった。
「何をしている女か、わかったんですか？」
「原宿のマンションで、彼女の部屋を調べて来まし

た。写真のモデルなんかをしている女です。一流のモデルではなかったみたいですが」
仁科は、彼女の部屋で手に入れた写真を見せてくれた。
ヌードになった写真もある。君島と一緒の写真もあった。
「矢代勇一郎や田代兄妹と一緒の写真は、見つかりませんでした」
と、仁科はいった。
「問題は、彼女、伊東けい子を殺した犯人が、誰かということですね」
「十津川さんは、犯人を誰だと思われますか？」
「彼女は、豊岡に行き、田代ふみの家を探していて殺されたわけですからね。田代兄妹か矢代勇一郎と考えるのが自然だと思いますがね」
「動機は何だと思いますか」
「当然、ニセの株券に関係したことだとは思いますよ。いいかえれば、ニセの株券で儲けた金ということでしょうか」
「どのくらいの金額でしょうか？」
「銀座のクラブのママが、一人で、五千万円損したといっていますからね。おそらく何億円という金額でしょうね」
「その金のために、田代ふみが殺され、伊東けい子が殺されたということですかね？」
「そうだと思いますね」
「矢代や田代兄妹は、どこにいるんですかね？」
「私も、それを知りたいんですがね」
と、十津川はいった。
仁科は、その日、寝台特急「出雲1号」で、帰ることになった。

4

十津川と亀井が、東京駅に仁科を送りに行った。
寝台特急「出雲1号」は、一八時一五分東京発で浜田行きである。
仁科の降りる豊岡には、明日の午前三時三九分に着く。少し早過ぎるが、被害者の身元がわかった今、仁科は、一刻も早く豊岡署に戻りたがっていた。
東京駅のホームには、午後六時に着いた。
仁科の乗る「出雲1号」は、すでに9番線に入線していた。
十一両編成で、個室寝台が一両、B寝台が九両、それに食堂車が一両である。
「矢代や田代兄妹の居所がわかり次第、知らせますよ」
と、十津川は、ホームで仁科にいった。
まだ、ホームには西陽が当たっている。
明るい中で見ると、ブルーの車体も夜行列車という感じはない。
普段は五十パーセントくらいの乗車率なのだが、今日は、ほぼ満員だった。
5号車に、仁科が乗るのを見送ったとき、ホームに発車のベルが鳴りひびいた。
十津川は、突然、亀井の腕をつかむと、
「われわれも乗ろう！」
と、叫んで、発車寸前の列車に飛び乗った。
亀井も仁科も、びっくりしている。
「どうされたんですか？」
と、亀井がきいた。
ドアが閉まり「出雲1号」は、ゆっくり動き出していた。
十津川は、「ふうッ」と、小さく息を吐いてから、
「今、田代有子を見たような気がしたんだ」
「どこにですか？」
亀井がきき、仁科も十津川の顔を見た。
「ここは5号車だったね？」

「そうです」
「それなら、隣りの4号車の窓だよ。私の勘違いかもしれないが、窓に田代有子の顔を見たんだよ」
と、十津川はいった。
「どうしますか？　田代有子がいれば、兄の明夫も乗っていると見なければなりませんが」
仁科が、じっと十津川を見た。
「まず、車掌に頼んで、乗客の中に、本当に田代有子がいるかどうか調べてもらいます。兄の田代明夫と矢代勇一郎もです。対応は、それが、はっきりしてからでいいでしょう」
と、十津川はいった。
三人は、7号車の乗務員室に行き、そこで山下という車掌長に会った。
十津川が警察手帳を見せ、協力を求めた。
「何をすれば、いいんですか？」
山下車掌長は、緊張した顔できいた。
「車掌は、何人いらっしゃるんですか？」
「私を入れて三人です」
「間もなく、車内改札ですね」
「そうです」
「そのとき、乗客の中に、この三人がいるかどうか調べてもらいたいんです。どこ行きの切符かもです」
十津川は、矢代と田代兄妹の似顔絵を相手に渡した。
山下車掌長は、それを二人の専務車掌に見せた。
「やりましょう」
と、山下はいった。

5

すぐ、三人の車掌による車内改札が始められた。
十津川たちは、7号車で、その結果を待った。

横浜に着くまでには、車内改札が終わって、山下車掌長と二人の専務車掌は、7号車に戻って来てくれた。

「三人とも、この列車に乗っています」

と、山下車掌長がいった。

北川という専務車掌は、田代有子の似顔絵を指で叩いて、

「この女性は、4号車に乗っています。切符は、豊岡までになっています」

と、いった。

もう一人の青山という専務車掌は、

「この矢代という男が、3号車の中ほどの席にいるのを見つけました。切符は、同じく豊岡です」

「私は、2号車で、田代明夫という男を見ましたよ。行き先は、やはり豊岡でした」

と、山下車掌長がいった。

「ばらばらに、いるわけか」

亀井が呟いた。

「そうらしいね」

「逮捕しますか？」

「令状はないし、それに行き先は豊岡とわかっているんだ。あの三人が豊岡に、何しに行くのか、それを確かめたいんだ」

と、十津川がいった。

「それに賛成ですね」

と、仁科が肯いた。

仁科は、言葉を続けて、

「おそらく豊岡では、田代ふみが借りていた離れに行くつもりだと思いますよ」

「同感ですね」

と、十津川がいった。

列車は、横浜、熱海と停車して行く。

十津川たちは、食堂車へ行き、夕食をとることにした。

食堂車は、8号車である。
一番奥のテーブルに腰を下ろし、思い思いに注文をした。
「彼らは、豊岡に、何しに行くんですかね？」
亀井がきいた。
十津川は、煙草に火をつけてから、
「さっき仁科さんがいったように、田代ふみが借りた離れというか物置というか、そこに彼らは行くんだと思うね」
「まさか、魚の干物を取りに行くわけじゃないと思いますが」
「まさかね」
と、十津川は笑って、
「田代ふみは、そこに、魚の干物なんかをダンボールに入れて送っておいた。家主の酒井という人が、離れに入れておいてくれるからだ。矢代や田代兄妹は、それを利用したんだと思うね。彼らは、ニセの株券をクラブのママなんかに売りつけて、何億という金を手に入れた。しかし、その大金を手元に置くのは危険と思って、ダンボールに入れ、田代ふみの名で魚の干物のように見せかけて、豊岡に送りつけておいたんだと思う。何も知らない酒井という人は、今までどおり、送られて来たダンボールの箱を離れに入れておいたんだろう」
「あのダンボールの中身を調べておけばよかった。全部魚の干物だと思ったので、一箱調べただけでそのままにしておいたんです」
仁科が、残念そうにいった。
「矢代と田代兄妹以外は、誰も盗みませんよ」
と、十津川はいった。
「伊東けい子が殺されたのも、そのせいだったんですね」
仁科が、肯くようにしていった。
「この列車の豊岡着は、明日の午前三時三九分です。

まだ、真っ暗です。彼らは、暗いうちに自分たちで金を手に入れる気だと思いますね」

十津川は、仁科にいった。

「その瞬間に逮捕したいですね」

仁科がいった。

6

「田代有子が入って来ました」

ふいに、亀井がささやいた。

十津川は、わからないように入口に視線を走らせた。

田代有子が入って来て、入口近くのテーブルに腰を下ろした。

間を置いて、兄の明夫も入って来た。

偶然のような顔で、兄と妹は向かい合って腰を下ろした。

ビールを飲んでいる。

五、六分して、矢代勇一郎が顔を見せた。知り合いのはずなのに、素知らぬ顔をして別のテーブルに腰を下ろしている。

彼らは、豊岡に着くまで、この調子でいるのだろうか。

一時間近くして、彼らは、食堂車を出て行った。

そのときも、わざとばらばらに出て行った。

「ずいぶん苦労してますね」

と、仁科が笑った。

「彼らも、豊岡で降りるまで、大人しくしていると思いますね」

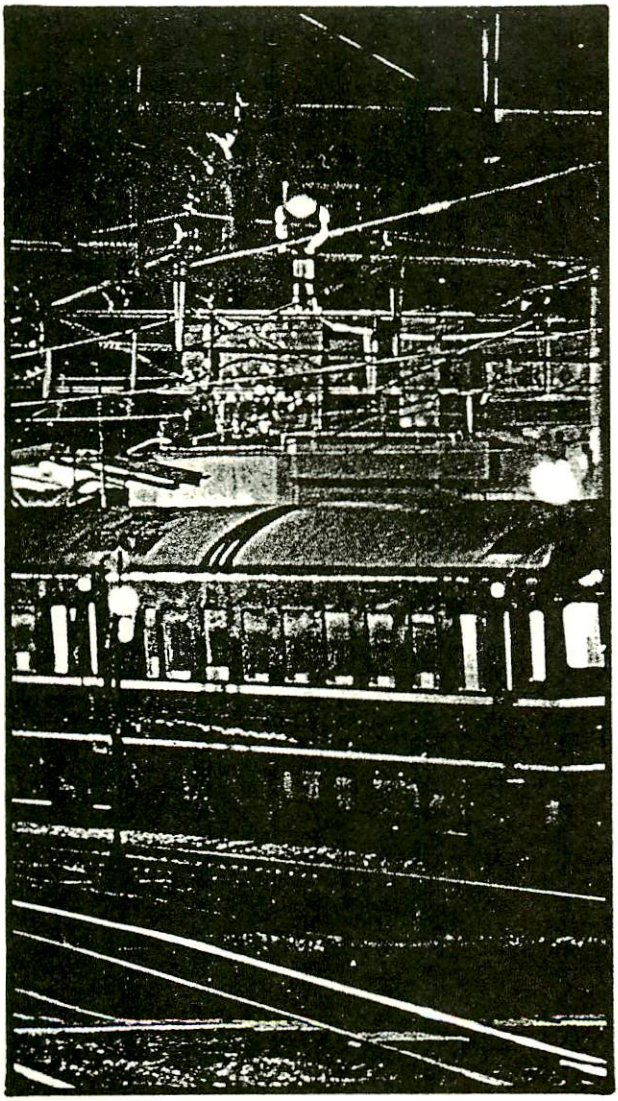
十津川は、腰を上げながらいった。

「われわれも、明日に備えて寝ておきますか」

と、仁科がいった。

仁科は、5号車の自分の寝台に行き、十津川と亀井は、山下車掌長に、最後尾の11号車に寝台を二つ

用意してもらった。
十津川は、眼を閉じて寝台に寝転がった。
豊岡着が三時三九分と早いので、寝過ごすのが心配だった。
それに緊張もしているので、熟睡はできそうもない。
列車が停まるたびに眼を覚まし、腕時計に眼をやった。
二三時〇五分に名古屋を出ると、次は福知山の午前二時三六分である。
十津川は、少し眠った。
福知山に着いたところで眼をさました。
下の寝台に寝ている亀井も、眼を開けて起き上がった。
「どうも眠れませんね」
「豊岡は、次だったね？」
「そうです。あと一時間です」
と、亀井がいった。
うとうとしたり、トイレに立ったりしているうちに、列車は、豊岡に着いた。
定刻の三時三九分である。まだ、外は、真っ暗だった。
ホームの明かりだけが、眩しい。
ここで、十二、三人の乗客が降りた。
その中に、矢代勇一郎の姿があったが、なぜか田代兄妹の二人がいなかった。
「出雲1号」は、豊岡に二分停車である。
列車から降りた乗客は、どんどん改札口に向かって歩いて行く。
「仁科さん、矢代を頼みます」
と、十津川は、仁科にいった。
「十津川さんは？」
「田代兄妹を探します」
「じゃあ」



と、仁科は、矢代を追いかけて行った。
二分の停車時間を過ぎた。
が、田代兄妹の降りて来る気配はない。
「カメさん、もう一度、乗ろう」
と十津川は、叫ぶようにいい、亀井と列車に飛び乗った。
すぐ、「出雲1号」は、発車した。
山下車掌長が、やって来て、
「どうされたんですか？」
「田代兄妹が降りなかったんですよ。あの二人は、まだ、この列車に乗っているんです」
と、十津川はいった。
「しかし、二人とも豊岡までの切符でしたがね」
「次は、城崎でしたね？」
「そうです。あと、五、六分で着きます」
「用心のために、わざと城崎まで乗り越して、豊岡へ戻る気かもしれません」
と、十津川はいった。
三時五一分、城崎着。いぜんとして外は暗いままである。
蛍光灯の明かりが光るホームに、十人前後の乗客が降りた。
だが、ここでも田代兄妹は降りなかった。
「次は？」
と、十津川がきく。
「香住には停まりませんから、浜坂の四時三六分。その次は、鳥取の五時一二分です」
「鳥取まで行って戻るということは考えられませんから、せいぜい次の浜坂ですね」
「警部」
と、亀井が声をかけてきた。
「何だい、カメさん」
「豊岡に大金を隠してあって、それを三人が取りに行くところだとすると、一人だけ先に行くというの

はおかしいと思うんです」
「わかってるよ。用心のためだろう」
「しかし、矢代がひとりじめして逃げる心配もあるでしょう。田代兄妹がそれを許すとは思えませんが」
「すると、豊岡より前に降りたということも考えられるね。そこから、タクシーを飛ばせば、矢代より早くか同時に、豊岡に着けるからね」
と、十津川は、亀井にいってから、山下車掌長に、
「田代兄妹の席はわかっていましたね？」
「覚えていますよ」
「じゃあ、見て来てくれませんか」
と、十津川は、頼んだ。
山下車掌長は、すぐ見に行ってくれた。が、あわただしく戻ってくると、
「寝台がカラです！」
「案内してください」
と、十津川がいった。
4号車の真ん中の下の寝台に、山下車掌長は、十津川と亀井を連れて行った。
「ここが女の方の席でした」
「間違いありませんね？」
「ええ。ありません」
「すると豊岡より前で、田代兄妹は、降りたということが考えられますね」
十津川がいうと、山下は首をかしげて、
「しかし、降りたようには見えませんでしたがね。全部の乗客をチェックしていたわけじゃありませんが」
「豊岡の一つ手前というと福知山ですね？」
「そうです」
「福知山着が、二時――？」
「二時三六分です」
「一時間前か、福知山と豊岡の距離は、どのくらい

ですか？」
「約六十キロですね」
「福知山の駅前で、タクシーを拾って飛ばせば、矢代より先に着けるかもしれませんね」
と、十津川はいった。が、自信はなかった。
この先の浜坂で降りる気で、車内のどこかに隠れている可能性もあるのだ。
十津川と亀井は、4号車のデッキに出た。
「どうも、わかりません」
亀井が、小さく首を振った。
「田代兄妹が、豊岡で降りなかった理由かね？」
「そうです。彼らが私たちに気付いた様子は見えませんでしたから、用心のためにばらばらになったとは考えられないんです」
「相手より先に行こうとして、豊岡の手前で降りて、タクシーを飛ばしたのかもしれんよ」
「それなら、豊岡で降りた矢代が、そわそわするんじゃありませんか？　一緒に降りるはずの田代兄妹が降りて来ないんですから。しかし、あのとき矢代はまったく落ち着き払って、さっさと改札口のほうへ歩いて行きました」
「確かに、そうだったね」
十津川も肯いた。彼も、あのとき矢代を注目していたのだが、ホームを見廻したり、田代兄妹を待つようなゼスチュアもなかったと思う。
（矢代は、田代兄妹が豊岡で降りないことを知っていたんだ）
と、思った。
前もって、三人は打ち合わせしてあって、田代兄妹が豊岡以外で降りることに、決まっていたのではないのか。
豊岡で降りた矢代には、県警の仁科警部が尾行しているから大丈夫だろう。
問題は、田代兄妹の行方である。彼らはどこに消

えてしまったのか？

問もなく浜坂に着く。

「浜坂でも田代兄妹が降りなかったら、われわれも豊岡へ急行しよう」

と十津川は、亀井にいった。

やっと、外が明るくなって来た。

浜坂着、四時三六分。やはり、ここでも田代兄妹は降りなかった。

十津川たち二人は、浜坂の駅で、「出雲1号」を降りた。

すぐ、タクシーを拾って、豊岡に行ってくれるように頼んだ。

早朝の国道178号線を、タクシーは疾走した。

豊岡には仁科警部がいるから大丈夫なのだと思いながらも、十津川の胸を不安がよぎっていく。

田代兄妹が、消えてしまったことが、十津川の予想外だったからである。これからも、十津川の考えていないことが起きるのではないかという不安だった。

「もっと、早く走ってくれよ」

と、十津川は運転手に頼んだ。

第五章　裏切り列車

1

仁科は、じっと前方を見つめた。
矢代勇一郎は、豊岡駅で降りるとすぐ、タクシーを拾った。
仁科も、タクシーであとをつけることにした。
矢代の行き先はわかっている。
「その無線を使って、豊岡署に連絡させてくれ」
と、仁科は、警察手帳を見せてから、運転手に頼んだ。
タクシー無線を通じて、豊岡署に指示を与えた。
すぐ酒井家の離れに行けという指示である。
前を行くタクシーが停まった。
矢代が降りるのを見てから、仁科もタクシーを降りた。
矢代は、周囲を見廻してから酒井家の門を入って行った。
仁科は、しばらく門の外に立っていた。
あの離れには、魚の干物の入ったダンボール箱が積み重ねてあった。その中に、札束が詰まったものがあるという。
矢代が、それを持ち出して、戻って来たところを逮捕したほうがいいだろうか？　それとも踏み込んで逮捕したほうがいいのか。
パトカーがサイレンの音を消して、一台、二台と到着した。
緊張した顔の刑事たちが降りて来る。
「離れを包囲しろ！」

と、仁科は命令した。
仁科自身、門を入り、離れに近づいた。
広い庭の一角に、離れが建っている。
ドアが閉まり、中から音が聞こえる。ダンボール箱を引き裂いているような音である。
「踏み込みますか？」
刑事の一人が、仁科の顔を見つめた。
あの中で、矢代は、もう、ダンボールの中から、札束を取り出しているのだろうか？
「よし。踏み込むぞ！」
と、仁科がいった瞬間だった。
耳をつんざく爆発音が起きた。
閃光が生まれ、眼の前の離れが粉々に吹き飛んだ。
仁科の大きな身体が、爆風で地面に叩きつけられた。
耳がじーんとして、一瞬、音が聞こえなくなった。
離れの建物が炎に包まれるのが見えた。
真っ先に離れに飛び込もうとした若い刑事が、倒れて呻き声をあげている。
仁科は、夢中で起きあがると、その刑事の身体を引きずって、猛烈な勢いで吹きあげる炎から遠ざけた。
少しずつ耳が聞こえてきた。
「消防署に連絡しろ！」
と、仁科が怒鳴った。
その顔が、炎で赤く染まっていた。

2

凄い火勢で、もう、素人の手に負えなかった。
離れの中の矢代が、どうなっているのかわからないが、助けに飛び込むわけにはいかなかった。
仁科は、部下の刑事たちを引き退らせた。
消防車が駆けつけてくれた。

野次馬も集まって来た。
二十分ほどで消火した。その跡は無残だった。茶室風の立派な建物だったのに、ただの焼け跡になってしまった。
仁科は、部下と一緒に焼け跡に踏み込んだ。
男の焼死体が、まず、見つかった。
ただの焼死体ではなかった。爆発で引きちぎれてしまった死体である。
若い刑事は、思わず眼をそむけたほど、ひどい死体だった。
鑑識も呼ばれた。
焼け跡から、焦げた時限装置の破片が見つかった。
矢代勇一郎が自爆したとは思えない。
何者かが時限爆弾を仕掛けて、爆発させたのだ。
矢代の乗っていた寝台特急「出雲1号」が、豊岡に着く時刻はわかっている。
矢代は、一刻も早く金を取りに行こうと思っているから、豊岡駅前からタクシーに乗るだろう。
したがって、問題の離れに矢代に着く時間を計算できるというものである。
何者かが計算して、時限爆弾をセットしておいたに違いなかった。
(やられたな)
仁科が、歯がみをしているところへ、十津川と亀井も浜坂からタクシーで到着した。
十津川たちも、焼け跡を見て呆然としてしまった。
死体は、毛布に包まれて、解剖のために病院に運ばれたあとだった。
「矢代勇一郎に間違いなかったですか?」
と、十津川は、仁科にきいた。
「間違いありません」
「誰かが先廻りして、隠しておいた金を奪い取り、代わりに時限爆弾をセットしておいたんでしょうね」

「田代兄妹ですか？」
「他に考えられませんよ」
「すると、田代兄妹は、豊岡の手前で列車を降りたことになりますね？」
仁科が、青ざめた顔できく。
「そうです。福知山あたりで降りて、タクシーを飛ばしたのでしょう。あるいは、前もって、スポーツカーでも福知山に置いておいたのかもしれません。とにかく、矢代より先にここに着き、金を奪い、時限爆弾を仕掛けて逃げたんでしょう」
「すぐ、田代兄妹を指名手配しましょう」
と、仁科はいった。
仁科がパトカーの無線を使って、その手配をしている間、十津川と亀井は、じっと焼け跡を見つめていた。
焼けた魚の匂いが濃く立ちこめているのは、本物の干物のダンボールが焼けたからだろう。
「どうも、わかりません」
亀井が、小さく首を振るようにしていった。
「矢代が、やられたことがかね？」
「なぜ、田代兄妹が裏切ることを、矢代は、予期していなかったのか、それが、わからないんですが」
「金に、眼が眩んだからじゃないのかね」
「と、いいますと――？」
「豊岡で降りたとき、田代兄妹がいないのに、矢代は、まったく平気な顔だった。ということは、矢代は、田代兄妹が豊岡以外の駅で降りることを知っていたんだと思う。例えば、一つ手前の福知山でね」
「それなのに、なぜ、矢代は、田代兄妹の裏切りを考えなかったんでしょうか？　考えていれば、もう少し用心深く行動したんじゃないでしょうか？」
「田代兄妹は、福知山で降りたとしてだが、矢代を納得させる理由をつけていたんだと思うね。あるいは、矢代が命令して、田代兄妹を福知山で降ろした

のかもしれない。だから安心していたんじゃないかね。田代兄妹は、自分の命令どおりに動いていると思って安心していたんだと思うがね」

「そういえば矢代は、田代明夫の上司でしたね」

「それが、中央商事を辞めたあとも続いていたのかもしれんよ。矢代のほうは、田代がいつも自分の命令どおりに動くと信じ込んでいたんじゃないのかね。まさか、自分に対して田代が反抗するとは、考えても見なかったんだろう」

「ところが、田代のほうは、矢代を裏切ることを考えていたということですか？」

「それなら、この事態は納得できるんじゃないかね」

と、十津川はいった。

田代兄妹が逮捕されれば、この推理が正しいかどうかわかるだろう。

3

寝台特急「出雲1号」は、午前七時五二分に、出雲市駅に着いた。

ここで、後尾の五両を切り離し、六両編成になって終着駅の浜田に向かう。

あとは、大田市、江津と停車して、九時四一分に、浜田に着いた。

浜田は、城下町だが、大きい漁港の町としても知られている。

東京からの直通列車、「出雲1号」は、ここで、折り返すことになる。

山下車掌長は、乗客の降りた車内を見て廻った。

先頭の個室寝台は、人気のある客車である。一両だけだが、十四の個室が並んでいる。狭いが、ドアを閉め、中からカギをかければ、完全なプライバシ

ィが確保されるし、いつ寝ても起きてもいいのが、人気のある理由だろう。

値段は高いが、寝巻やタオルなども用意されている。

山下車掌長は、十四の個室のドアを、一つ一つ開けて中を見ていった。

真ん中の7号室のドアを開けたとき、山下の顔色が変わった。

狭い室内に、男と女が折り重なるようにして倒れていたからである。

二人とも見た顔だった。

田代兄妹である。

山下は、ホームに飛び出ると、そこにいた駅員に公安官を呼んでくれと、いった。

山下の顔色が真っ青だったせいだろう。相手の駅員は、あわてて公安官を呼びに行った。

鉄道公安官が二人、猛烈な勢いでホームを駈けて来た。

だが、個室で死んでいる二人を見ると、これは、もう警察の仕事だと考えた。

公安官は、警官そっくりの服装をしているが、身分は国鉄職員である。車内のケンカや酔っ払いの世話ぐらいはするが、刑事事件になると、これは、もう警察の所管である。

二人の公安官が、警察の仕事と直感したのは、田代兄妹の死に変死の疑いがあったからである。

浜田駅からの知らせで、島根県警浜田署の刑事たちが、鑑識と一緒にパトカーでやって来た。

少し遅れてやって来た検死官は、二つの死体を丁寧に調べたあと、

「どちらも毒物死だね、多分、青酸だよ」

と、刑事の一人にいった。

鑑識が狭い室内を調べると、床に缶ビールの缶が、二つ転がっていた。どちらにも中身が少し残ってい

る。
酒の肴のいかの燻製やおかきが散乱していた。
二人は、どうやら、缶ビールを飲んでいて死亡したらしい。
「缶ビールの中に、青酸が入っていたのかもしれないな」
と、ベテランの及川刑事が、同僚の刑事にいった。
そのあと、検死官に向かって、
「死後、どのくらい経過していますか？」
と、きいた。
「そうだね。数時間はたっていると思うよ」
と、検死官がいう。
及川は、山下車掌長とホームに降りて話を聞いた。
山下は、東京警視庁と兵庫県警の警部があの二人を監視していたこと、名前は、田代明夫と有子という兄妹であること、座席は、2号車と4号車であること、豊岡を過ぎてから、警視庁の十津川警部が二人のいないことに気付いてあわてていたこと、などを、及川刑事に説明した。
「何でも、東京と豊岡で起きた殺人事件の容疑者だったみたいです」
と、山下は、付け加えた。
「殺人事件の容疑者か」
「十津川さんは、あの二人が途中で降りたんじゃないかと思っていたようですが」
「その十津川さんと兵庫県警の仁科さんは、今、どこにいるのかわかりますか？」
と、及川はきいた。
「仁科さんは、豊岡で降りましたし、十津川さんは、浜坂で降りて、豊岡に戻るようなことをおっしゃっていましたが」
「すると、豊岡署か」
と、及川は呟いてから、
「あの7号室は、本来、どんな客がいたんですか？

それとも、切符が売れてなかったんですか？」
「いえ。個室寝台は、全部、売れていました。7号室も、東京から終点の浜田までの切符が買われています」
「それで、客は？」
「東京駅を出てすぐ、車内改札をしたときに、若い女のお客がいましたね。二十四、五歳の、かなりの美人でしたよ。終点の浜田までの切符を持っていらっしゃったので、その後、車内改札をしませんでしたし、当然、終点の浜田まで、この若い女性が乗っているものとばかり思っていたんですよ」
「その女の顔を、覚えていますか？」
と、及川はきいた。
「車内改札のときに、一度、見ただけですからね。まさか、こんなことになるとは思っていませんでしたから――」
「覚えているだけでいいですから、似顔絵作りに協力してください」
と、及川はいった。
消えてしまった7号室の女性客が犯人かどうかはわからないが、常識で考えて、事件に関係していることだけは間違いあるまい。
及川は、浜田署に戻ると、上司に事件の経過を説明したあと、兵庫の豊岡署に連絡を取った。
仁科警部を呼んでもらい、寝台特急「出雲1号」の個室寝台で、田代兄妹が毒死していたことを告げた。
仁科は、及川が予想した以上の驚きを示した。
「それ、間違いないんだろうね」
と、噛みつくような声を出して、及川を驚かせた。
「間違いありません。どうやら、缶ビールの中に青酸を混入させておいて、二人に飲ませたものと思います。今、二人の解剖を病院に頼んでいます。正確な死因と死亡時刻を知りたいので」

「ちょっと待ってくれ」
と、仁科はいい、今度は、東京警視庁の十津川警部に代わった。
「こちらでは、田代兄妹が殺人事件の犯人ではないかと思っていたんだよ」
「事件のことは、山下車掌長から聞きました」
「豊岡で、また一人、殺されたんだよ」
「本当ですか？」
今度は、及川が驚く番だった。
「その犯人だとも、思っていたんだがね。その7号室の乗客については、若い女としかわからないのかね？」
「山下車掌長は、二十四、五歳の美人だといっていますが、顔はよく覚えていないといっているんです。たった一回、車内改札のときに顔を見ただけだといいますから、無理もないんですが」
「とにかく、何かわかったら、すぐ、連絡してほしいね」
と、十津川はいった。

4

電話を切ったあと、十津川は、仁科と顔を見合わせてしまった。
「どうやら、考え直さなければいけませんな」
と、仁科がいった。
矢代勇一郎、田代明夫、これに有子が組んで仕事をしたのが仲間割れを起こして、田代兄妹が矢代を殺したと考えていたのだが、その田代兄妹まで殺されたとなると、事件の見方は根本的に考えなければならなくなる。
仁科のいうとおりなのだ。
「田代兄妹に対する指名手配は、意味がなくなりましたね」

と、仁科は溜息をついた。

十津川は、じっと考えていたが、一人の男の名前が、自然に頭に浮かんで来た。

〈君島　弘〉

という名前だった。

元、中央商事の企画部長で、現在、中央興業の副社長である。

「君島弘ですよ！」

と、ほとんど同時に、亀井が大きな声を出した。

「そうなんだ。考えてみれば、最初から君島という男をマークしておくべきだったんだ」

「どうします」

「電話を借りますよ」

と、十津川は仁科にいい、東京の中央興業の電話番号を調べてから、ダイヤルを回した。

「中央興業でございます」

という、交換手の声が聞こえた。

「副社長の君島弘さんにつないでくれませんか。ああ、友人です」

と、十津川はいった。

「君島副社長は、今日はお休みでございます」

と、交換手がいう。

（やはり）

と、十津川は思いながら、

「弱ったな。どうしても、至急、君島さんに伝えなければならないんだ。何億円という取引の話なんだ」

「お待ちください。秘書室におつなぎします」

交換手は、あわてていい、男の声が出た。

「秘書室です」

「君島副社長に、至急、連絡したいんですがね。大きな取引のことでね」

「君島副社長は、ヨーロッパ行きに備えて、今日は

休暇をとっておられます」
「ヨーロッパ行き？　先日、君島さんと取引の話をしたときには、そんな話は出ていなかったがね」
「急に決まったからでしょう。ヨーロッパからアメリカを廻って、向こうのレジャー施設を視てくることになっていますが」
「出発前に、ぜひ、お会いしたいんですがね。いつ出発されるんですか？」
「明日の夜、ルフトハンザで出発することになっていますが」
「それなら、その前にお会いできますね。今、どこにおられるかわかりますか？」
「さあ、自宅にいると思いますが」
と、相手は自信のない声でいった。
十津川は、受話器を置くと、今の電話の内容を仁科と亀井に伝えた。
「明日の飛行機ですか？」
仁科が眼をむいた。
「そうです。君島は、今までにニセの株券で儲けた金をひとり占めにして、仕事ということで、ヨーロッパに逃亡する気でいるんだと思います」
と、十津川はいった。
「ニセ株券売買の罪は、すべて矢代や田代兄妹に押っかぶせてですか」
「そのとおりです。今度の事件は、最初、矢代と田代兄妹が考えたことだと思いますね。兄妹の母親から、五百万円を引き出して、中央興業のニセ株券を印刷したんだと思います。資金はそれだけじゃなかったでしょうが、銀座のクラブのママなんかに売りつけて大金を手に入れ、その金を豊岡にある田代ふみの例の離れに隠したんです。この儲け話に、三人の昔の上司だった君島が気がついて、割り込んで来たんだと思います。君島は、野見山一族なのに、中央商事では重用されず、今度は新会社、中央興業の

副社長という閑職に追い払われてしまったわけですから、中央商事の社長なんかにも、反抗心を持っていたと思いますからね」

「すると、豊岡で殺された伊東けい子のことも、見方を変える必要が出て来ますね。今までは、彼女もニセの株券で欺された一人と見ていたんですが、君島が一味のリーダー格だったとすると、彼女は、その君島の女だったわけですから」

と、仁科がいった。

十津川は、肯いた。

「そうです。伊東けい子は、むしろ君島の関係で仲間に入っていたんだと思います。そして、儲けた金が一時的に豊岡の田代ふみの離れに隠してあると知って、君島たちを裏切って、ひとりで手に入れようとしたんでしょうね。ただ、正確な場所を知らなかったし、田代ふみの表札がかかっていると思い込んでいたんだと思う。だから、豊岡へ来て、田代ふみの名前をいって、探して歩いた。そんな彼女の裏切りに気付いた君島たちが追っかけて来て、彼女を殺したんだと思います」

「これから、どうします？」

仁科がきいた。

十津川は、腕時計に眼をやった。午前十一時に近い。

「明日の夜、君島は、ヨーロッパに向かって飛び立ってしまいます。これは何としても阻止しなければなりませんので、私と亀井刑事は、すぐ東京に戻ります。あとのことは頼みます」

と、十津川はいった。

5

二人は、本部長への挨拶もそこそこに、車で豊岡駅に向かった。

一一時一九分発の急行「白兎」に、何とか間に合うことができた。
改札口を駈け抜け、列車に飛び乗ると同時に発車した。
京都着が、一四時一二分。
今度は、京都一四時二六分の「ひかり24号」に乗り込んだ。
その座席に腰を下ろして、やっと、落ち着くことができた。
走り出してから、二人は、食堂車に行き、おそい昼食をとった。
食事をしながらも、話は、どうしても事件のことになってしまうのだ。
「私の関心は、やはり田代ふみです」
と、亀井がいった。
「彼女は、なぜ殺されたんでしょうか？」
「そうだねえ」
「まさか、田代兄妹が、母親を殺したなんてことはないでしょうね。もし、そんなことでもあったら、あまりにも殺された田代ふみが可哀そうになりますが」
亀井が、暗い顔でいった。
「母親は、最後まで自分の息子や娘を信じていたんじゃないかね。特に、息子の明夫のほうをだよ」
と、十津川は、考えながらいう。
「自慢の息子だったわけですね」
「中央商事の社員だったんですからね。最初、私は、まったくのでたらめを、明夫は、母親にいっていたのかと思った。だが、そうでもなかったんだ。前には、本当に中央商事に勤めていたんだ」
「そうですよ。母親というのは、息子や娘に対して甘いものですが、それでも、見ているところは見ているもんです。完全に嘘だったら、とっくに見破っていたと思いますね」

「それ、カメさんの実感かね？」
「私の母親がそうでしたから」
と、亀井はちょっと照れ臭そうに笑ってから、
「私は、ひょっとすると母親としての息子に対する信頼が、彼女を死なせることになってしまったのではないかと思うんですが」
「どういうことかね？」
「田代ふみは最後まで、息子を信じていた。それが、かえって君島や矢代には、うるさかったんじゃないかと思うんです」
「そうだな。田代ふみのほうは、何も知らずに動き廻っているのに、君島たちは、そうは受け取らなかった。田代ふみの動きに危険なものを感じたということは、十分に考えられるね」
と、十津川はいった。
一七時一六分に東京駅に着いた。
西本刑事が、パトカーで迎えに来ていた。
「田園調布の君島の邸を、清水と日下の二人が見張っていますが、君島はいないようです」
と、西本がいった。
「そうか。まだ、戻っていないのか」
十津川は、明日まで君島は自宅に戻らないかもしれないなと、思った。
大金を手に、ホテルででも一泊して、そのまま成田へ直行する気ということも考えられるのだ。
十津川たちは、捜査本部に戻った。
それを待っていたように、豊岡署の仁科から電話が入った。
「浜田署から連絡がありまして、田代兄妹の解剖結果がわかりました。やはり、青酸中毒死で、缶ビールの残りからも、青酸反応があったそうです。それから、死亡推定時刻ですが、二人とも、ほとんど同じ時刻に死亡していて、今日の午前一時から二時の間ということです」

と、仁科がいった。
「午前一時から二時というと、寝台特急『出雲1号』は、どの辺を走っているときですかね？」
「京都と綾部の間ぐらいだと思いますね」
「というと、『出雲1号』が停車しない時間帯ですね？」
「そうです。二三時〇五分に名古屋を出てから福知山の二時三六分まで、『出雲1号』は、乗客の乗り降りをしません。つまり、車内が、もっとも静かな区間ということです」
「その区間で、田代兄妹は、毒殺されたというわけですね」
「問題の7号車にいた若い女は、どこで降りたんでしょうね？　多分、君島の仲間じゃありませんかね？」
と、仁科がきいた。
「君島は、『出雲1号』に乗っていたんですかね？」
十津川は、自問する調子できいた。
「十津川さんは、どう思われますか？」
と、仁科は逆にきいてきた。
「そうですね、矢代や田代兄妹を納得させるためには、君島も同じ列車に乗っていたはずだと思いますがね」
「しかし、豊岡に先廻りして、田代ふみの借りていた例の離れから金を奪い、時限爆弾を仕掛けておくためには、もっと早い時間に豊岡に行ったほうがいいでしょうが」
と、いった。
十津川は、「出雲1号」に、乗っていたときのことを思い出した。
「出雲1号」は、名古屋から福知山まで三時間半、停車しない。
いや、実際には、京都駅に停車して機関車の交換を行なうのだが、乗客の乗り降りはしないのである。

仁科のいうように、もっとも静かな時間帯である。ほとんどの乗客が眠ってしまっている。

その静かな時間に、君島の女は、個室に田代兄妹を呼び込み、責酸入りのビールを飲ませて殺したのだ。

矢代勇一郎は、田代兄妹が殺されることは知っていたに違いない。だから、豊岡に降りたとき、田代兄妹の姿が見えなくても、平気な顔をしていたのだろう。

仁科との電話が終わると、十津川は、成田空港のルフトハンザの営業所に電話して、明日のヨーロッパ行きの便に君島弘が予約しているかどうか聞いてみた。

やはり、予約してあった。

午後八時四五分のハンブルグ行きの便である。

「女の方が、ご一緒です」

と、営業所の係員がいった。

「その女性の名前を、教えてください」

「三条ユキ様です」

と、いう。

彼女が、「出雲1号」の個室寝台に乗っていた若い女だろうか。

名前だけでは、どんな女なのか、まったくわからない。

「明日が勝負ですね」

と、亀井がいった。

「君島の逮捕令状をとろう」

6

翌朝、十津川も亀井も、捜査本部で眼を覚ました。

昨夜は、ここで、二人とも寝たのである。

朝から、かんかん照りである。今日も、一日、暑くなりそうな気配だった。

捜査本部は、気温とは別の熱気に包まれていた。
用意されていたトーストと牛乳で、素早く朝食をすませた。
午前九時に、君島弘に対する逮捕令状が、十津川の手元にもたらされた。
昨日から引き続いて、田園調布の君島邸の監視に当たっている清水と日下の刑事から連絡が入った。
あれから今まで、君島が帰宅した様子はないというのである。
「午後三時になったら、君たちも成田へ行ってくれ」
と、十津川は指示した。
少し早めに、十津川と亀井も、成田に向かった。
その車の無線に、途中で一つの情報が入った。
東京の中央銀行に、君島と思われる男が現われ、三億円にのぼる日本円を米ドルにかえていたという情報だった。それも、百ドル紙幣にかえたらしい。
外国で使用するためだろうが、同時に、百ドル紙幣にすれば、一万円札に比べて量が少なくなるのを狙ったのだろう。
他にも、宝石などを購入しているかもしれない。
成田空港に着くと、十津川は、刑事たちを要所に配置した。
日下と清水も到着した。
まだ、君島は現われない。
(時間ぎりぎりにやって来るに違いない)
と、十津川は思った。
そのほうが、君島にとっても、危険が少ないからだろう。
問題のルフトハンザの搭乗時刻が近づいてきた。
新しい乗客が現われるたびに、十津川たちは眼を光らせた。
大きなスーツケースを持った若い女が現われた。
二十四、五歳のスタイルのいい女だった。

大きなスーツケースは、ルフトハンザに預けて、そのまま搭乗口に入って行くのかと思って見ていると、そうはせずに、立ち止まって周囲を見廻している。

十津川は、「出雲1号」の個室寝台から消えたという若い女性客のことを思い出した。確か、二十四、五歳の美人だということだったが。

その女だろうか？

急に、彼女が搭乗口に向かって歩き出した。

サングラスをかけた男が現われた。同じように大きなスーツケースを持っている。

一瞬、十津川は、その男を君島とは思わなかった。手に入れた写真と違って見えたからである。

しかし、ルフトハンザのカウンターの係員は、十津川のほうに向かって、打ち合わせておいた合図を送ってきた。

君島弘が来たという合図をである。

「警部、あの男は、かつらをかぶっていますよ！」

と、傍で亀井が叫んだ。

そうだ、あれは、かつらなんだと気付いた瞬間、十津川は、相手に向かって足を踏み出していた。

君島は、気配に十津川のほうを見た。

「君島！」

と、亀井が怒鳴るような大声を出した。

一瞬、君島の肩がふるえたように見えた。が、次には、彼は、近くにいた他の乗客を突き飛ばして逃げ出した。

十津川と亀井が、君島を追う。他の刑事たちも現われて、彼を包囲する恰好になった。

追い詰めた。

君島は、よろめいて、惨めに転んだ。

「君島弘。君を逮捕する！」

と、十津川は、倒れている君島に向かっていった。

7

すでに、機内に入っていた連れの女も、逮捕した。

君島の個人秘書の三条ユキ、二十五歳である。

二人のスーツケースの中は、百ドル紙幣の束が詰まり、彼女のハンドバッグには、高価な宝石類が何箇も入っていた。

捜査本部に連行されると、もともと野見山一族の一人として甘やかされて育っただけに、十津川が拍子抜けするほど、簡単に自供した。

十津川が想像したとおり、中央興業のニセ株券で売り出したのは、矢代と田代兄妹が始めで、それを嗅ぎつけた君島が強引に仲間に入ったのだという。

本物の副社長が売るのだから、ニセ株券は面白いように売れ、金がどんどん入って来た。

もちろん、すぐ、ばれるだろう。その寸前に逃げ出す気でいたし、会社に恩義など少しも感じていなかったと、君島は、平然としていった。

莫大な金は、手元においておいては危険なので、一部を一時的に田代ふみの豊岡の物置に隠すことにしたが、これは田代明夫の考えだった。

何もかも上手くいっていたが、計算外だったのは、田代ふみの行動だった。

彼女は、母親の直感で、息子や娘が危険な仕事に手を出していると思って、それを調べに上京して来たのだ。

彼女を欺すのは難しいと思い、矢代がふみを丸の内のビル街で殺した。横浜で、「出雲」を降りておいて、車で先廻りしたのである。

わざと不正確な地図を描いておけば、東京が初めてのふみは、そんなに早くは着けない。現地でまごまごしているだろう。矢代は、先廻り出来ると、計算したのだろう。

伊東けい子の行動も、君島の予想外だった。君島たちの仕事を嗅ぎつけ、儲けた金を手に入れようとして豊岡に行ったのである。それに気付いて君島は、有無をいわせず殺してしまった。

君島は、最初から、莫大な儲けを矢代や田代兄妹に分配する気はなかった。

豊岡に、隠した儲けを取りに行くと決まったとき、君島は、個人秘書の三条ユキと、三人を殺すことを計画した。

矢代には、田代兄妹を殺して儲けを二人で分配しようといっておいた。

一方、「出雲1号」の車内では、田代兄妹を三条ユキの個室に呼び、毒殺しておいて、二人で福知山で降りた。

前もって、福知山の駅近くにスポーツカーを駐めておき、豊岡に先廻りし、金を奪っておいて、代わりに時限爆弾を仕掛けておいた。

これが、君島の自供である。

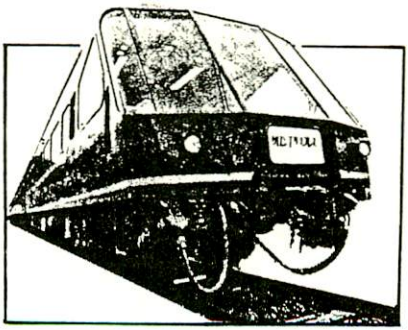
彼らが儲けた金額は五億円を超えていた。

田代兄妹は、多分、一人、一億円以上になると計算していたのだろう。

「いやな事件でしたが、田代兄妹が母親を殺してなかったのがわかって、ほっとしました」

と、亀井がぽつりといった。

殺人へのミニ・トリップ



1

「小さな旅がしたいわ」
と、めぐみがいった。
「どういう意味だい？　小さいって」
古賀がきいた。
「何泊もするようなぜいたくな旅行は、できそうもないから、東京の近くで、ちょっと気の利いた所へ行ってみたいのよ」
「日帰りの旅ということ？」
「一泊ならしてもいいわ」
と、めぐみがいった。
「ふーん」
古賀が鼻を鳴らした。つき合って、すでに二年近くなる。結婚しないのは、別に障害があるからではなく、何となく面倒くさいのだ。
少なくとも、古賀は、そう思っていた。
もちろん、身体の関係もできていたから、泊まりがけの旅行に出るといっても、そのほうのときめきがあるわけではなかった。
古賀が、「ふーん」と鼻を鳴らしたのは、ここ一カ月ばかり、めぐみを抱いてなかったなと思ったからである。
いや、会ったのも、今日を入れて三度目だった。お互いに忙しかったからといいたいところだが、主として、忙しさを理由に会わなかったのは、古賀のほうである。
古賀は、小さな出版社に勤めている。忙しいわりに給料が安いので、大学時代の友人に頼んで、他の出版社の雑誌にネオン街の探訪記事みたいなものを書いたりしている。今では、そのアルバイトのほうが、いい収入になったりするのである。
古賀の希望は、いつかノンフィクションを書く作

家になるということだった。
めぐみのほうは、普通のOLである。
日本では五本の指に入る大手の鉄鋼会社の東京本社で働いている。
「次の土曜日に行って、向こうで一泊して来るのはどうかしら？」
めぐみがきいた。
コーヒーを前に置いて、窓の外の景色に眼をやっていた古賀は、
「え？」
と、きき返した。
めぐみは、眉を寄せて、
「嫌なら、またにするわ」
「そんなことはないさ。ただ、適当なところがあるかと思ってね」
古賀は、あわてていった。
「海を見に行きたいの」
「もう寒いんじゃないかね」
古賀は、年寄りくさいいい方をした。
めぐみは、笑って、
「今だからいいのよ。夏の海は、どこも人でいっぱいだったわ。今なら、人のいない、きれいな海が見られると思うの」
「どこの海がいいんだ？」
「私に委せてくれる？」
「それはいいけど、どこへ行くのかだけでも教えてくれよ」
「伊豆の海を見に行きたいの。それに、伊豆なら温泉にも入れるし――」
「なるほどね」
「それに、十二月の毎週土曜日には、伊豆下田行きの特別列車が出ているのよ。L特急『踊り子』号だけど」
「その特急なら、毎日、出ているんじゃないか？」

「特急『踊り子』は、毎日出ているけど、土曜日は、サロンエクスプレス『踊り子』が、一列車だけ、出発するの。それに乗りたいなと、前から思っていたのよ」
「サロンエクスプレスというと、展望車がついているやつだね？」
「ええ。一度、乗ってみたいと思っているの。私が切符は全部、買っておくわ」
「何時に東京駅を出るんだ？」
「午後一時ちょうどに東京駅出発だから、十二時半ごろに東京駅で落ち合えばいいわ」
「僕は、本当に何もしなくていいのか？」
「ホテルの予約は、やってくれる？　あとは全部、私がするわ」
めぐみは、ニッコリ笑った。

2

十二月七日は、風は冷たかったが、よく晴れていた。
古賀は、ホテル代がいくらかかるかわからないので、十万円を銀行から下ろし、それを持って東京駅に出かけた。
約束どおり十二時半に着くと、めぐみは、もう来ていた。
「珍しいね、いつも君のほうがおくれてくるのに」
と、古賀は軽い皮肉をいった。
いつものめぐみなら、こんなときには一言あるのだが、今日は久しぶりの旅行にわくわくしているのか、
「すぐ、入りましょう」
と、古賀を促した。

改札を抜けホームに上がると、サロンエクスプレス「踊り子」は、もう10番線に入っていた。

ベージュ色というのか、七両編成の洒落た客車である。特に楽しいのが、1号車と7号車がガラス張りのパノラマカーになっていることである。

牽引する電気機関車も連結されている。

人気があるとみえて、カメラを持った子供たちが、パノラマカーに向かって盛んにシャッターを切っていた。

めぐみから渡された切符は、4号車の1号室になっている。

二人は、4号車に乗った。

2号車から6号車までの中間の五両は、コンパートメントカーで、四人部屋に六人部屋である。

二人は、四人部屋の1号室に入った。

通路に面したドアを閉めてしまえば、完全なコンパートメントである。

「なかなか、いいね」

と、古賀はソファに腰を下ろして、めぐみにいった。

「あとで、最後尾のパノラマカーに行ってみましょうよ」

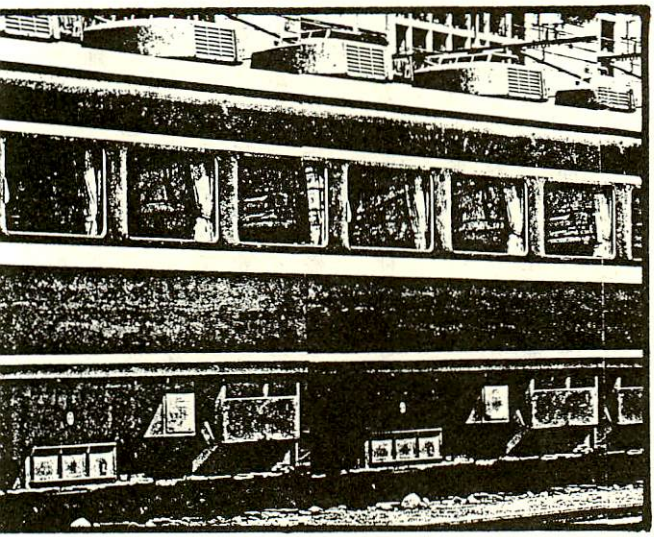
と、めぐみがいう。

一三時〇〇分に、サロンエクスプレス「踊り子」は、伊豆急下田に向かって、東京駅を離れた。

普通の特急「踊り子」は、東京を出たあと、品川、川崎、横浜、大船、平塚と停車するが、古賀たちの乗った、サロンエクスプレス「踊り子」は、横浜、大船、湯河原と停車するだけである。

一三時三九分に、大船を出ると、一四時二二分に湯河原に着くまで停車しない。

二人は、コンパートメントを出ると、通路を歩いて最後尾のパノラマカーまで歩いて行った。正確にいうとパノラマラウンジカーである。



乗客の誰もが展望を楽しみたいとみえて、ソファも回転椅子も満員だった。

「ハンドバッグ忘れたから持ってくるわ。空いたら席をとっておいて」

と、めぐみがいった。

「いいよ」

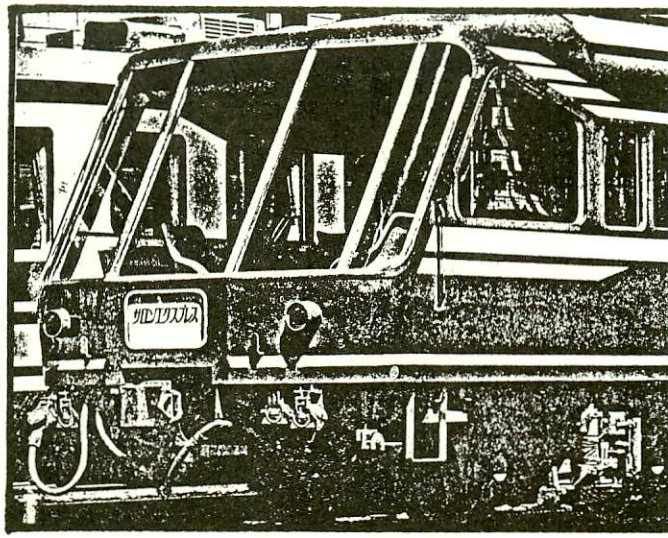
と、古賀はいい、パノラマラウンジカーにあるカウンターで水割りを注文した。

マスターがカウンターの中にいて、水割りの他に、ワインやカクテルも出してくれる。

しばらくすると、回転椅子が空いたので、古賀は、水割りのグラスを持ったまま腰を下ろした。

めぐみも、バッグを持って戻って来ると、古賀の隣りに腰を下ろした。

パノラマラウンジカーは、側面の窓ガラスも大きいが、前面が傾斜したワイドなガラス窓になっている。



一八〇度以上の視界である。
景色が流れ去っていくのだが、窓が大きいために自分自身がその景色に包まれているような気がする。
すれ違う列車の窓から、乗客がこちらを見ていた。それだけ、このサロンエクスプレスが、洒落た車両に見えるのだろう。
しばらくして、めぐみが、
「カメラ持ってる？」
と、古賀にきいた。
カメラは、コンパートメントに置いて来ていた。
「すぐ持ってくるから、君は、ここにいたまえ」
と、古賀は、めぐみにいって、パノラマラウンジカーを出た。
通路を歩いて4号車に着いた。
1号室のドアを開けて、中に入った。
「あれ？」
と、瞬間、思ったのは、女性が一人そこに座って

いたからである。
部屋を間違えたかなと、思ったが、この部屋は四人用である。わけもなく貸切りみたいに考えていたのだが、自分たちの他に、あと二人、乗ってくる可能性があるのだ。
古賀は、カメラを手に取ってから、
「どうも」
と、女にいった。
女は、黙ってソファにもたれるようにしている。
列車が、がたんとよれた。
次の瞬間、女の身体が、じゅうたんを敷いた床に崩れ落ちた。
女は、そのまま動かなかった。
古賀は、呆然として、床に倒れている女を見下ろしていた。
何が起きたかわからなかった。
(死んでいる)
と、思ったのは、一分近くたってからである。
よく見れば、女の細いくびに赤黒い筋がついている。ロープでくびを締めたのだ。
古賀は、あわてて車掌を呼びに、通路に飛び出した。

3

加藤という四十代の車掌が、半信半疑の顔で、古賀と一緒に4号車の1号室をのぞき込んだ。
加藤車掌は、床に倒れている女を見つけて、
「本当に死んでいるんですか?」
と、古賀にきいた。
「死んでいますよ。くびを締められています」
「そりゃあ、大変だ」
車掌は、女の傍に屈み込み、脈を診たりしていたが、

「確かに死んでいますね」
「そういったじゃありませんか」
「あなたの連れの方ですか？」
「違いますよ」
「しかし、このコンパートメントには、あなたの席があるんじゃありませんか？」
「そうです。しかし僕は、彼女と一緒にこの列車に乗ったんですよ。その女性は知りませんよ」
「あなたの連れの方は、どこなんですか？」
「最後尾のパノラマラウンジカーにいます。僕も一緒にいたんですが、カメラを取りに戻ったんです。そうしたら、その女性が死んでいたんですよ」
「本当に、この人は知らないんですね？」
「知りませんよ。突然、舞い込んで来て、ここで勝手に死んでいただけですよ」
「間もなく湯河原に着きますから、警察にも協力してもらいましょう」
と、車掌はいった。
窓の外を見ると、景色が流れて行く。列車は、何ごともなかったように走り続けているのだ。
古賀には、そのことが不思議に思えた。
ここに、人間が一人、死んでいるのである。それなら、景色も停止すべきではないのか。そんな気がしたのだ。
湯河原に着いた。
車掌がホームに降りて、駅員に話をし、公安官が二人、乗って来た。
列車は、また、何ごともなかったように走り出した。
「死体は、次の熱海で列車から下ろします」
と、公安官の一人が古賀にいった。
「そのあと、どうするんですか？」
「私が、湯河原で静岡県警に連絡しておいてくれるように頼んでおきましたから、熱海の駅には警察が

来てくれているはずですよ」
車掌がいった。
「あなたも、熱海で一緒に降りてください」
と、もう一人の公安官がいった。
古賀は、肩をすくめて、
「なぜ、僕が熱海で降りなければならないんですか？」
「この仏さんは、あなたの連れでしょう？」
「冗談じゃない。車掌さんにもいったんですが、僕の連れは、今、パノラマカーにいるんです」
「では、連れて来てください。いや、私も一緒に行く」
と、公安官の一人がいった。
「逃げやしませんよ。犯人じゃないんだから」
古賀は、文句をいいながら、その公安官と二人で、最後尾のパノラマラウンジカーに行った。
まだ、事件のことは誰も知らないらしく、パノラマカーでは乗客が酒を飲んだり、お喋りを楽しんだりしていた。
「おかしいな」
と、古賀が呟いた。
「どうしたんです？」
「いないんですよ。彼女が」
古賀は、必死にパノラマカーの車内を見廻した。どこにも、めぐみの姿はなかった。
公安官は、疑わしげに古賀を見つめた。
「4号車で死んでいたのが、あなたの連れなんじゃないんですか？」
「違いますよ。見たこともない女性です」
「しかし、連れはいないんでしょう？」
「いや、いますよ。トイレにでも入っているんだと思います」
「じゃあ、車掌に呼んでもらいましょう」
公安官は、さっさと乗務員室に行き、古賀から聞

いた白石めぐみの名前を車内放送させた。

〈白石めぐみ様、すぐ、4号車1号室においでください〉

同じ放送が、二回、三回と行なわれた。

だが、めぐみは、4号車に戻って来なかった。

「間もなく熱海です。一緒に降りてもらいますよ」

公安官が、宣告を下すみたいに、古賀にいった。

「しかし、僕は、関係ありませんよ。彼女と一緒に伊豆急下田まで行って、今日は一泊することになっているんです」

「しかし、その彼女は、車内を探しても、どこにもいないじゃありませんか」

公安官の一人が、冷たい眼で古賀を見、もう一人の公安官は、床で死んでいる女をじろりと見た。まるで、これがお前の彼女だろうという眼つきだった。

一四時二九分。サロンエクスプレス「踊り子」は、熱海に着いた。

ここから、列車は、東海道本線を離れて伊東線に入る。

ホームには、制服の警官や私服刑事が、緊張した表情で立っていた。

死体には、毛布がかぶせられ、ホームに下ろされた。

公安官は、古賀の腕をつかんで強引に列車からおろした。抵抗すれば手錠をかけかねない勢いに、古賀は、仕方なく、ホームに降りた。

死体と、古賀は、ホームで警察の手に引き渡された。

古賀の眼の前で、サロンエクスプレス「踊り子」は、ゆっくりホームを離れて行った。

(めぐみの奴、どこへ消えちまったんだ?)

4

古賀は、めぐみに腹を立てていたし、つまらない事件に巻き込まれてしまったなと思っていたが、調べてもらえば、自分が関係のないことは、すぐわかってもらえると楽観していた。

古賀は、熱海警察署に連れて行かれた。

四十二、三歳の佐伯という刑事が、古賀に質問した。

「君の名前は？」

と、いった型にはまった質問からである。

古賀は、運転免許証と名刺を佐伯刑事に見せた。

「僕は、事件とは関係ありませんよ」

「その判断は、私のほうでやるよ」

と、佐伯は不機嫌な声でいった。

どうやら気むずかしい刑事らしい。それとも、刑事というのは、みんな気むずかしいのだろうか。そんなことを考えて、古賀は、黙ってしまった。

「仏さんは、君の何だね？」

佐伯がきく。

「何でもありませんよ。知らない女性ですよ」

「それなら、なぜ、一緒に、あの列車に乗っていたのかね？」

「一緒じゃありませんよ。僕は、彼女、白石めぐみという名前ですが、その彼女と、下田への一泊旅行に行く途中だったんです」

「しかし、その白石めぐみという女性は、乗っていなかったんだろう？　公安官がそういっていた。何回、車内放送をしても、出て来なかったそうじゃないか？」

「なぜ、出て来なかったのか、僕にもわかりませんよ。とにかく、あとで彼女に当たってみてください。僕のいっていることが本当だと、すぐ、わかります

よ」

「君は、あの仏さんを知らないといったね？」

「ええ。まったく知らない女性ですからね。僕が白石めぐみと東京駅で乗ったとき、4号車の1号室には、他に乗客はいなかったんです。だから、途中から乗って来たんじゃありませんか？　横浜か、大船あたりから」

「違うね。彼女のハンドバッグの中には、東京から伊豆急下田までの切符が入っていたよ」

「じゃあ、東京駅から乗ってしばらく、パノラマカーにでもいたんでしょう。とにかく、まったく知らない女なんです」

「君の住所は？」

「その運転免許証に書いてありますよ」

「そうだな。三鷹市井の頭二丁目――番地か」

「そうです」

「ところで、仏さんも運転免許証を持っていてね。それに書かれた住所は、三鷹市井の頭二丁目なんだよ」

佐伯刑事は、女の免許証を古賀の前に、滑らせてよこした。

間違いなく、それには井の頭二丁目と書いてあった。

「それは偶然かね？」

と、佐伯がいう。

「もちろん、偶然ですよ。僕は、マンション暮らしですが、隣りに住んでいるのが、どんな人なのかも知りませんよ」

「彼女の名前は、柴田ゆう子だ。その名前にも、覚えはないかね？」

「柴田ゆう子？」

一瞬、古賀の表情が変わった。

柴田ゆう子には、覚えがない。ただ、ゆう子という名前のほうに、覚えがあったからである。

同じゆう子でも、君原ゆう子だった。
前に大出版社に勤める友人に貰った仕事で、「――のマドンナたち」というシリーズの企画があった。
その中に、「喫茶店のマドンナたち」があり、古賀は、東京中の喫茶店を廻って歩いた。
彼の住所の近く、駅前の喫茶店にも、可愛い娘がいて、その娘を採りあげた。彼女の名前が、君原ゆう子である。
取材をいいことに、食事に誘ったりしたこともあるが、それは、めぐみには内緒だった。
あの娘と、名前は同じだが――。
「知っているんだね？」
すかさず、佐伯刑事が突っ込んできた。
「いや、知りませんよ。ぜんぜん」
古賀は、あわてて手を振った。
「それなら、なぜ、同じコンパートメントにいたのかね？」
「そんなこと知りませんよ。誰だって、金さえ払えば切符は買えますからね」
「下田で、一泊する予定だったといったね。下田の何というホテルに予約したのかね？」
「黒潮館という旅館です」
「いつも、そこを使っているのかね？」
「いや。急に彼女と行くことになったので、時刻表を見て電話で予約したんです」
「電話番号は覚えているかね？」
「手帳に書いてありますよ」
古賀は、ポケットから手帳を取り出すと、〇五五八二―二―××××と、番号をいった。
なぜか、佐伯刑事は、ニヤッと笑った。
「何か、おかしいことをいいましたか？」
古賀がきくと、佐伯は、小さな手帳を持ち出した。
「これは、仏さんのハンドバッグにあった手帳なん

だがね。面白いことに、これにも、今、君がいったのと同じ電話番号が書きつけてあるんだよ」
「見せてください」
「いいよ」
刑事は、手帳を開いて見せてくれた。
驚いたことに、そこにも同じ番号が書きつけてあった。しかも、ローマ字で、KUROSHIOKANとも、あった。
「これは偶然ですよ」
そう考えるより仕方がなかった。
「偶然が重なり過ぎるんじゃないかね」
「じゃあ、この旅館に電話してみてください」
「それで、どうするんだね？」
「その柴田ゆう子という人は、きっと、一人で予約していると思うんです。僕は、古賀という名前で二人で申し込んでいます。一昨日の五日の夕方です。調べてくれれば、わかりますよ」
「調べてみよう」
と、佐伯はいった。
佐伯は、電話をかけに調室を出て行ったが、五、六分すると戻って来た。
怒ったような顔で、どっかりと腰を下ろすと、
「君のいうとおり確かに五日の夕方、古賀他一名で黒潮館に申し込んでいる」
「そうでしょう」
「しかし、仏さんは申し込んでいなかったよ。それが当然だよ。君の、他一名が彼女だったんだからな」
「よしてくださいよ。僕が、なぜ見も知らない女性を殺さなければならないんですか？」
古賀は、うんざりした顔でいった。
「それは、おいおい調べていくさ。一緒に下田へ行くことになったが、何かが原因でケンカになって、君はかッとして彼女のくびを締めてしまったんだ」

佐伯刑事が、決めつけるようにいった。

5

時間がたっていった。

その間、何度か帰らせてほしいといったが、古賀の訴えは、完全に無視された。

午後四時を過ぎた。

サロンエクスプレス「踊り子」は、一五時五九分伊豆急下田着のはずだから、めぐみがずっと乗って行ったとすれば、もう、下田に着いているはずである。

「電話してみてくださいよ」

と、古賀は、佐伯刑事に頼んだ。

「白石めぐみに連絡してほしいんです。もう、下田の黒潮館に着いているはずです。そうでなければ、東京の自宅に戻っていると思います。どちらかには、いるはずなんです。彼女に聞いてくれれば、僕が嘘をついていないことがわかりますよ」

「一応、連絡してみよう」

と、佐伯はいい、古賀から、白石めぐみの自宅の電話番号をメモして行った。

だが、すぐ、厳しい顔で戻って来た。

「君のいう白石めぐみは、黒潮館には行っていないよ。自宅にもいないね」

「本当ですか？」

「私を疑うのかね？」

「そうじゃありませんが、彼女は、どちらかにいなければおかしいんですよ。それに彼女が証言してくれれば、すべてがわかるんです。僕が本当のことをいっているのがわかるはずです」

古賀は、必死になっていった。

腹も立ってきた。自分がこんな目にあっているのに、めぐみの奴、どこにいるのかという腹立たしさ

である。

車内放送をしたとき、なぜ出て来てくれなかったのか？

出て来て、一緒に下田に行くことになっていることを話してくれれば、こんなところにとめられることはなかったのだ。

「僕に、電話させてもらえませんか？」

と、古賀は、頼んだ。

佐伯は、しばらく考えていたが、黙って古賀を調室から出し、電話のある部屋へ連れて行った。

時刻は、五時半を廻っている。

サロンエクスプレス「踊り子」の車内で事件があったのが、午後二時近かったから、三時間以上、経過しているわけである。

当然、もう、家に帰っていなければならない時間である。

古賀は、まずめぐみの自宅マンションに、電話をかけてみた。

電話は、鳴っている。が、誰も出ない。

次に、下田の黒潮館にかけた。

向こうの支配人を呼んでもらい、

「五日に予約した古賀ですが、急用ができて行けなくなりました。申しわけありません。それで、僕と一緒に行くはずだった女性から、そちらに何か連絡はありませんでしたか？　白石めぐみという名前なんですが」

「いいえ。何も連絡はありませんよ」

相手は、そっけなくいった。

「本当に、何の連絡もありませんか？」

「ありません」

「どうも」

と、いって古賀は、電話を切るより仕方がなかった。

めぐみは、どこへ消えてしまったのだろうか？

古賀は、頭が混乱してきた。
めぐみは、車内で女性が殺された事件を知っていたのではないだろうか？　それで、自分が巻き込まれるのが嫌で、逃げてしまったのではないのか？
古賀が考えたのは、そういうことだった。
だが、それでも腹が立った。恋人同士ではないか。なぜ顔を出して、古賀のために警察に話をしてくれないのか。
「あきらめたら、どうだね？」
と、佐伯刑事がいった。
「何をあきらめるんですか？」
「君は、恋人をカッとして殺したんだ。それを認めたらどうかと、いってるんだよ。こっちも忙しいんだ。いくら粘っても、やったことは消えやせんよ」
「冗談じゃありませんよ。やってもいないことを、なぜ、やったといわなきゃいけないんですか。死んだ人と僕が無関係なことは、調べてもらえばわかるんです」
「警視庁に依頼して、もう、調べてもらってるさ」
「じゃあ、白石めぐみのことも調べてください。大原鉄鋼のＯＬです。僕と恋人同士で、今日、下田に行くことになっていたことがわかりますよ」
「ああ、調べるさ」
佐伯は、肩をすくめるようにして、いった。
古賀は、留置場に入れられた。
（まるで犯人扱いじゃないか）
と、思ったとき、急に一つのことが頭に閃いた。
ひょっとすると、今日のことは、白石めぐみが計画したことではなかったのかと思ったのである。
（そんなはずはない）
と、もちろん思う。
恋人同士なのだ。
（だが――）
めぐみも、ずっとそう思っていたのだろうか？

ここ一カ月、ほとんど会っていなかった。
それに、君原ゆう子のことがある。
めぐみは知らないと思っていたが、ちゃんと知っていたのではないか。
いや、単に、知っていたのならまだいいが、曲解していたことも考えられるのだ。
ゆう子という名前だけ聞いて、勝手に他のゆう子と勘違いしたのではあるまいか。
（十分、考えられる）
と、思った。
めぐみは、かッとすると自分勝手に解釈することがある。
古賀が浮気していると知って、碌に調べもせずに、彼の近くに住む柴田ゆう子を、その相手だと思い込んでしまったのではないのか。
久しぶりに小さな旅行がしたいといって、古賀を誘い出す。
サロンエクスプレス「踊り子」に、乗りたいといったのは、めぐみだ。
切符の手配をしたのも彼女である。
コンパートメントにしておいて、柴田ゆう子にも誘いをかけておいたのではないか。
その辺は、よくわからない。
とにかく、彼女を誘い出して、あの列車に乗せ、めぐみが殺したのだ。
めぐみは、パノラマラウンジカーに古賀と一緒にいたが、途中で、ハンドバッグを忘れたといってコンパートメントに取りに行った。
あのときに、柴田ゆう子を殺したに違いない。
次に、古賀が行き、死体を発見して大さわぎになった。
めぐみは、それを見届けてから湯河原で降りて、姿を消したのではないのか？
こう考えると、辻褄が合ってくる。

「刑事さーん！」
と、古賀は、大声で呼んだ。
佐伯刑事が、相変わらず不機嫌な顔でやって来た。
「何の用だね？　君の恋人だというＯＬには、至急、警視庁が当たってくれることになったよ」
と、佐伯がいった。
「何もかもわかったんですよ」
古賀は、鉄格子にしがみつくようにして、佐伯にいった。
「何がわかったんだ？」
「僕を罠にはめたのが、何者か、わかったんです。それを聞いてください」
「でたらめじゃないだろうね？」
「違います」
「よし。聞いてやろう」
佐伯は、また、古賀を調室へ連れて行った。
古賀は、急き込んだ調子で、自分の考えを佐伯に喋った。
佐伯は、煙草に火をつけて、黙って古賀の話を聞いていた。
古賀は、話しおわると、
「これでわかったでしょう？　僕にも信じられないんですが、犯人は、白石めぐみなんですよ。僕が裏切ったと思い込んで、間違った女を殺したんです」
「証拠はあるのかね？」
と、佐伯は、煙草を灰皿でもみ消しながらきいた。
「証拠？　彼女が犯人と考えれば、すべての説明がつくじゃありませんか」
「私には、そうは思えないがね」
「しかし、他には考えられませんよ」
「いいかね。君が犯人のほうが今の話よりすっきり説明がつくんだよ。第一、白石めぐみなる女が犯人とすると、いろいろ不自然なところが出てくるじゃないか」

「どこですか？　いってください。説明しますよ」
「柴田ゆう子は、間違えられたんだというんだな？」
「そうですよ。白石めぐみが勝手に僕と関係のある女だと思い込んだんです。僕とは何の関係もない女なんです」
「それなのに、なぜ、そんな女が、のこのこと、あの列車に乗って来たんだね？」
「その辺は、わかりませんが、白石めぐみが上手いことをいって連れ出したんですよ」
「柴田ゆう子の手帳に、下田の旅館の名前と電話番号が書いてあったのは、どうしてなんだね？」
「それも、白石めぐみが、彼女にうまくいって書かせたんですよ」
「また、それかね。上手くいってやらせたか」
「そうに違いないんです」
「君のいうようなことなら、どんなことでも説明ができてしまうんだよ。何もかも、誰かがやったんだといえばな。それじゃあ何にもならないんだ」
「しかし、刑事さん。僕は、誰も殺してないんです。罠にはめられたに違いないんですよ。僕を恨んで罠にはめる可能性があるのは、白石めぐみだけなんです」
「君の恋人は、君が浮気したらしいと思うと、人殺しをするのかね？」
「――――」
「どうなんだね？　そんな怖い女なのかね？」
佐伯がきく。
古賀は、急に、自分の考えに自信がなくなってきた。
白石めぐみは、情熱的な女だ。気性の激しさは知っている。
だが、古賀が浮気したというだけで、相手の女を殺して、彼を犯人に仕立てるだろうか？
しかも相手を間違えてである。

古賀は、また、わからなくなってしまった。
ついさっきまでは、めぐみにはめられたと思い込んでいたのだが、佐伯刑事にいわれると自信がなくなってくるのだ。
しかし、めぐみ以外に、誰が古賀にこんな罠をかけるだろうか？
古賀は、自分を聖人君子とは思っていないが、といって悪人だとも思っていない。友人も何人かいる。平凡だが、まあ人に好かれているほうだと思っていた。
殺人犯にされるような、そんなひどい目に相手をあわせたことはないつもりだった。
唯一、考えられるのが、恋人のめぐみである。
だから、彼女にやられたと思ったのだが、よく考えてみると、めぐみがそんな怖い女とは思えなくなってくるのだ。
「どうしたんだ？　え？」
佐伯刑事が、皮肉な眼つきで古賀を見た。
「わからなくなりました」
「わからない？　何が、わからないんだ？」
「白石めぐみに謀られたと思ったんですが、考えてみると、彼女は、あんなことのできる女じゃないんです。人殺しができるとは思えない」
「何をごちゃごちゃ、いってるんだ。柴田ゆう子を殺したのは、君なんだろうが。白石めぐみとかいう女に罪をかぶせようとしたが、うまくいかなくなっただけなんじゃないのか？」
「そんなことはありません。僕は、何もしていないんです」
「信用できないね。他にいうことはないのか？」
「とにかく白石めぐみに会いたいんです。ここへ連れて来てください」
と、古賀は、頼んだ。

6

翌日、十津川は、静岡県警から協力要請があったとき、単純な事件だと思った。

県警の説明のせいかもしれないが、若い男が恋人と一緒に下田へ一泊二日の旅行に出かけ、その途中、車内でケンカになり、女を殺してしまった。それだけの事件に思えたからである。

「頼むよ」

と、十津川は、西本と日下の二人の若い刑事にいった。

古賀という男のことを調べ、同時に、彼がやたらに連れて来てくれといっている白石めぐみに会ってくる仕事だった。

「静岡県警は、その古賀という男が犯人だと決めてしまっているんですか？」

亀井がきいた。

「そのような、単純な事件らしい」

「しかし、車内で恋人を殺してしまうというのは、普通じゃありませんね」

「かッとしてやったんだろうと、県警でもいっている」

「白石めぐみというのは、何なんですか？」

「古賀という男が、本当の恋人は、その白石めぐみだといっているんだそうだ。殺された女は見たこともないといっているらしい」

「面白い話ですね」

「だが、県警は、苦しいいい逃れだといっていたよ。古賀は、最後には、白石めぐみという恋人が嫉妬から自分を罠にはめたんだとも、いったそうだ」

「恋人がですか？」

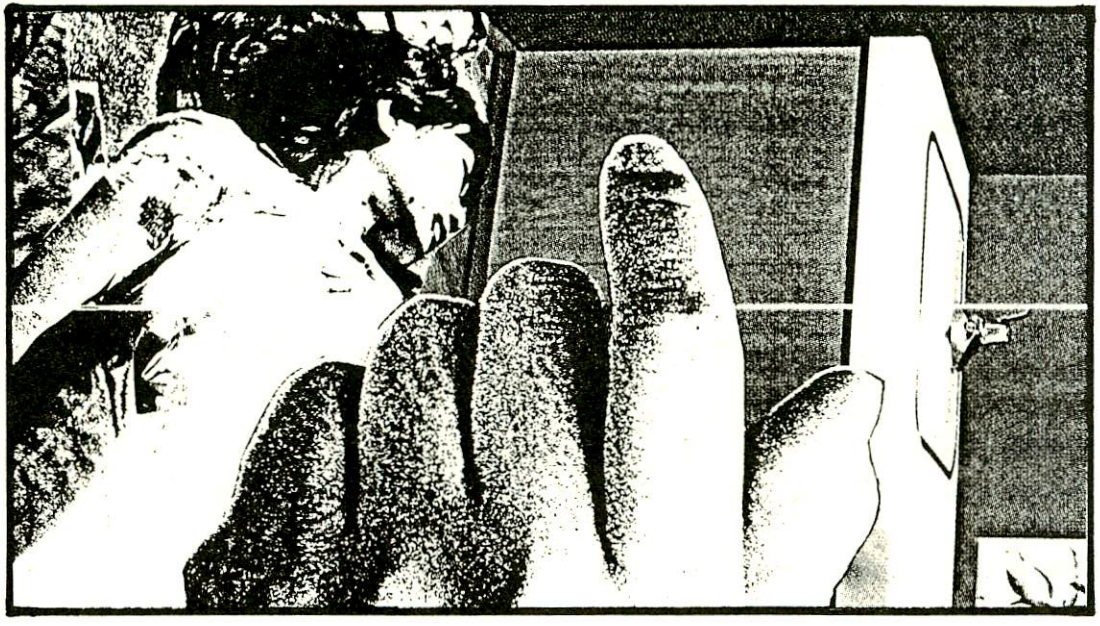
「信じられるかね？」

十津川が、きき返した。

「ちょっと、信じられませんね」
「嫉妬ぐらいで、そんなことはしないと、カメさんは思うのかね？」
「いや、女性は、怖いですよ。しかし、嫉妬からの犯行なら、そんな七面倒な方法はとらないと思うんです。もっと、直情に走るんじゃありませんか」
「なるほどね。かッとしたにしては、行動は冷静にすぎるか」
「そうです。冷静すぎます。かッとして、相手の女を刺したというのでもあれば、納得できるんですが」
「すると、カメさんは、この古賀という男が犯人だと思うのか？」
「そのほうが、すっきりしますね。だから、県警も、古賀を犯人と断定しているんでしょう」
「西本君たちが戻ってくれば、何かわかるだろう」
と、十津川はいった。
煙草に火をつけてから、十津川は、何となくぶぜんとした顔になった。
若いカップルが、一泊二日の旅に出た。楽しいはずの旅行である。それが、一転して殺人事件になり、青年には殺人の疑いがかかっている。
二時間ほどして、西本刑事から電話が入った。
「妙なことになりました」
と、西本はいきなりいった。
「どうしたんだ？」
十津川がきくと、その調子が伝わったのか、亀井が寄って来た。
「今、白石めぐみのマンションにいるんですが、彼女が死んでいるんです」
西本の声が、緊張で堅い。
「本当か？」
「本当です。今、初動捜査班の連中が来ています」
「自殺か？　それとも殺されたのか？」

「わかりません。毒死です」
「遺書はないのか？」
「見つからないようです。初動捜査班の柏原警部が話があるそうです」
と、西本がいい、電話が代わった。
「おれだ。君も、この事件を追っていたとは知らなかったな」
聞き覚えのある柏原の声が聞こえた。
「そうじゃないんだ。静岡県警の依頼でね。向こうで起きた殺人事件の参考人なんだ」
十津川は、手短かにサロンエクスプレス「踊り子」の車内で起きた事件のことを話した。
「なるほどね。事件が妙な方向に動いたことになるな」
「単純な事件と思っていたんだがね。自殺か他殺か、まだ、わからないのか？」
「まだ、わからん。遺書は見つかっていないし、洗面台の近くで死んでいたから、吐こうとしたんじゃないかな。おれは、他殺の可能性が強いと思っているがね」
「毒物は、何なんだ？」
「青酸だと思う」
「何かと一緒に飲んだのか？　酒とかコーヒーとか」
「まるで、おれが訊問されてるみたいだな」
と、柏原は笑ってから、
「国産のウイスキーが出ていたし、水割りを作って飲んだらしいグラスも見つかった」
「そのグラスの中に青酸が入っていたのかな？」
「それは、これから調べてみるさ。それから、彼女は、ネグリジェ姿で死んでいたんだ。なかなかなまめかしかったよ」
「ドアのカギは、かかっていたのか？」
「かかっていた」

「じゃあ誰が開けて、中へ入ったんだ？」
「マンションの管理人だよ。彼女は、昨日、一泊の予定で旅行に行ってくると、管理人にいって出かけたんだ。ところが、今朝、管理人が彼女の部屋の前へ来ると、中からテレビの音が聞こえた。留守のはずなのにおかしいと思ってドアを開けたら、彼女が死んでいたというんだよ」
「つまり、テレビは昨夜からずっとつけっ放しになっていたということだね？」
「そうなるね」
「どうも、自殺とは思えないね」
「同感だよ」
「あとは、私たちが捜査する」
と、十津川はいった。
十津川と亀井は、部下の刑事を連れて現場である成城近くのマンションに急行した。
マンションの三階に彼女の部屋があり、そこで、初動捜査班から事件を引き継いだ。
柏原のいったとおり、白石めぐみは、ピンクのネグリジェ姿で洗面台の傍に倒れて死んでいた。
吐いた痕があった。
ウイスキーのボトルとグラスは、寝室にあったから、寝室から洗面台のところまで来て、必死に吐いたのだろう。
「やはり、これは、自殺とは思えませんね」
と、亀井がいった。
死体は、解剖のために大学病院へ運ばれていった。
寝室にあったウイスキーのボトルとグラスは、毒物が入っているかどうか検査するために、科研に運ばれた。
次に、十津川は、死体の発見者、管理人に会った。
四十五、六歳の小柄で、生まじめな感じの男である。
「彼女は、昨日、旅行に行くといってたんですね？」



十津川がきくと、管理人は、まだ青い顔で、
「朝、会社に行くときに、わざわざ管理人室へお寄りになって、いわれたんですよ。会社がお昼で終わったら、そのまま旅行に行って、日曜日の夜、帰ってくるからよろしくとですよ。それなのにテレビがかかっていたんで、おかしいなと思ったんです」
「彼女が帰宅していたのには、気がつかなかったんですか？」
「昨日は、帰らないといわれていましたからね」
「どこへ旅行するかということは、聞いていましたか？」
「くわしいことは知りませんが、伊豆へ行くとおっしゃっていました」
「彼女のところへ、よく訪ねてくる人間を知りませんか？」
「若い男の人が、ときどき来ていましたよ。白石さんは、古賀さんと呼んでいましたね」
「他には？」
「会社の同僚だという女の人が来ることがありましたが、それだけですね」
「昨日の朝ですが、何か、おかしい様子はなかったですか？」
「おかしいって、どういうことですか？」
「あまり、旅行に行くのを楽しんでいないようだったとか、何か怯えているようだったとかいうことですがね」
「そうですね。そういえば、ちょっと緊張しているようでしたね」
「緊張ね」
「伊豆へ旅行するのなら、もっと、にこにこしていると思ったんですが、表情が堅かったですよ」
「なるほど」
と、十津川は肯いた。
そこに、何かあるのかもしれない。

成城署に捜査本部が置かれた。

十津川は、すぐ、熱海署に連絡を取り、白石めぐみが死んだことを告げた。

最初、佐伯という刑事が出たが、すぐ、木下という警部に代わった。

「白石めぐみが殺されたとなると、妙な具合ですね」

と、木下がいった。

「少なくとも、彼女の殺しに、古賀は無関係でしょう」

「こちらでは、古賀が白石めぐみと一緒に列車に乗ったというのは、嘘だと思っていたんです。しかし、どうも一緒に列車に乗ったような気がして来ましたね」

「そうです。一緒に、サロンエクスプレス『踊り子』に乗ったと思いますよ。そして、車内で殺人事件があったので、東京の自宅マンションに逃げて来たんじゃないかと思っているんですがね」

「そうだとすると、いぜんとして古賀の嫌疑は晴れませんね。まだ、彼が車内のコンパートメントで女を殺した可能性が残ります。いや、前よりも強くなった気がしますね」

「なぜですか？」

「古賀は、白石めぐみという恋人と、昨日、東京発のサロンエクスプレス『踊り子』に乗って下田へ向かった。一泊二日の楽しい旅行です。ところが、古賀が前につき合っていた女、柴田ゆう子が、それを知って同じ列車に、突然、乗り込んで来た」

「なるほど。あわてた古賀は、思わず、その女性を締め殺してしまったというわけですか？」

「そうです。動機の説明もつきますよ」

「そうなると、白石めぐみが殺されたことは、どう説明しますか？」

「そうですね。こちらの事件とは関係なく、殺され

たということは、考えられませんか？」
「私は、関係ありと思っているんですが」
と、十津川はいった。

7

白石めぐみの死を知らされた古賀は、しばらく呆然としてしまった。
それも、殺されたらしいという。
「殺されたというのは、本当なんですか？」
古賀は、佐伯刑事にきいた。どうしても信じられなかったからである。
一時ではあれ、古賀は、めぐみに罠にはめられたと思ったのだ。
そのめぐみが自宅マンションで毒殺されたというのである。
どう考えていいかわからなかった。
「誰に殺されたんですか？」
「それは、警視庁が調べている。まだ自供する気になれんかね？」
「僕は、殺していませんよ」
「いいか。君のために嘘の証言をしてくれる恋人は、もういないんだ。あきらめたらどうだね？」
「僕は、昨日からここに留置されているんです。白石めぐみを殺せるはずがないじゃありませんか？」
「そんなことをいってるんじゃない。君は、車内で柴田ゆう子を殺したろうといってるんだ。東京の事件のことをいってるんじゃない」
佐伯は、叱りつけるようにいった。
「しかし、二つの事件は関係していると思います。同じ人間が犯人ですよ」
「だから、自分は、柴田ゆう子を殺してないというつもりなのかね？」
「同じ犯人なら、僕はシロでしょう？」

「われわれは、違う事件だと考えているんだ」
「僕を釈放して下さい。僕は、めぐみを殺した犯人を、この手で捕えたいんですよ。やらせてください。お願いします」
「君は、自分の立場がわかっていないらしいな。君は、殺人事件の容疑者なんだよ。釈放してもらえると思うのか」
佐伯は、大きく手を広げて古賀を見た。
古賀は、また留置場に戻されてしまった。
古賀は、二重に打ちのめされてしまった。白石めぐみが死んでしまったこと自体、ショックだったが、彼女が死んだことで、古賀のために有利な証言をしてくれる人間がいなくなってしまったことも、ショックだったのだ。
（しかし、誰がめぐみを殺したのだろう？）
多分、そいつが柴田ゆう子も殺して、罪を自分に押しかぶせたのではあるまいか。
そこまでは考えても、その先がわからなかった。こうなってみると、めぐみのことをよく知っているようで知らなかったことを思い知らされた。

8

夜おそくなって、白石めぐみの解剖結果がわかった。
死因は、青酸中毒による窒息である。死亡推定時刻は、昨夜の午後十一時から十二時までの間である。
ほとんど同時に、科研からの報告もあったが、こちらは、ウイスキーのボトルにもグラスにも、青酸反応はなかったというものだった。
青酸は、ウイスキーにではなく、他のものに入っていたのである。
「さっき、熱海署から電話があったよ」
十津川は、亀井にいった。

「古賀に、白石めぐみが殺されたことを知らせたわけですね」
「やはり、古賀は、愕然としていたそうだ。だから、彼女の死は、古賀にとっても予期しなかったことだとわかったよ」
「古賀は、釈放されないんですか？」
「向こうは、車内での殺しは、あくまでも古賀の犯行だと思っているからね」
「すると、別の犯人の仕業と考えているわけですか」
「そうらしい」
「警部は、どうお考えですか？」
「わからないね。ただ、同一犯人なら、古賀は無実だ。少なくとも、彼には白石めぐみは殺せないからね」
「明日、彼女の勤めていた会社へ行けば、何かわかるかもしれませんね。古賀以外の交友関係を知りたいですからね」
翌日の月曜日。
二人は、白石めぐみが働いていた大原鉄鋼の東京本社へ出かけた。
大手町にある新しいビルである。
彼女のいた会計課に行くと、テレビや新聞で事件を知っているらしく、何となく部屋の中がざわついていた。
十津川は、課長に会って話を聞き、その間、亀井は、彼女の同僚に会うことにした。
十津川は、課長室に通された。
「私も、本当にびっくりしています」
と、四十五、六歳に見える課長は、十津川にいった。
「土曜日は、昼までの勤務だったので、退社後、東京駅へ向かい、サロンエクスプレス『踊り子』に乗ったらしいのです」

十津川がいうと、課長は、変な顔をして、
「土曜日ですか？」
「そうです」
「おかしいですね」
「どこがですか？」
「一昨日は、白石君は、休みでしたよ」
「本当ですか？」
「ちゃんと、休暇願いが出ていますよ」
課長は、その用紙を持って来させた。
なるほど、一昨日の土曜日は、めぐみは、休暇願いを出している。
静岡県警の話では、古賀は、土曜日の午後一時（一三時〇〇分）東京発の列車に乗ったと証言しているということだった。
白石めぐみも同じ列車に乗った。
会社は十二時に終わるし、東京駅の近くだから、別に休まなくても「踊り子」に間に合うだろう。
それなのに、なぜ、白石めぐみは、会社を休んだのだろうか。
考えられるのは、東京駅で古賀と落ち合う前に、何かすることがあって、十二時に会社を終わってからでは、間に合わなかったということである。
（誰かに会ったのだろうか？）
もし、そうなら、その人間が犯人という可能性もあるのだ。
十津川が、廊下に出て待っていると、亀井も会計課の部屋から出て来た。
「何か、わかったかね？」
十津川がきくと、亀井は小声で、
「白石めぐみと親しかった女子社員の何人かに当ってみたんですが、どうも彼女は、古賀以外に、もう一人の男と最近つき合うようになっていたようです」
「どんな男かわかるかね？」

「名前は、わかりませんが、白石めぐみは、親しい同僚に、古賀とはまったく正反対の人だといっていたそうです」
「正反対というと？」
「それも、親友は、きいたらしいんですが、お金があって優しくて紳士だと、めぐみは答えていたそうです」
「なるほどね、そのロぶりからすると、白石めぐみは、古賀よりその男のほうへ傾いていたようだね」
「親友も、そういっていましたね」
「しかし、どこの誰かわからないのは困ったね」
「親友ですが、一度、日曜日に、彼女が中年の男性と車に乗っているのを見たといっています。白のポルシェだったそうです」
「それなら、かなりいい生活をしている男だね」
「しかし、中年ですよ。どうも、女の気持ちはわかりませんね」
「カメさんは、古賀が可哀そうだと思うのかい？」
「自分が中年ですからね。余計、若さの素晴らしさを感じるんです。古賀という男は、金はなさそうですが、金では買えない若さを持っていますよ。白石めぐみは、いったい、何を考えていたのか」
亀井は、腹立たしげにいった。
十津川は、苦笑しながら、
「その怪しからん中年男の身元を知りたいね」
「目撃した親友は、この会社の人間ではなかったといっています。すごくお洒落な中年という感じだったそうです。サラリーマンには見えなかったらしいですよ」
「サラリーマンでポルシェを乗り廻すというのは、そうはいないだろうからね。もっと実用性の高い車を買うはずだ」
「一瞬でしたが、タレントのKに似ていたとも、いっています」

「それなら、渋い中年のタレントだろう。若い娘が惹かれても仕方がないね」
「これも、親友の証言ですが、今から思うと、最近、白石めぐみが、よくKの話をしていたというんです」
「K自身ということはないのかね？」
「いや、それはないみたいです。Kではなかったといっていますから」
「何とかして男の身元を知りたいな。カメさんは、残ってもう少し調べてみてくれ」
と、十津川はいった。
十津川は、いったん捜査本部に戻った。
もう一人、調べなければならない人間がいたからである。
サロンエクスプレス「踊り子」の車内で殺された柴田ゆう子のことである。
「警部が出かけられたあとで、熱海署から連絡がありました」
と、西本が十津川にいった。
「どんなことだ？」
「古賀が喋ったことなんですが、殺された柴田ゆう子は知らないが、近くの喫茶店でウエイトレスをしている君原ゆう子は、つき合ったことがあるというのです。犯人は、間違えて同じ名前の女を殺して、自分に罪をなすりつけたのではないかと」
「それで、犯人は、白石めぐみだと思っていたというんだろう？」
「そうです」
「犯人だと思っていた、その白石めぐみが殺されてしまったんだ。古賀の推理は間違っていたんだよ。彼が罠にはまったとしても、はめた奴は別人だ」
と、十津川はいった。
ただ、同じ名前の君原ゆう子という女のことは参考になると思った。

古賀は、白石めぐみが、その二人を間違えたと思い込んでいた。

だが、真犯人が、同じように間違えていた可能性がある。

十津川は、方針を変えて、柴田ゆう子と君原ゆう子の二人を比べてみることにした。

もし、ゆう子という名前以外に、これといった類似点がなければ、犯人が二人を間違えて殺すことはないだろう。柴田ゆう子は柴田ゆう子として、殺されたのだ。

十津川は、西本刑事たちに、二人の女のことをくわしく調べてくるように指示した。

二人の似ている点と違う点を、知りたかったのだ。似ている点が多ければ、間違えた可能性がある。

その結果、次のようになった。

○柴田ゆう子　二十四歳。

身長一六〇センチ、体重五〇キロ。

どちらかといえば、ボーイッシュな顔立ちである。

地元の高校（三鷹市内のM高校）を卒業し、デパート店員、喫茶店のウエイトレスなどをやったあと、国鉄三鷹駅近くのブティック「ヤマモト」に勤める。

両親、姉二人の五人家族で、姉二人は、すでに結婚している。

三鷹市井の頭二丁目の1DKのマンションが住所。

○君原ゆう子　二十三歳。

身長一六二センチ、体重四八キロ。

可愛らしい感じの顔立ちである。

同じM高校を、一年後に卒業し、現在、三鷹駅前の喫茶店「人魚の家（マーメイドハウス）」で働きながら洋裁の勉強をしている。将来は、デザイナー希望。

両親と兄一人。両親と別れて、三鷹駅から歩いて数分のアパートで一人暮らしである。

「似ているところもあるんだな」
十津川は、黒板に書かれた二人の略歴を見ながらいった。
ただ、二人の写真は、すぐわかるほど違っていた。顔立ちが、まるで違っているのだ。
「この二人を間違えることがあると思うかね？」
と、十津川は、亀井たちを見た。
「二人に会ったことのある人間なら、絶対に間違えませんね」
と、清水刑事がいった。
「逆にいえば、会ったことのない人間なら、間違える可能性もないわけじゃないということだな」
「それで、面白いことがあります」
と、西本がいった。
「どんなことだね？」
「マーメイドハウスという店でですが、君原ゆう子がフルネームで呼ばれることは、めったにないそうです。マスターからも客からも、『ゆう子ちゃん』と呼ばれています。マスターも、何ゆう子だったか、とっさには思い出せないといっているし、客は、ほとんど知らないと思いますね」
「そうか。女性の場合は、姓のほうはいわない場合が多いんだな」
「そうなんです。柴田と君原では違うじゃないかというのは、男の感覚かもしれません」
「カメさん。駅前のブティックに行ってみよう」
と、十津川がいった。
「喫茶店のほうへは行かないんですか？」
「間違えられて殺されたのは、柴田ゆう子のほうだからね」
十津川は、亀井を促して、捜査本部を出た。
三鷹駅近くに、「ヤマモト」というブティックがあった。

二階建ての洒落た店である。二人は、二階で、オーナーの山本というデザイナーに会った。
「彼女のことは、本当にびっくりしました」
と、山本は、十津川たちにいった。
「どういう女性だったんですか？」
「性格のいい娘でしたが、少し落着きがなかったですね。最近の若い娘は、みんな、そうですが」
山本は、なげかわしげにいったが、そういう彼も、せいぜい三十歳になったかならないの若さだろう。
「どんなふうに、落着きがなかったんですか？」
亀井が、きいた。
「いつも、今よりいい仕事がないかと、きょろきょろしているようなところがあったんです。目立ちたがり屋というんでしょうね」
「男関係は？」
「ボーイフレンドは何人かいたと思いますよ。しかし、彼女は有名人好きだから、この辺りの男の子は、本心から相手にはしていないみたいでしたね」
「下田に旅行に行くと、あなたに話していましたか？」
「いや、ぜんぜん。うちは、土、日は休みでないんですよ。土曜日に急に休まれてしまって、困りました」
山本は、憮然とした顔でいった。
「彼女のことで、最近、何か変わったことはありませんでしたか？」
十津川が、亀井に代わってきいた。
「と、いいますと？」
「どんなことでもいいんです。急に、浮き浮きしていたとか、この店を辞めたいといっていたとか」
「そういうことはありませんが、妙な電話がありましたよ」
「電話というと？」
「男の声でしたね。オーナーをというので、僕が出

たんです。そうしたら、そちらにゆう子さんという人が働いているか、二十三、四で身長一六〇センチぐらいの女性なんだがと、聞きましたね」
「それで、彼女のことを教えたんですね？」
「ええ。ひょっとすると結婚話があるのかと思いましたのでね。よくいっておきました」
「相手の名前を聞きましたか？」
「ええ。質ねたんですが、おめでたいことで、ちょっと質問しましたというので、ああ、やっぱりと思いました」
「そのことを、柴田ゆう子さんにいいましたか？」
「いや。しばらく黙っていてくださいといわれましたからね」
「彼女のどんなことを話したんですか？」
「住所と電話番号、それに、何が好きとか、家族の状況とかですよ」
「何が好きだといったんですか？」
「彼女は、自分で、旅行が好きだといっていましたから、そのとおり、いっておきました。あれは、彼女の結婚調査じゃなかったんですか？」
「いや、まだ、わかりません」
と、十津川は慎重にいった。
「古賀という男を知っていますか？」
亀井がきいた。
山本はせわしなく眼を動かして、
「知りませんが、それが彼女の結婚話の相手だったんですか？」
「いや、違います。この店で、彼女は何と呼ばれていました？　柴田さんですか？　それとも、ゆう子さんですか？」
「僕は、柴田クンと呼んでいましたが、同僚は、全部、ゆう子さんだったと思いますよ」
と、山本はいった。
次に、十津川たちは、柴田ゆう子と一番仲が良か

ったという三林弓子という店員に会った。
同年齢の二十四歳だという小柄な女だった。
「彼女は、いつも、何かいいことがあるんじゃないかって夢を見てたわ」
と、弓子は十津川たちにいった。
「それで、何かいいことがあったようだった？」
十津川がきいた。
「うん。素敵な人が見つかったみたいなことをいってたわ」
「どんな男性か聞いていないかね？」
「お金持ちで素敵な車を持っているんですって」
「ポルシェかな？」
「車の名前は聞かなかったわ」
「その男の名前とか職業は、聞いたことがなかったかね？」
「聞いたんだけど、教えてくれなかったわ。結婚することになったら教えてくれるみたいなことをいってたから、本当に好きになっていたんだと思うな」
弓子は、いってから、「可哀そう」と呟いた。

9

二人は、礼をいって、外へ出た。
「何か、少しずつ、わかって来た感じだね」
と、歩きながら、十津川が亀井にいった。
「白石めぐみの前に現われた男が金持ちで、ポルシェに乗っている中年ということだったが、柴田ゆう子の前に現われた男も似ているね。中年かどうかは、まだわからないが」
「私は、同一人物の気がしますね。その男が柴田ゆう子をサロンエクスプレス『踊り子』に乗せて、殺したんですよ」
「罪を古賀にかぶせるためにかね？」
「ええ」

「その証拠が欲しいし、男の正体も知りたいね」

二人は、喋りながら、柴田ゆう子が住んでいたマンションにやって来た。

管理人に頼んで、彼女の部屋を開けてもらった。

六畳に、バス、トイレがついている。若い女の部屋らしく、きれいに飾られていた。

「王子様を待つシンデレラの部屋という感じですね」

と、亀井がいった。

その柴田ゆう子の前に、王子様が現われたのか。本当は悪魔だったのに、外見で王子様と錯覚したのかもしれない。

「男のことを書いたものがあれば、いいんだがね」

と、部屋を見廻しながら、十津川は、呟いた。

机の引出しや三面鏡の引出しなども調べてみた。

写真は、沢山あった。

ブティックの同僚と一緒に撮ったものや、若い男とバイクに乗っている写真もある。

だが、ポルシェで男と、という写真はなかった。

手紙も同じである。

「もし、最初から殺そうとして近づいたのなら、犯人が自分のことをあれこれ話すはずがないし、写真を撮らせるはずもないんだな」

と、十津川はいった。

「そうですね。しかし、最初から殺すつもりではなかったと思います」

亀井は、異議を唱えた。

「と、いうと？」

十津川は、改めて部屋の中を見廻してから、亀井にきいた。

「ある中年の男が、白石めぐみに惚れました。多分、その男には妻子があるんじゃないですかね。めぐみは、その男の優しさや財力やポルシェには憧れたが、妻子のあることと、古賀という恋人がいるので、あ

まりいい返事をしなかったんだと思います。そこで男は、古賀のことを調べたんでしょう」
「古賀が、ゆう子という女とつき合ったことがあるのを知ったか？」
「そうです。ただ、二十三、四歳で、ゆう子ということしかわからない。それで男は、古賀の家の近くのブティックや喫茶店など、若い女が働いていそうなところを調べたんだと思います。もし、先に、『人魚の家』という喫茶店のほうに電話をしていたら、君原ゆう子を見つけたと思いますが、幸か不幸か、先にブティック『ヤマモト』に電話し、柴田ゆう子をその女と思い込んでしまったんです」
「うん」
「最初は殺す気などはなく、白石めぐみに、古賀にそういう女がいると話したんだと思いますね」
「古賀をあきらめさせようとしてか？」
「そうです。ところが、白石めぐみは古賀を信じて男のほうになびいて来ない。そこで、柴田ゆう子を殺し、それを古賀の仕業にしてやろうと考えたんだと思います」
「なるほどね。その推理のほうが自然だな」
と十津川もいった。
「それにしても、問題の男の素性がわかりませんね」
亀井が、いまいましげに呟いた。
「車の線から洗ってみるかね」
「ポルシェの持ち主の線ですか？」
「ベンツの持ち主は、かなりいるだろうが、ポルシェは、少ないんじゃないかね。一応、東京都内でポルシェを持っている男を、ピックアップしてみようと思う」
と、十津川はいった。
捜査本部に戻ると、十津川は、西本と日下を東京陸運局へ行かせて、ポルシェの持ち主を洗い出させ

た。

そんなに多くはないだろうと思ったのだが、それでも百台を越していた。ドイツ車の人気ということだろう。

名前と住所、職業、年齢まで書き出した。

「この中から問題の男を見つけ出すのは、大変ですよ」

亀井が、名簿を見て、うんざりした顔になっている。

十津川が、笑って、

「大丈夫だよ。問題の男は、どこかで白石めぐみと接点があったはずなんだ。偶然、出会ったとは思えない。だから、白石めぐみの住んでいたマンションの近くの人間か、あるいは彼女が勤めていた大原鉄鋼と関係のあった人間だと思うのだよ。その線で調べていけば限定していけるはずだよ」

と、いった。

白石めぐみのマンションは、小田急線成城学園前駅から歩いて、七、八分のところにある。

ポルシェの持ち主で、そのマンションの近くに住んでいる男を調べてみた。

その結果、二人の人間が浮かんできた。

次は、大原鉄鋼の関係者である。大原鉄鋼の取引先に今井機械という会社があり、そこの社長がポルシェに乗っていた。

全部で三人である。

その三人を、一人ずつ洗っていくことにした。

今井機械の社長、今井敬は、年齢四十二歳で妻子がある。

しかし、調べてみると今井は、現在、商談のためにアメリカに行っていることがわかった。柴田ゆう子が、サロンエクスプレス「踊り子」のコンパートメントで殺されたときも、アメリカにいたのである。

二人目は、成城に住み、新宿で大きなカメラ店を

やっている皆川慎吾、三十九歳である。
いかにも青年実業家という感じで、ポルシェの他にも、あと二台の車を持っていた。
モデルをやっていたという奥さんがいるが、子供はいない。
三人目は内科医の矢野俊明。四十歳で、父も医者という資産家である。
妻と、五歳になる娘がいる。なかなかのプレイボーイだという噂だった。
「この二人のどちらかだろうね」
と、十津川は、手に入れた二人の写真を見た。
カメラ店は、土曜日は休みではないが、日曜日は休みだった。
医者のほうは、土曜は半日、日曜日は休みだから、二人とも、何とか、「踊り子」に乗れただろう。社長なら、土曜日でもカメラ店に出なくても構わないに違いない。
十津川は、まず、この二人を西本たちに尾行させてみた。
犯人は、「踊り子」の車内で柴田ゆう子を殺し、次に、白石めぐみを毒殺しているのだ。何か、行動におかしなところが出るのではないかと思ったからである。
だが、二人とも平然と構えていた。
皆川のほうは、毎日きちんと新宿の店に顔を出していたし、矢野も動揺は見せていなかった。
「問題の土曜日ですが」
と、西本が十津川に報告した。
「皆川のほうは、午前九時の開店と同時に店に顔を出し、いつものように社員に朝の訓示をしてから、都内を廻ってくるといって車で出かけたそうです。そして午後八時の閉店のときには、ちゃんと姿を見せていたといっています」
「矢野のほうはどうだ？」

「看護婦の証言では、土曜日は午前十一時ごろまで病院にいて、そのあと急用があるといって出かけたそうです」
「二人ともアリバイなしか」
「そうですね。二人ともはっきりしたアリバイはありません。『踊り子』の車内で柴田ゆう子が殺されたのが、湯河原の手前です。熱海着は、一四時二九分。熱海で降りて新幹線で引き返せば、一五時二九分には、『こだま』で東京駅に着けます。皆川にしても、閉店の午後八時までには、ゆっくり新宿の店に戻れます」
「医者の矢野にしても、土曜日のうちに家に帰っていられるわけだ」
「そうです。家族には怪しまれません」
「白石めぐみが、医者の矢野に診てもらったことがあるかどうか調べてみてくれないか」
と、十津川はいった。
もし、矢野医院に行ったことがあれば、それが確実な接点になるのだ。
亀井が、それを調べることになった。

10

亀井は、ひとりで矢野医院に出かけて行った。
大病院というのではないが、内科、小児科、皮膚科があり、矢野の他に三人の医者がいる病院だった。
亀井は、受付で、いきなり女事務員に警察手帳を見せた。
「ちょっと聞きたいんだがね」
と、わざと亀井は、高圧的に出た。
女事務員は、緊張した顔になって、
「何でしょうか？」
「この人が患者として、この病院に来たことがあるはずなんだがね」

亀井は、白石めぐみの写真を相手に見せた。
嘘はつかせないぞという気迫があった。
「名前は、白石めぐみだ」
と、亀井は付け加えた。押しかぶせるようないい方である。
相手は、怯えた顔で、
「はい。この患者さんなら、いらっしゃったことがあります」
「カルテを見せてくれないか」
と、亀井はいった。後になってから、否定されると困ると思ったからである。何しろ白石めぐみは、死んでしまっている。彼女の証言は当てにできないからである。
奥からカルテが持ち出された。
確かに、白石めぐみの名前があった。一カ月前に、風邪で来ていた。
「これを、借りたいんだがね」
「でも、院長にお聞きしないと」
と、女事務員が初めて抵抗した。
「いいんだ。借用証を書いておくよ」
亀井は、名刺を取り出すと、それにカルテを借りることを書いて彼女に渡した。
亀井は、それを持ち帰って、十津川に見せた。
「やっぱり、白石めぐみは、矢野医院に行っていましたよ」
「診察したのは矢野なんだな」
「そうです。内科ですから」
「しかし、よく、このカルテを貸してくれたね？」
十津川が笑ってきくと、亀井は、
「引ったくって来たんです。今ごろ矢野が報告を受けて、かっかしてるんじゃありませんか」
「コピーを取ったら、一緒に返しに行こうじゃないか。ついでに矢野に会って来よう」
と、十津川はいった。

コピーをとったあと、十津川は亀井と一緒に矢野病院へ出かけた。

亀井がいったように、矢野は腹を立てていた。

「医者は、患者の秘密を守る義務を負わされているんですよ。たとえ警察といえども、患者のカルテを勝手に持ち去ることは、許されないんじゃありませんかね」

と、矢野は十津川に文句をいった。

「亀井刑事は、借用証を書いていますし、それに、これは殺人事件の捜査なんです。協力していただきたいですね」

十津川は、冷静な口調でいった。

「それなら、最初から私にそういったらどうですか」

「これからは、そうしましょう。ついでに、お伺いしたいことがあります」

「どんなことですか？」

「白石めぐみさんは、ご存じでしたね？　患者として、あなたの診察を受けているんですから」

「それは、患者として知っているだけですよ」

「あなたのポルシェに、彼女を乗せてドライブしたことはありませんか？」

「そんな覚えはないですよ」

「おかしいですね。あなたの運転するポルシェに、彼女が乗っているのを見た人がいるんですよ」

「誰がそんなことをいってるんですか？」

「彼女の友だちです」

「覚えがありませんね」

「先週の土曜日ですが、先生は、午前十一時までここにいて、そのあとどこかへ出かけられたそうですね」

「そんな私的なことに、いちいち返事をしなければいけないんですか？」

矢野は、じろりと十津川と亀井を見た。

「二人の女性が殺されているんです。答えていただきたいですね」
十津川は、負けずに見つめ返した。
先に、矢野が眼をそらせた。
「だから、急用があったんですよ」
「東京駅へ行く用ですか？」
「東京駅？　何のことです？」
矢野の眼が峻しくなった。
「もちろん、サロンエクスプレス『踊り子』に乗るためですよ。あの列車は、午後一時ジャストに東京駅を出るから、ここを十一時ぐらいには出ないと間に合いませんね。十二時まで診察をやっていたのでは、乗ることができない」
「あなたのいっていることが、わかりませんね」
「わかるはずですよ。あなたは、風邪をひいて診てもらいにきた白石めぐみに惚れてしまった。いや、あなたのように金と地位のある人には下品ないい方かな。あなたには、奥さんがいる。若い娘の中には、それでもいいという者もいるだろうが、彼女は、ノーといった。彼女には古賀という恋人がいたからですよ。そこで、あなたは、古賀のことを調べてみた。すると彼が、自宅近くに住む、ゆう子という二十三、四の女と親しくしているという話を聞いた。そこで、どんな女かを知りたくなった。そして三鷹駅近くのブティック『ヤマモト』で働く、二十四歳の柴田ゆう子を見つけ出した。あなたは、白石めぐみに向かって、古賀は、こういう女とつき合っているといって諦めさせようとした。だが彼女は、あなたの話を一笑に附してしまった。そこで、あなたは、非常手段に訴えたんですよ」
「何のことかわかりませんね」
「彼女が土曜日に、古賀と下田へ一泊旅行に行くと聞いて、二人の乗るサロンエクスプレスの車内で柴田ゆう子を殺し、その罪を古賀にかぶせようと計画

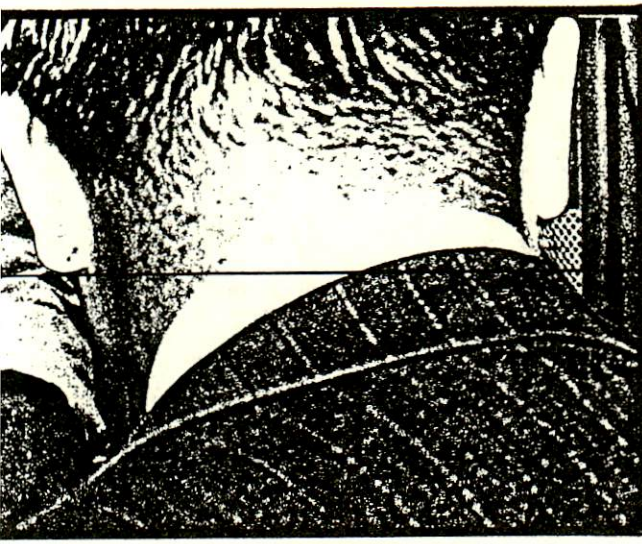
したんですよ。柴田ゆう子というのは、妻子のある男だろうと、相手が金持ちで地位のある人間なら、喜んでつき合うタイプの女だった。そこで、あなたは、彼女を下田への旅行に誘った。古賀たちの行く下田の旅館の名前と電話番号をメモさせ、列車の切符を渡した。柴田ゆう子は嬉々として乗ったと思いますよ。そうしておいて、あなたは、彼女を古賀たちのコンパートメント内で殺したんですよ。古賀を罠にはめたわけです」

「――――」

「列車内は、ちょっとした騒ぎになった。少なくとも、死体の転がっていたコンパートメントの中はね。驚く白石めぐみを、あなたは、強引に熱海でおろしてしまった。事件に巻き込まれたら大変だといってでしょう。あなたの思惑どおり、古賀は容疑者になり熱海警察署に逮捕されてしまった。あなたは、白石めぐみを説得する。多分、こういってでしょうね。殺された柴田ゆう子は、あなたと古賀が下田へ行くと知って、『踊り子』に乗り込んで来た。もともと古賀が手を出したのだから、彼が悪い。彼は、突然、彼女に押しかけられて困ってしまい、つい、彼女のくびを締めて殺してしまった。そんな古賀は、あきらめなさいとね。ところが、白石めぐみは、あなたの言葉を信じなかった。これは何かの間違いに違いないから、明日、熱海署へ行って古賀に会うと、いったんじゃありませんか？」

「――――」

「あなたは、あくまで、自分の意のままにならない白石めぐみに腹を立てて、殺すことを決意した。そこで、急に態度を変え、彼女に向かって、あなたのいうとおりだと、いったんじゃありませんか。明日、最初の『こだま』で熱海へ行き、古賀に会ってあげなさい。きっと、これは何かの間違いでしょうとね。そして、今夜は、早く眠ったほうがいい。眠れなけ



れば、この薬を飲みなさいといって、青酸を入れた錠剤を渡したんだと思う。興奮している白石めぐみは、すぐに眠れないに違いないから必ず飲むと、あなたは、確信したに違いない。そのとおり、白石めぐみは眠ろうとして眠れず、あなたに貰った錠剤を水割りと一緒に飲んだんです。そして、死んだ。吐き出そうとして洗面台のところまで行き、力つきて死んだんですよ」

「面白い話だが、証拠はあるんですか？」

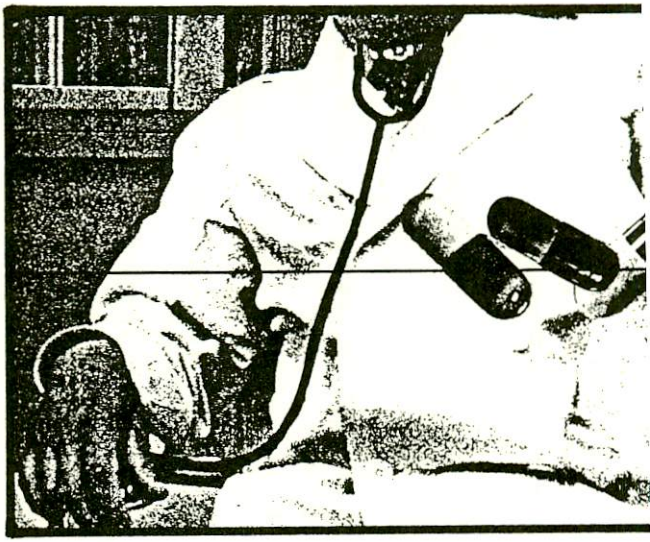
矢野が、反撃してきた。

「証拠は、今のところありません。あれば、ここへ逮捕令状を持って来ていますよ。だが、私はね。あなたが、二人の女性を殺したと確信しているんです」

「告訴しますよ」

「私が、殺人犯呼ばわりしたからですか？」

「そうです。何もしていない人間に向かって、殺人



犯呼ばわりしたんですよ。告訴するのが当然でしょう。私には優秀な弁護士がいる。頼んで、あなたを告訴して、あなたを追放してやる」

「構いませんよ」

十津川は、あっさりといった。

11

二人は、病院を出た。

「大丈夫ですか？　あそこまでいってしまって」

と、亀井が心配そうにきいた。

いつもは、カッとして相手を必要以上に追い込むのは亀井で、それを十津川が抑える側に廻るのである。今日は逆だった。

「大丈夫だよ。私は、彼が二人の女性を殺したと確信しているんだ。もし、間違っていたら、辞職でも何でもするよ」

「証拠が必要です」
「そうだね。矢野は、あくまでも白石めぐみとのつき合いを否定している。だから、矢野が彼女と一緒にいるところを見た人間を探し出したい。それから矢野は、彼女のマンションに行き、青酸入りの錠剤を渡したと思う。彼があのマンションに入るところを見た人間もだ」
「もう一つ、矢野が柴田ゆう子を殺したのなら、サロンエクスプレス『踊り子』に乗っていたことになります。誰かが車内で彼を見ていると思いますね」
「そうだ。それも調べてみよう」
と、十津川はいった。
刑事全員で目撃者探しが行なわれた。
最初は、なかなか目撃者が見つからなかった。
しかし、矢野がよく行く銀座のクラブで、彼が、白石めぐみと一緒に飲みに来たことが、まずわかった。
「きれいな娘さんだったわ。隅のほうで、しきりにくどいていたわね」
と、ママが証言してくれた。
おそらく、白石めぐみの勤めていた会社の前で待ち受けていて、銀座へ誘い出したのだろう。その店のホステスも、白石めぐみだったと証言した。
目撃者が一人見つかると、次々に見つかるものである。
土曜日の夜十時半ごろ、白石めぐみのマンションの近くに、白いポルシェが駐まっているのを見た人間が、見つかった。
同じマンションの住人で、若いサラリーマンである。
車好きの彼は、同じマンションにポルシェを持つ人がいるのだろうかと不思議に思い、見ていると、マンションから男が出て来て、そのポルシェに乗り込んだ。

「あの男の人は、間違いなく矢野医院の先生でした。僕は、ときどき、あの病院へ診てもらいに行くんで、先生の顔はよく知っているんです。ポルシェで往診に来たのかと思って感心したんですよ」

と、若いサラリーマンはいった。

もちろん、矢野は、ポルシェで往診に来たのではない。

青酸カリの錠剤を白石めぐみに渡しに来たのだ。

しかし、矢野が、サロンエクスプレス「踊り子」に乗ったという証拠は、なかなか見つからなかった。目撃者が見つからないのだ。

あの日の「踊り子」の車掌にも当たったし、熱海の駅員にも西本が会って来た。しかし、矢野を見たという証言は得られなかった。

十津川は、それでも、矢野が用心深く車内で行動していたからだと解釈した。土曜日、矢野が、サロンエクスプレス「踊り子」に乗る必要がなかったのなら、十二時まで診療時間があるのに、急用があったと嘘をついて、十一時に診療をやめて、外出することはないはずなのだ。

十津川は、矢野に対する逮捕令状を貰って、彼を逮捕し、連行した。

十津川は、彼に銀座のクラブのママや、ホステスの証言、土曜日の夜、白石めぐみのマンションで矢野が出てくるのを見たサラリーマンの証言を聞かせた。

「どうだね？　みんな見られているんだよ」

と、十津川がいうと、矢野は、意外にあっけなく、

「申しわけありませんでした」

と、頭を下げた。

「じゃあ、二人の女性を殺したことを認めるんだね？」

「白石めぐみを殺したことは認めますよ。しかし、柴田ゆう子を殺したのは私じゃない」

と、矢野は、しっかりした口調でいった。
「じゃあ、誰が彼女を殺したというんだ？」
「白石めぐみですよ」
「なぜ彼女を殺すんだ？」
十津川がきくと、矢野は、急にニヤッと笑って、
「警部さんは、頭が切れるが、女に対しては大甘ですね」
「なぜ？」
「確かに、私は、病院にやって来た白石めぐみに惚れましたよ。ドライブに誘いもしたし、クラブにも連れて行きましたよ。それを彼女は別に嫌がりもしなかった。喜んでついて来ていたんですよ」
「しかし、君は、古賀のことを調べて、彼がつき合った女を見つけ出したんだろう？　間違った女を見つけてしまったわけだが」
「それはしましたよ。白石めぐみが、私とつき合いながら古賀に悪いというのでね。古賀だって浮気しているのを教えてやりたかったんですよ」
「それで、白石めぐみは信じたのか？」
「信じましたよ」
「しかし、それなら彼女が、古賀と二人で下田へ旅行に行ったのはおかしいじゃないか」
「白石めぐみは、貧乏人の古賀とは別れたくなっていたんですよ。それで、彼と最後の旅行をして、別れることを承知させる気だったんです。私のほうに気が移っていたんですよ。しかし、古賀は、彼女に惚れ切っているから別れることは承知しないだろう。そう考えた彼女は、非常手段に訴えることにしたんです」
「古賀を罠にかけることをかね？」
「そうですよ」
「そんなことは信じられないね」
十津川がいうと、矢野はまた笑って、
「警部さんは、女の怖さを知らないな。彼女はね、

私とつき合うようになって、ぜいたくを覚えたんです。銀座で買い物をし、高級クラブで飲み、ポルシェでドライブする。古賀とでは絶対にできない生活ですよ。その生活を、古賀に邪魔されたくなかったんですね。それで、私から聞いていた柴田ゆう子を誘い出したんです。どういったかはわからない。しかし、どうやったかはわかりますよ。四人用のコンパートメントの切符を、四枚全部、買ってしまったんです。そうしないと他の乗客が入ってくる恐れがありますからね。その切符の一枚を柴田ゆう子に渡して、サロンエクスプレス『踊り子』に乗り込ませ、途中からコンパートメントに来るようにいったんですよ。そうしておいて、白石めぐみは彼女を殺した。何も知らない古賀は、コンパートメントに戻って、そこに若い女が殺されているのを見て、あわてて車掌に知らせた。そのあとは警部さんが、よくご存じでしょう。古賀は、柴田ゆう子を殺した犯人にされ、白石めぐみは何くわぬ顔で東京へ戻って来たんです」

「信じられないね」

「しかし、よく考えてみてください。彼女は、土曜日、会社を休んでいるんでしょう。私が犯人で、白石めぐみは何でもないのなら、なぜ、半日休む必要があるんですか？　十二時に退社してからだって、ゆっくり東京駅へ行けるんですからね。彼女は、その間、柴田ゆう子に切符を渡したり、どこで、コンパートメントに入って来たらいいかなどを、指図していたんですよ」

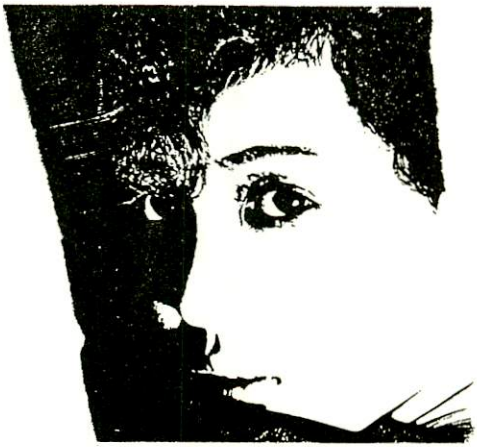
「君だって、十一時に診療をやめて外出したじゃないか？」

「あれは、白石めぐみに呼び出されたんですよ。行ったら彼女はこういいましたよ。これから下田へ行くが、古賀とはすっぱり別れてくるとね」

「しかし、それなら、なぜ君は、自分のものになっ

た白石めぐみを殺したんだ？」
「それですか」
と、矢野は、苦い表情になって、
「帰って来た彼女は、私にこういったんですよ。古賀とは別れたから結婚してくれとね。私が、とんでもない、妻とは別れられないといったら、顔色を変えましてね。家内に会って何もかも話すというんです。私と一緒になりたいために、人殺しまでしたんですよ。私が頼んだわけでもないのにですよ。私は怖くなったんです。あの女のために、何もかも、めちゃめちゃにされると思いましたね」
「それで、殺したのか？」
「自分を守るためですよ」
矢野は、そういった。
十津川は、憮然とした表情になって矢野を見つめた。

潮風にのせた死の便り



1

警視庁捜査一課の亀井刑事は、家の近くで、折りたたんだ紙片を拾った。

歩きながら広げてみると、便箋二枚にわたる手紙とわかった。

家に帰ってから眼を通してみた。

〈ここは、坂の多い町です。私は、毎日、坂の上から、じっと町を見ています。

いえ、町を見ているんじゃありません。あいつが、この町にやってくるのを待っているんです。

私が、この町に来ていると知れば、あいつは、必ずここへ来ます。絶対に。

覚悟はできているんです。別に、死ぬのが怖いとは思っていません。あいつが私を殺そうとすると き、じっと、あいつの顔を見てやりたい。

私が死んだら、あいつが殺したと思ってください。

あなたに、仇をとってくれとはいいません。

ただ、私が、あなたを愛していて、そのために死んだのだと思ってください。

Y・K〉

封筒はないから、どこの誰に出したものかわからない。差出人は、「Y・K」となっていても、何のイニシアルかわからないのだ。

Kだって、加藤、香取、木内、工藤といくらでも考えられる。亀井自身だって、考えてみればKである。

ただ、文面は、まともにうけとれば、ただごとではない。

どこかの町で、殺されるのを待っている人間がいるのである。

亀井は、上司である十津川警部の自宅に電話をか

けた。
「妙な手紙を拾いまして、そのことで至急、お会いしたいんですが」
と、亀井はいった。
十津川とは、もう長年のつき合いで、それだけで一時間後に新宿の喫茶店で会うことになった。
駅ビルの最上階にある喫茶店である。
亀井は、先に行って、窓際の席から新宿のネオンを見ながら十津川を待った。
十津川が、顔を見せると、亀井は、
「わざわざ、呼び出したりして申しわけありません」
と、いった。
十津川は、笑って、
「カメさんが、電話して来たんだから、きっと、大事なことだろうと思ってね」
「それが、私自身にも、よくわからないんですよ。それで、警部に判断していただこうと思いまして」
亀井は、二枚の便箋を十津川に渡した。
十津川は、コーヒーを飲みながら、二回読み返した。
「これを書いたのは、女かな？」
と、十津川は呟いた。
「筆跡や、『あなたを愛していて――』という文章からみて、女性だと思いますが」
「問題は、いくつかあるね。これが、事実を書いているのかどうかということが、まず、ある」
「ええ。わかっています」
「事実だとして、この手紙が、いつ書かれたものかも問題だね。一年も二年も前の手紙で、結果的に何も起きてないのなら、われわれが取りあげることもないからね」
「そう古いものじゃないと思います。便箋も真新しいし、ボールペンの文字も新しい感じですから」

「君は、いつも同じ道を歩いて帰るのかね？」
「そうです。駅から同じ道を通っています。今朝、出勤のときには、この手紙は落ちていませんでした」
「すると、今日、誰かが落としたことになるね」
「そうなんです。それに、古い手紙を持ち歩いていて、それを落とすことは、めったにないと思うので、多分、最近の手紙だと思いますね」
「それに、カメさんは、冗談で書かれたものじゃないと思っているわけだね？」
「私は、本気で書かれた手紙だと思ったんです。それで、警部にも眼を通していただいたんですが」
「それなら、私は、カメさんの眼を信じるよ」
と、十津川は微笑した。
「ありがとうございます」
「しかし、坂の多い町というだけでは、どこなのかわからないね」
「日本には、坂の多い町というのは、たくさんあります。長崎でも函館でも、そういわれていますから」
「そうだねえ」
「海沿いの町というのは、山が迫っていると自然に坂が多くなります。封筒がついていれば、すぐわかったかもしれないんですが」
「受取人は、東京だろうね」
「そう思います」
「手紙の主を女とすると、彼女は、おそらく死を覚悟して、坂の多い町に行ったことになる」
「死を覚悟してです」
「死をね。明日、調べてみよう」
と、十津川はいった。

2

翌日、警視庁に出勤すると、十津川は、ここ一カ月の間に全国で起きた事件を調べてみた。

女が殺された事件だけでなく、自殺、事故死も調べた。自殺や事故死に見せかけて殺されているかもしれなかったからである。

一カ月間に、東京を除いた全国で殺された女性は十三人だった。

多いようにも、少ないようにも思えた。

このうち、「坂の多い町」で起きた事件に限定していった。

その結果、二つの事件が残った。

長崎で、九月十二日に起きた人妻殺人事件と、尾道で九月十六日にあった若い女が殺された事件である。

十津川は、この二つのうち、尾道のほうを調べてみることにした。

長崎を除外したのは、殺された人妻が現地の女性だったからである。

あの手紙によれば、手紙の主は、東京から、その町に行ったことになっていたからである。

尾道のほうは、二十五、六歳の女性で、一週間たった現在も身元不明なのだという。

十津川は、事件を担当している尾道警察署の佐藤という警部に電話を入れて、くわしい事情を聞いてみることにした。

「身元がわからずに困っているのです」

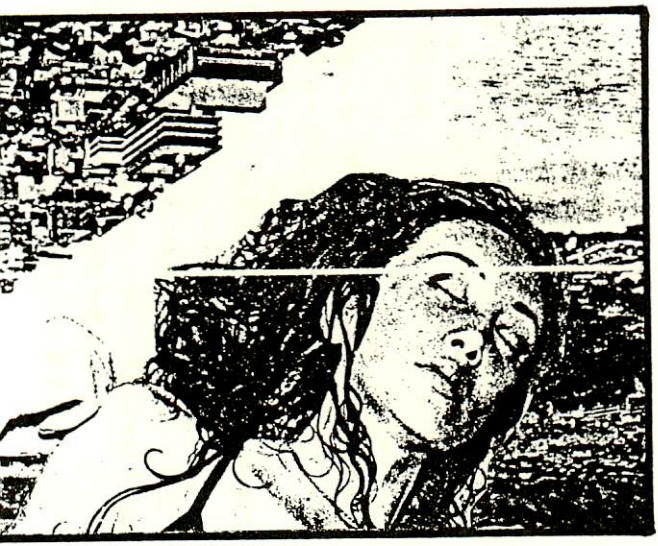
と、佐藤は、正直ないい方をした。

「新聞によると、二十五、六歳の女性ということですが」

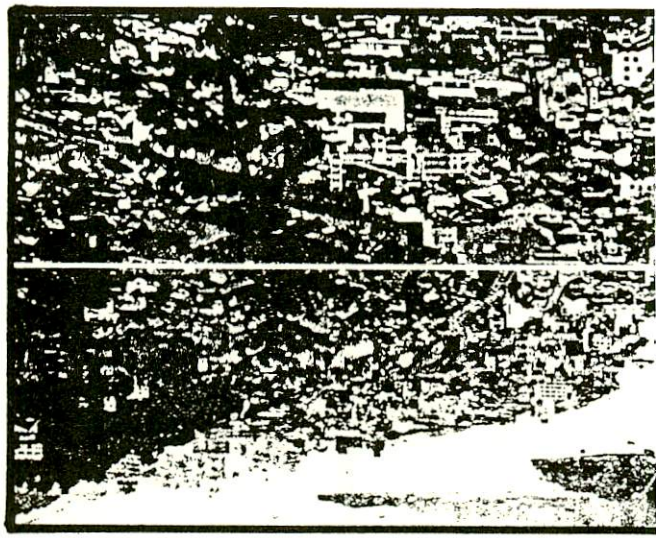
「そうです。しかし、これも、推定年齢でしてね」

「くわしく話してくれませんか。ひょっとすると、こちらで探している女性かもしれないのです」

「尾道の町から、対岸の向島へ、日に何度か渡し船が通っています」



「向島というのは、造船所なんかのあるところですね？」
「そうです。その間に尾道水道があるわけですが、渡し船の上から、水道に浮かんでいる女の死体が発見されたんです。九月十六日の早朝です。解剖の結果、頭を殴り、殺してから海に投げ込んだとわかりました。死んだのは、前日の十五日の夜だろうということでした」
「地元の人間かどうかも、わからずですか？」
「おそらく、地元の人間ではないと思いますね。地元の人間なら、家族が名乗り出てくると思いますからね。観光客だろうと思って、目下、ホテル、旅館に当たっているところです」
「収穫は、ありそうですか？」
「まだですが、観光客なら何か反応があると思っています。ところで、そちらで探している女性ではないかというのは、どういうことですか？」



と、今度は、佐藤がきいた。
十津川は、亀井が拾った手紙のことを話した。
「なるほど。面白いですね」
と、佐藤も興味を示してきた。
「尾道は、坂の多い町でしょう？」
「ええ。坂だらけですよ」
と、佐藤は、笑った。
「一度、そちらへ伺いたいんですが」
と、十津川はいった。

3

翌九月二十五日。十津川と亀井は、例の手紙を持って尾道に向かった。
尾道警察署からの協力要請という形がとられての出張だった。
福山まで新幹線で行き、福山から山陽本線に乗り

かえた。
尾道駅に着くと、佐藤警部が迎えに来てくれていた。
「海の匂いがしますね」
と、改札口を出たところで、十津川がいった。
すぐ前は海で、背後には山が迫っている。
佐藤は、二人を尾道警察署へ案内した。
十津川たちは、まず、遺体を見せてもらった。
今の若い女性にしては、小柄だった。
彫りの深い、美しい顔をしている。理知的な感じでもある。
「まだ、身元はわかりませんか？」
十津川がきくと、
「今日になって、被害者が泊まっていたと思われる旅館を見つけました」
と、佐藤は、嬉しそうにいった。
「それはよかったですね」
「ただ、宿帳に書かれた名前と住所は信用できません」
「住所はでたらめなんですか？」
「東京でしたが、うちに、東京生まれの男がいまして、でたらめだというんです。大田区松原と書いてあったんですが、松原は世田谷区だそうですね？」
「そうです。世田谷区です」
「それで、名前のほうも、でたらめではないかと思います」
「泊まっていたのは、この仏さんに間違いないんですか？」
と、十津川はきいた。
「旅館の主人と従業員に見てもらいました。間違いないといっていました」
「その旅館に案内してもらえませんか」
と、十津川はいった。
その旅館は、林芙美子の「放浪記」などに書かれ

た千光寺の近くにあった。
尾道の町を見下ろす高台にある旅館である。
十津川は、旅館の主人に、泊まり客が書いたという宿帳を見せてもらった。
名前は、「小早川ゆき」とある。
「Y・Kですね」
と、亀井が小声でいった。
十津川は、肯きながら、持参した手紙を広げた。
二つの筆跡を比べてみた。
佐藤警部ものぞき込んだ。
「よく似ていますよ」
と、亀井がいった。
「彼女は、いつから、ここに泊まっていたんですか？」
十津川が、旅館の主人にきいた。
「九月十日から十五日までいらっしゃいました。十五日の昼にチェック・アウトなさったんです」
と、旅館の主人がいう。
「その日の夜、殺されたことになります」
佐藤が、いった。
「ここに泊まっている間の様子は、どんなでしたか？」
十津川は、旅館の主人にきいた。
「あまり外出はされませんでしたね。ご自分の部屋で、窓の外をぼんやり見ていらっしゃることが多かったようです」
「窓から何が見えるんですか？」
「尾道の町や向島が、よく見えます」
「誰か、彼女を訪ねて来ませんでしたか？」
亀井がきくと、旅館の主人は、ちょっと考えてから、
「一人もいらっしゃらなかったですね。電話はかかって来ましたが」
「電話は、いつ、誰からです？」

佐藤が、勢い込んできいた。
「一度だけです。十五日の午前中、十時ごろだったと思いますね」
「相手は男ですか？　それとも女？」
「男の方でした」
「彼女が出たんですね？」
「小早川さんを呼んでくれといわれたんで、お部屋につなぎました」
「十五日にチェック・アウトしたといいますが、最初から、十五日までということで泊まったんですか？」
これは、十津川がきいた。
「いえ。しばらく泊まるということで、日は決めていませんでした」
「すると、男から電話があって、急にチェック・アウトしたんですね？」
「そうです」
「ここを出て行くとき、嬉しそうにしていましたか？」
「そうですねえ。どちらかといえば、疲れたような顔をなさっていたんじゃないですかね。緊張したような――」
「ここには、五日間、泊まっていたことになりますが、男からの電話を待っていたようなところがありましたか？」
「多分、そう思います。あまり外出なさらなかったのは、電話のことがあったからだと思いますね」
と、旅館の主人はいった。
「彼女が、手紙を書いていたのは知りませんか？」
と、亀井がきいた。
「私は、知りませんが」
と、主人はいったが、三人いる従業員にもきいてみてくれた。
三十歳くらいの女性従業員が、

「そういえば、便箋と封筒を買って来てくれと頼まれました」
と、いった。
「それはいつですか？」
「九月十二日か、十三日です」
「それで、買って来たんですね？」
「ええ。切手も買って来て差しあげました」
「あなたが買って来た便箋は、これですか？」
十津川は、例の手紙を相手に見せた。
白い便箋で、うすく、すすきが描いてある。
相手は、じっと見ていたが、
「これと同じものだったと思いますわ」
と、いった。

4

十津川たちは、彼女が泊まっていた二階の部屋へ案内してもらった。
窓を開けると、眼下に尾道の町が広がり、その先に、尾道水道と小高い山のつらなる向島が見えた。
十津川は、手紙の中にあった「あいつが、この町にやってくるのを待っているんです」という言葉を思い出した。
尾道の町を見ながら、本当に、あいつの来るのを待っているという言葉だった。
「彼女は、ここで電話を待ちながら、尾道の町を見ていたんですね」
と、亀井がいった。
「カメさんは、同一人と思うんだね？」
「ええ。思いますよ。便箋も同じだというし、筆跡も似ていますからね」
「すると、名前は本物でしょうか？」
と、佐藤警部が口を挟んだ。
十津川は、その佐藤に、

「おそらく偽名じゃないと思いますよ。彼女が手紙の主なら、死を覚悟してここへ来ていたわけですから、偽名を使う必要はなかったはずです」
「しかし、住所は嘘でしたが」
「それは、名前さえ本物にしておけば、すべてわかってくれると思ったからでしょう。特に手紙の受取人にです」
「そうですねえ」
と、佐藤は、肯いてから、
「死を覚悟して、この尾道へ来たというのは、どういうことでしょうかねえ」
「私にもわかりませんね」
と、十津川はいった。
十津川たちは、尾道警察署に戻った。
念のために、問題の手紙と宿帳の文字を、専門家に鑑定してもらうことになった。
十津川と亀井は、渡し船で、向島への小さな旅行をしてみることにした。
駅前桟橋からも、小さなフェリーボートが出発する。
それに二人は、乗った。料金は、大人二人、たった四十円である。
朝夕のラッシュ・アワーにはなっていないで、乗客は少なかった。
自転車と一緒に乗っている乗客が多かった。
船は、尾道水道を渡って行く。
海面を吹いてくる風は、もう冷たかった。
海水は、意外にきれいだった。
「ここに浮かんでいたんですね」
と、亀井は海面を見つめた。
三分ほどで対岸の向島に着いた。
二人は、海岸をしばらく歩いた。対岸に尾道の町が見える。
「十中、八九、手紙の主だよ」

と、十津川はいった。
「そうだとすると、わからないことが一つあります」
亀井が、歩きながらいった。
「殺されるのをわかっていて、この町へやって来た女の気持ちかね？」
「それもありますが、手紙の受取人の気持ちもです。文面から見ると、死んだ女の恋人だと思うんです」
「そうか。彼が、あんな手紙を受け取っていながら、なぜ、尾道へ飛んで行かなかったのかということだね？」
「そうです。私だったら飛んで行って、彼女を守りますよ」
「そうだね、私もそうするだろうね」
「もし、行けない理由があったのなら、警察に届けるべきですよ。そして、警察に守ってくれるように頼むべきです。なぜ、そうしないで、彼女を殺させてしまったんでしょうか？」
「確かに不可解だね」
十津川は、海に眼をやった。
今の状態では、わからないことの多い事件である。
一人の女が、殺されるのを覚悟で尾道へやって来て、殺されてしまった。
簡単にいえば、それだけのことなのだが、わかっているのは、それだけでもあるのだ。
その夜、十津川たちは、さっきの旅館に泊まることにした。
夕食のときに、女子従業員に、彼女のことを話してもらった。
「なんでもいいんだ。話してくれないか」
と、十津川は頼んだ。
鈴木弓子（すずきゆみこ）という女子従業員は、お茶をいれてくれながら、
「あの方は、本当に殺されてしまったんですねえ」

と、溜息をついた。
「だから、犯人を捕えたいんだ。彼女が何をいったか、どんなことをしたか教えてほしいんだよ」
「あまり、お喋りをしないお客さんでしたからねえ」
「しかし、五日もいたんだから、何か話したんじゃないの？」
と、亀井が声をかけた。
「前に、この尾道に来たことがあるといっていましたよ」
「前にね。いつごろ来たんだろう？」
「桜がきれいだったとおっしゃっていたから、三月末か四月上旬じゃありませんか？」
「そのときもこの旅館に泊まったんだろうか？」
「私は、もう、ここに二年間ご厄介になっていますけど、あの方は初めてお眼にかかるお客さまでしたよ」
と、弓子はいった。
すると、別の旅館かホテルに泊まったのだろう。
「その話をするとき、彼女は、どんな様子だった？」
と、十津川はきいた。
「あまり楽しそうな顔はしていらっしゃいませんでしたね。だから、いい思い出じゃなかったんだと思いますよ」
「他には、どんな話をしていたのかね？」
「結婚のことをきいてみたんですよ」
弓子は、ニヤッとした。
「彼女は、どんな反応を示したかね？」
と、亀井が弓子を見た。
「結婚といって、しばらく考えていらっしゃいましたよ。それから急に、変な笑い方をして、いいわね、結婚もって、自棄みたいないい方をなさった。だから、いけないことをきいてしまったのかと思って、それきり、やめてしまったんですけど」

「しばらく、考えていたか――」
「ええ」
「あんたは、それをどう思ったね？」
「結婚したくてもできない事情があるのかなと思いましたわ。例えば、相手が妻子持ちだったりして――」
「妻子持ちか」
「今はやりの不倫ですよ。男の人からの電話は、その相手からじゃなかったかと思ったんですけどねえ」
と、弓子はいった。
翌日、旅館に佐藤警部から電話があった。
筆跡鑑定の結果、同一人だという結論を得たというのである。
十津川は、小早川ゆきが、桜の季節にもこの尾道に来たことがあったらしいことを話した。
「どこに泊まったか、そのとき何かなかったか、調べてくれませんか」
と、十津川はいった。
そのときも、おそらく小早川ゆきの名前で泊まったに違いない。だから、簡単にわかると思ったのだが、二時間しても三時間たっても、佐藤から連絡がなかった。
昼を過ぎても回答がない。
夕方になって、やっと佐藤から電話が入った。
「参りましたよ」
と、佐藤はいった。
「見つかりませんでしたか？」
「いや、やっと見つけましたが、今年の春じゃないんです。去年の四月でした」
「一年半前ですか」
「そうなんですよ。それに、そのときは男と一緒でしてね。男の名前しか宿帳にはのってなかったんです」

「それで、よく見つけましたね」
と、十津川がいうと、佐藤は、その件について話しに行きますといって電話を切ってしまった。
どうやら複雑な事情があるらしい。
旅館で待っていると、佐藤がやって来た。
「実は、どうしてもわからなくて、諦めかけていたんです」
と、佐藤は、十津川にいった。
「そのとき、刑事の一人が、去年の四月に起きた事件のことを思い出しましてね。その事件というのが、これなんです」
佐藤は、去年四月の新聞の縮刷版を取り出し、四月六日の夕刊のページを広げて、十津川たちに見せた。
〈旅館の泊まり客が、事故死〉
と、見出しが出ていた。
〈六日の午前八時ごろ、向島の海辺で、若い男の溺死体が発見された。警察で調べたところ、尾道市の旅館「きく乃」に宿泊中の白石徹(しらいしとおる)さん（二十八歳）＝東京都世田谷区松原×丁目、スカイパーク「松原」二〇五号室＝と、わかった。
一緒に、泊まっていた小早川ゆきさん（二十四歳）によると、白石さんは、五日の夜、旅館を出たまま行方不明になっていたものである。酔って海に落ちて溺死したのではないかと見られている〉

5

「本当に、溺死だったんですか？」
と、亀井がきいた。
「最初は、疑問を持ちました。酔っていたとはいっても、わざわざ尾道水道を渡って向島へ行き、そこ

で海に落ちるというのは不自然ですからね。一緒にいた小早川ゆきという女が怪しいと思って調べました。いや、調べたのは、私じゃなくて原田という男です」

と、佐藤はいった。

「それで、やはり、事故死ということになったんですか？」

「他殺の証拠が見つかりませんでしたからね」

「小早川ゆきは、どういっていたんですか？」

と、十津川がきいた。

「原田刑事の話では、何をきいても黙っていたそうです。それで、犯人ではないかと疑ったといっています。しかし、ずっと旅館にいたというアリバイがあったので、結局、事故死と断定されたわけです」

「死んだ白石徹というのは、どういう男だったんですか？」

「新進の建築家で、将来有望ということでした」

「そして、小早川ゆきは、若く美しかった」

「そうですね。素敵なカップルだったようです。旅館『きく乃』のおかみも、とても似合いの二人だったと証言しています」

「泊まっている間も仲が良かったんですかね？」

「ここに、そのときの旅館のおかみの証言がのっています」

と、佐藤がいい、調書を見せてくれた。

――あなたの旅館には、いつから泊まっていたんですか？

「四月二日の午後、お二人でいらっしゃいました」

――二人はどんな様子でした？

「とても仲が良くて、うちの若い女子従業員なんか、みんな当てられっ放しでしたよ」

――では、ハネムーンのように見えたわけですか？

「ええ。でも、あとで、どうやら婚前旅行らしいと

わかりました。女の方が、今年の秋に一緒になるんだと嬉しそうにおっしゃっていましたから」

——仲が良かったというと、いつも一緒にいたわけですか？

「ええ。いつも、ぴったり、ご一緒にいらっしゃいましたよ。部屋にいるときも外に出て行くときも」

——しかし、五日の夜、男が一人で出かけていますね。

「ええ。だから、変だなと思っていたんですよ。女の方だけ、ひとりで部屋にいらっしゃるんで、どうなさったんですかとおききしたら、気分が悪いので残ったといわれました。本当に青い顔をなさっていましたわ」

——男は、朝になっても帰って来なかったんですね？

「ええ。それで心配になって警察に届けたんですけど、まさか亡くなっていらっしゃるなんて——」

——二日に来てから五日までの間に、何か、おかしいなと思ったことはありませんか？　急に二人の様子がおかしくなったとか。

「そうですわねえ。そういえば、五日のお昼前に、お二人でお出かけになったんですけど、帰って来てからのお二人の様子が変でしたわ」

——どんなふうに変だったんですか？

「お出かけになるときとは、別人のように見えましたわ。顔色も悪いし、明るくお喋りをなさっていた方が、お二人とも黙ってしまわれて」

——そして、夕食のあと、男が一人で出かけて行き、向島で死んだというわけですね？

「ええ。それが、ひょっとすると自殺じゃないかと思ったくらいなんですよ。ずいぶん元気がないみたいでしたからねえ」

——それで、女性に、五日に外出したとき何があったかきいてみましたか？

「心配だから、お聞きしようと思っていたら、あの事件ですからねえ。それどころじゃなくなってしまったんですよ」

旅館「きく乃」のおかみの話は、そこで終わりだった。

「今、この旅館はどうしているんですか？」

調書から眼をあげて、十津川がきいた。

「それが、火事で焼けてしまいました」

と、佐藤がいった。

「いつのことですか？」

「事故死があって二週間後です。夜半に、急に火事が発生しましてね。泊まり客が三人も焼死していまして」

「おかみさんは、今どこにいるんですか？」

「今年の七月から再建にとりかかって、現在も工事中です。おかみさんですが、火事の直後は泊まり客が死んだこともあって、ノイローゼ気味になりましてね。しばらく入院していたんです。補償のほうも何とか終わって、最近やっと普通の生活ができるようになったようです。お会いになりたければ、ご案内しますが」

「会いたいですね」

と、十津川はいった。

十津川と亀井は、佐藤に案内されて、旅館を出て、「きく乃」の再建現場に向かった。

「小早川ゆきは、本当は、同じ旅館に泊まるつもりだったかもしれませんね」

と、歩きながら亀井が十津川にいった。

「そうだろうね」

と、十津川は、肯いてから、佐藤に、

「火事の原因は、何だったんですか？」

「放火です」

と、佐藤がいう。

「間違いないんですか？」
「調べたところ、ガソリンを撒かれた形跡がありましたからね。明らかに放火です」
「犯人は、捕まったんですか？」
「残念ながら、まだ捕まっていません。『きく乃』のおかみも、いい人ですし、周囲とトラブルを起こしたことはありませんでしたからね。放火の理由がつかめないんですよ。そのころ、他に放火事件もありませんでしたからね」
「例の事故死との関係は、どうですか？」
十津川がきくと、佐藤は、頭を振って、
「事故死は、旅館の責任じゃないでしょう」
と、いった。
十二分ほど歩いた場所で、旅館の建築が行なわれていた。
夜になっていて、もう仕事は終わっていた。
その近くにプレハブの家があり、「きく乃」のおかみさんは、そこにいた。
一時、ノイローゼで入院していたというが、今は元気だった。
十津川が、一年半前の事故死のことをきくと、おかみさんは思い出そうと額に手を当てて、
「いい感じのお二人でしたけどねえ。あの女の方は、本当に尾道へまたいらっしゃっていたんですか？」
「そうです。殺されましたがね」
「可哀そうに。あのときの悲しみようといったら、ありませんでしたよ。きっと、その思い出のために尾道へ来たんでしょうにね」
「連れの男性が死んだ前後のことを、くわしく話してくれませんか」
と、十津川は、頼んだ。
「どんなことをお話ししたらいいんですか？」
「五日の昼すぎに二人で外出して、帰って来たら様子が変わっていたということですが、その理由を二

人にききましたか？」
「うちの従業員が、夕食をお持ちしたとき、きいたようですよ。心配ですからね」
「それで、二人は何と返事をしたんですか？」
「男の方が何でもないといって、女の方は、黙っていたということでしたよ。私も聞こうと思っていたんですけど、そのお客さまが死んでしまわれて――」
「放火は、そのせいだとは思いませんか？」
「え？」
おかみさんは、びっくりした顔になった。
「去年四月五日の事故死ですが、私は、殺人だと思っているんですよ。白石徹という泊まり客は、向島へ誰かに会いに行き、その人間に殺されたんだと思うのです」
「でも、溺死と聞いていますけど」
「白石という人は、逞しい感じの男でしたか？」
「いえ。痩せた、いかにも優しい感じの男の方でしたよ。女の方も小柄で、よくお似合いでしたわ」
「それなら、溺死に見せかけて殺すことも可能です。力の強い男が、相手を水中に押しつけて殺せますからね」
「何と、恐ろしい――」
「もし、彼が殺されたのだとすると、同じ日の外出時のことが大事になるんです。私が想像すると、そのとき、犯人に会ったのではないかと思うのです。その犯人に、向島に呼び出されて、溺死に見せかけて殺されたのではないかと思っているんです」
「それなら、女の人は、なぜ警察にそのことをいわなかったんでしょうかしらね？」
「それは、私にもわかりません。いろいろと事情があったんでしょう」
「あのとき、お二人に、外で何があったのか聞いておくんでしたよ」
おかみさんは、口惜しそうにいった。

「火事の前に、何か脅迫めいたことはありませんでしたか？」

と、十津川はきいた。

「そうですわねえ」

と、おかみさんは、ちょっと考えていたが、

「変な電話がありましたよ」

「脅迫電話ですか？」

「男の人の声で、私が出ると、『何も喋るな』っていうんです。二度か三度ありましたよ。私は、何のことかわからないので、『どんなことですか？』と、ききましたけど」

「それを、警察にはいわなかったんですか？」

「別に、心当たりがありませんでしたもの。そのうちに電話がかかって来なくなりましたから、警察には連絡しませんでした」

「そして放火ですか」

「別に、恨みを受けるようなことはありませんのに」

「放火したのは、脅迫電話の主かもしれません」

「なぜ、そんなことを？」

「今もいったように、白石という男性は殺されたんです。犯人は、その日に二人に会っている。そのことを、白石さんか小早川ゆきさんが、旅館の人に喋っているかもしれない。犯人は、そう思って、おかみさんに脅迫電話をかけたんです」

「それで、『何も喋るな』って、いったんですか？」

「そう思いますね。犯人としては、それでも不安だった。そこで火をつけたんです。夜半ということでしたが？」

「午前二時ごろでしたよ」

「寝入ったところを狙って、犯人は、おかみさんを焼き殺そうとしたのかもしれない。おかみさんだけじゃなくて、二人から話を聞いたかもしれない旅館の従業員全員をです」

「そんな――」
「ところが、死んだのは、泊まり客三人だった」
「後始末が大変でしたわ。放火と判断されても、亡くなった方たちへの責任は負わなければなりませんものね」
「犯人は、失敗したわけです。しかし、おかみさんのほうも、後始末で大変で、入院までしてしまった」
「ええ」
「そして、今度、小早川ゆきさんも殺されてしまいました。私は、一年半前に白石さんを殺した人間が、犯人だと思っています」
「本当に、そうなんですか――？」
「間違いないと思います。そこで、おかみさんにお願いがあるんですが」
と、十津川はいった。
「どんなことでしょうか？」
「承知するしないは、おかみさんの自由です」
十津川がいうと、おかみさんは、笑って、
「あまり難しいことは、私にはできませんよ」
「難しくはありませんが、危険は、あります」
「いってみてくれません。たいていのことは驚きませんから」
「犯人に罠をかけたいんです」
と、十津川はいった。

6

十津川たちは、旅館に戻ると、東京の西本刑事に電話をかけた。
一年半前に死んだ白石徹、それと小早川ゆきについて調べるようにいっておいたのである。
「世田谷区松原のマンションへ行って来ました。間違いなく一年半前に、白石徹が２ＤＫの部屋を借り

て住んでいました」
「若い建築家だということだが、そのとおりかね？」
「そのとおりです。将来有望な若い建築家です。いくつか彼の設計した建物を見ましたが、なかなか素晴らしいものです。今でも、惜しい人間だったという声があります」
「小早川ゆきのことは、どうだね？」
「わかりました。小早川ゆきは、N大の文学部を卒業したあとN出版に就職しました。この出版社は、そう大きくありませんが、建築雑誌を出しています」
「それで、二人は、知り合ったか？」
「そのとおりです。出版社の上司に会って来ました。彼女は、頭も良く美人なので、社内でも人気があったそうです。白石徹とのことは、みんな知っていて、似合いのカップルということで祝福していたようです」
「結婚を約束していたのかね？」
「そうらしいです」
「ということは、一年半前の尾道行は婚前旅行か」
「そうでしょうね」
「一年半前に、白石は、尾道で死んだ。そのあとの小早川ゆきは、どうしていたんだろう？」
「直後に、彼女は、N出版をやめ、姿を消してしまいました。N出版でも、彼女がどこへ行ったかわからないと、いっています」
「しかし、彼女の元の住所はわかっているんだろう？」
と、十津川はきいた。
「白石と同じ世田谷区内です。下馬にあるマンションに住んでいたんですが、去年の四月末にどこかへ引っ越してしまっています。管理人や隣りの人たちに聞いてみましたが、誰も知りませんでした」

「彼女の家族や白石徹の家族、あるいは、友人に当たってみたのか？」

「それを、これからやろうと思っているところです」

と、西本はいった。

翌日の新聞に、十津川が「きく乃」のおかみさんに頼んだ、犯人への罠がのっていた。

〈一年半前の事件について、「きく乃」の女将が、衝撃の告白〉

という見出しの記事である。

〈一年半前の四月五日に、「きく乃」の泊まり客の一人が溺死した。事故死ということになったが、旅館の女将は、あれは殺人ではないかと語った〉

と、内容には書いてある。

その理由として、おかみさんの談話というのがのっている。

「あのとき、実をいうと、亡くなった方とお連れの方が昼に外出なさって、青い顔でお帰りになっているんです。心配になって、どうなさったんですかときましたよ。そうしたら、町で恐ろしい人間に会った。ひょっとすると殺されるかもしれないとおっしゃっていたんです。ですから、あのお客さんは、事故死なんかじゃなく殺されたんですよ。そのとき、お二人が口にした人間の名前を、今、思い出そうとしているんですけど、なかなか思い出せなくて。もちろん、思い出したら、すぐ警察に連絡しますよ」

7

一年半前に、白石徹を殺し、今度、小早川ゆきを殺した犯人が、この記事を見れば、「きく乃」のお

かみさんの口を封じようとするのではないか。
それが、十津川の計算だったし、おかみさんは、危険を承知で引き受けてくれたのである。
今、尾道署の刑事が彼女をガードしてくれているが、十津川たちも、それを応援するつもりだった。
「しかし、警部。これは東京の新聞にはのらないんじゃありませんか」
と、亀井がいう。
「そうだな。のらないだろうね。何といっても一年半前の事件だからね。しかし、犯人が、まだ尾道にいたら、必ず見るさ」
と、十津川はいった。
朝食のあと、十津川と亀井も、出かけて行き、「きく乃」の建築現場近くで監視に当たった。
「犯人が、どんな奴かまったくわからないというのは、まるで眼かくしをされて戦っているようなものですね」
と、亀井は文句をいった。
「白石という、痩身だが、若い男を溺死させたんだ。だから、多分、男だよ。老人じゃない。若い男だと思うね」
と、十津川はいった。
「なぜ、そいつは、白石徹を殺したんですかね？」
「私は、それよりも、そのとき、なぜ小早川ゆきを殺さなかったか、また、そのことを小早川ゆきが、なぜ警察にいわなかったのか、そのほうが不思議で仕方がないんだよ」
「彼女にも、後ろ暗いところがあるということでしょうか？」
「それに、小早川ゆきが出した手紙の受取人だ。この人間まで、なぜ警察に連絡して来なかったんだろう？」
「そのことなんですが――」
と、亀井は、考えながらいった。

「何か、カメさんの考えがありそうだね」
「手紙の受取人が、どんな人間なのか、まったく見当がつきませんが、ひょっとすると、あの手紙をわざと落としたんじゃないかと思うんです」
と、亀井がいう。
「わざとというと？」
「その人間を、仮にSとします。Sは、あの手紙を受け取って、小早川ゆきが死ぬ気でいることを知りました。しかし、何か理由があって警察に話すことができない。そこで、わざと手紙を落として私に拾わせたんじゃないか」
「つまり、カメさんが刑事と知っていて、拾わせたということかい？」
「私は、いつも同じ道を通りますからね。きっと、相手は、私の顔を知っているんだと思います。それで先廻りして、私の帰る道にあれを落としておいたんじゃないでしょうか？」
「刑事の君なら、必ず興味を持って何とかすると思ったのかねえ」
「そう思います」
と、亀井はいった。
「すると、その人間は、カメさんの家の近くに住んでいる可能性が強いねえ」
と、十津川はいった。

8

東京では、西本と日下の二人の若い刑事が、小早川ゆきの大学時代の友人たちに会っていた。
彼女の両親は、北海道なので、まず、友人たちに会ってみることにしたのである。
ゆきと仲が良かったという何人かの女性に会った。
OLとして働いている女性もいれば、すでに結婚している女性もいた。

その中の結婚している神林(かんばやし)あい子は、西本たちにゆきのことを、こう、いった。

「建築家の白石さんとつき合っていたことは、知っています。一緒にうちへ遊びに来たこともあるんですよ」

「似合いのカップルに見えましたか？」

と、西本はきいてみた。

「ええ、とても。でも、なかなか結婚しないんで、どうしたのかなと思っていたんです」

「もっと早く結婚する感じだったんですか？」

「ええ。二人ともアツアツでしたもの」

「去年の四月に、二人で尾道へ旅行に行って、白石さんが死んだことは知っていますか？」

「ええ。新聞で見ましたから知っていますわ」

「今度、小早川ゆきさんが、同じ尾道で死んだのは知っていましたか？」

「ええ」

「どう思いました？」

「わかりませんわ。彼女は、殺されたっていうんでしょう？　あんないい人を誰が殺したのかと思って」

「去年の四月ですが、白石さんが亡くなったあと、ゆきさんは、出版社をやめて、姿を消してしまったんですが、どこにいたのかご存じでしたか？」

「今年の三月の初めに、彼女に会っているんです」

と、あい子はいった。

「どこでですか？」

「新宿を歩いていて、偶然、会ったんですわ」

「声をかけましたか？」

「ええ」

「彼女の反応は、どうでした？」

と、西本はきいた。

「元気がありませんでしたわ」

「何か話したんでしょう？」

「ええ。私が強引に、近くの喫茶店へ連れて行って話をしたんです」
「どんなことが話題になりました？」
「質問するのは、もっぱら私のほうだったんです」
「ええ」
「今、どこにいるのかとか、何をしているのかとか、知りたいことがいくつもありましたから」
「彼女は、ちゃんと答えてくれましたか？」
「いいえ。ほとんど答えてくれませんでしたわ。でも、好きな男の人がいるみたいでしたわ」
「彼女が、そういったんですか？」
「いいえ。ただ、時間を気にしていて、途中で電話をかけてましたもの。悪いけど、トイレに立ったふりして、ちょっと盗み聞きしたんです。そしたら彼女は、九時までには帰るから心配しないでと、いっていましたわ。だから、好きな人がいると思ったんです」
と、あい子はいった。
西本は、手紙のことを思い出した。あの中に、「あなたを愛している」と書いた相手だろうか。
「その男の名前は、わかりませんか？」
「わかりませんわ」
「しかし、彼がいるかどうかきいたんでしょう？」
「ええ」
「返事は？」
「笑っていました。でも、明るい笑いじゃなかったんです」
「なぜだろう？」
「やっぱり、去年亡くなった白石さんのことが、彼女の心に引っかかっていたんじゃないかと思いますけど」
「その他、何か話しませんでしたか？」
「どこに住んでいるのか、電話番号を教えてともいったんですけど、教えてくれませんでしたわ」

「尾道のことは、話しませんでした？」
「ええ。私も、それはいえなくて、触れなかったんです」
「彼女は、何かを恐れていたんじゃないかと思うんですよ。彼女一人じゃなくて、白石さんのほうもね。誰かをといってもいい。そのことは、何かいっていませんでしたか？」
「いいえ」
と、あい子はいった。
結局、何もわからないのと同じだった。

9

東京に戻って来た十津川と亀井は、白石の友人に会ってみることにした。
今度の小早川ゆきの死は、一年半前の白石の死とつながっていると思ったからである。

同じ若手の建築家で、白石と大学も同じだったという関根という男に会った。
「白石が死んだと聞いたときは、しばらく信じられませんでしたよ。今でも信じられませんがね」
「死ぬ前ですが、白石さんに何か変わったことはありませんでしたか？　誰かを怖がっていたといったようなことですが」
十津川がきくと、関根は、しばらく考え込んでいたが、
「変なことが一つありましたよ。いや、二つかな」
「どんなことですか？」
「白石は、カーキチでしてね。白いフェラーリを乗り廻していたんですが、急に乗らなくなってしまったんです」
「もう一つは何ですか？」
「白石が死ぬ半月ほど前でしたかね。男が一人、僕の事務所へ訪ねて来たんです。そして、あんたの友

だちの白石は、白いフェラーリを持ってないか。そのナンバーは、この数字じゃないかと、きいていきましたよ」

「何と答えたんですか？」

「相手が何者かわからないので、知らないといっておきましたがね」

「どんな男でした？」

「そうですね。逞しい身体つきの男でしたね。身長は、一八〇センチくらいですかね。柔道でもやっていそうな身体つきをしていましたよ」

と、関根はいった。

「白石さんが、急にフェラーリに乗らなくなったということですが、理由をききましたか？」

「ええ。ききました。あのカーキチが、突然、車に乗らなくなったんですからね。恋人のゆきさんを、よく助手席に乗せて走ってもいたんですよ。そしたら、車を盗まれてしまったんだといっていましたね」

「それを信じましたか？」

「いや。それなら、別の車を買ったと思うのに買いませんでしたからね」

と、関根はいった。

何かが、少しわかりかけて来たような気がした。

「車の事故ですかね」

と、亀井が外に出てから、十津川にいった。

「多分、そうだろう。白石は、フェラーリで事故を起こしたんだ。それで、車に乗らなくなったんだろう」

「調べてみましょう」

と、亀井がいった。

十津川たちは、去年の四月以前に起きた自動車事故を調べてみることにした。

場所が、どこかわからないのだが、まず、東京都内にした。

特に、人身事故、それも、はねられたほうが死ぬか、重傷を負うような事故にした。

理由は、白石が車に乗らなくなるほどのショックを受けているからである。

人身事故は、年中、起きていた。

その中で、去年の四月前後に、まだ犯人の捕まっていない事故に限定した。

それでも、数件の事故があった。

それを、さらに、しぼっていって、十津川が注目したのは、去年の三月九日に起きた事故である。

三月九日の夜十二時半ごろ、甲州街道の上北沢近くで、二十九歳のホステスがはねられて死亡した事件である。

この事故に、十津川が注目した理由は、二つあった。

一つは、目撃者が一人いて、三十歳のサラリーマンだが、酔って帰宅途中、はねられるのを見たのである。彼は、はねたのは白いスポーツカーに見えたと証言している。

もう一つは、片桐みどりというこの被害者は、結婚していたことである。夫は、三十二歳で、大学時代、柔道の選手だったというのである。

十津川と亀井は、この事故を扱った世田谷署の谷川刑事に、いろいろと聞いてみた。

「夫のことは、覚えていますよ」

と、谷川はいった。

「身長は、楽に一八〇センチはありましたね。大きな男でした」

「名前は、覚えているかね？」

「調書を見ればわかります」

谷川は、キャビネットから、その事故の調書を取り出した。

「名前は、片桐健夫ですね」

「何をしている男だったんだ？」

「そのころは、無職でした」
「ホステスのヒモか？」
「いえ。たまたま失業中だったんです。直前まで、不動産会社で働いていたということです。これは確かめました」
「片桐という男の写真は、ないかね？」
「被害者の写真を貰ったとき、一緒に写っていましたから、返さずにとっておきました」
と、谷川はいい、その写真を見せてくれた。
二人の男女が肩を組んでいる写真である。
なるほど、男は大きくて頑健そうな身体つきをしている。
「これが、片桐夫婦か？」
「そうです」
「今、この男は、何をしているんだろう？」
「さあ、わかりません。事故のほうも、犯人が見つからず、困っているところです」
「白いスポーツカーということは、わかっていたんだろう？」
「ええ。目撃者がいますから。しかし、それだけでは犯人を限定できません」
「した奴がいるんだよ」
「誰ですか？」
「多分、夫の片桐だ」
「そういえば、事故の直後は、やたらに警察に押しかけて来て、まだ犯人は見つからないのかと文句をいってたんですが、四月になると、ぱたりと来なくなりました。あのとき、片桐は、犯人を見つけたんでしょうか？」
「かもしれないね」
十津川は、重い口調でいった。
「それなら、なぜ、警察に知らせてくれなかったんでしょうか？」
「そうだな。自分でケリをつけようとしたのかもし

れない」
「そんなことは許されませんよ」
若い谷川は、顔を赤くした。
「だが、やったのかもしれないんだ」
と、十津川はいった。
十津川の頭の中で、一つのストーリイが生まれつつあった。

10

ホステスをしていた妻が、車にはねられて死亡した。
深夜で、目撃者は、たった一人。それも、白いスポーツカーとしかわかっていない。
そのホステスには夫がいた。それが、片桐だ。
彼は、復讐を決意して、犯人探しを始めた。無職だから時間はいくらでもある。
片桐は、犯人を見つけ出した。
それが、白石徹だった。いや、白石と小早川ゆきの二人だったというべきだろう。おそらく、白石の白いフェラーリがホステスをはねたとき、ゆきも一緒に乗っていただろうからである。
尾道に旅行中の白石と小早川ゆきを、片桐は追いかけて行き、見つけたのだ。そして、白石を向島に呼び出し、事故死に見せかけて溺死させた。
それから一年半たって、今度は同じ尾道で小早川ゆきが殺された。犯人は、片桐に違いない。
これは、片桐から見たストーリイである。
小早川ゆきから見たストーリイも、当然、考えられる。同じはずだが、微妙な違いは生まれるだろう。
ゆきは、若い建築家の白石と愛し合っていた。
そのままいけば、当然、祝福に満ちた結婚生活に入ったろう。
だが、白石の運転する白いフェラーリに同乗して

走っていて、一人のホステスをはねた瞬間から不幸が始まった。

二人は、警察に届けなかった。白石は、フェラーリを処分し、車に乗らなくなった。

警察は、彼らを追いつめられなかった。が、代わりに、死んだホステスの夫、片桐が二人を見つけ出した。

去年の四月、二人は、尾道に旅行した。多分、事故のことを忘れるためだったろう。

ところが、そこで片桐と会ってしまった。

白石は、片桐に呼び出されて、向島へ一人で行った。片桐が、一人で来いといったのだろう。

白石は、きっと、謝って、何とか許してもらうつもりだったに違いない。だが、片桐に殺されてしまった。

ゆきは、片桐が殺したとわかっていたろうが、それを口にできないままに東京に帰った。

それから一年半たち、ゆきは、再び尾道を訪ねた。片桐がやって来て、自分を殺すのを待つ気持ちで。

このストーリイには、二つのことが欠けている。

「わかっているよ」

と、十津川は、亀井にいった。

「例の手紙の落とし主のことが一つと、なぜ、小早川ゆきが、まるで自殺するような気持ちで尾道へ行ったかということだろう？」

「そうです。一年半の空白は、いったい何だったのかと思いますね」

「それを調べてみてくれ」

と、十津川はいった。

小早川ゆきは、愛する白石を失って、傷心のうちに東京に帰った。

その後、一年半すぎて、再び尾道を訪ねるまでの間、ゆきの身に何があったのかということである。

亀井たちは、東京に戻ってからの小早川ゆきを追った。

だが、なかなか彼女の足跡をつかむことができなかった。

いや、彼女が、どこにいて何をしていたかは簡単にわかったのだが、わからないのは男だった。

あの手紙を見れば、彼女に新しい恋人ができたことが想像される。その男が、どこの誰かわからないのだ。

「彼女は、実に注意深く、相手とつき合っていたんだと思いますね」

と、亀井は騒音の中で十津川にいった。

「それは、白石という恋人を失ったあとだからだろう。浮気な女と思われたくなかったんじゃないかね」

「そう思いますが、どこの誰かわからないと、今度の事件は、本当に解決しないと思いますよ」

「一年半前、ゆきは、恋人を失った。しかも犯人を知っていながら、それを口にできなかった。その苦しみを、誰かになぐさめてもらいたかったと思うね」

と、十津川はいった。

「それはわかります」

「誰に相談したと思うね？」

「新しいボーイフレンドですか？」

「そんな気持ちの余裕があっただろうか？」

「そうですねえ。なかったかもしれませんね」

「いいかい、カメさん。彼女は、最後に尾道から出した手紙で、『あいつは、きっと、私を殺しにやってくる』と、書いているんだ。つまり、手紙の相手は、何もかも知っていたことになる。彼女が打ち明けたのかどうか知らないが、手紙の相手は、白石徹のことも、運転する車でホステスを殺してしまったことも、尾道で彼女の夫に殺されたことも、知って

いたと思われるんだよ」
「ええ」
「新しく恋人ができたとして、そんなことまで話すものだろうか？」
「いや、話さないでしょうね。前の恋人のことは」
「そうだろう？　だが、話す場合も、一つだけあると思うんだよ」
「どんなときですか？」
と、亀井がきいた。
「相手が、前から白石徹を知っていた場合だよ。それに、彼が人をはねて殺してしまったこともだ」
「しかし、そんなことまで話す友人というのはいるでしょうか？　白石は、頭が良かっただけにライバルはたくさんいたようですが、心を許した友人はいなかったみたいですが」
「友人じゃなくて、相手は、家族じゃないかと思うんだがね」
と、十津川はいった。
「そういえば、白石には兄が一人いますが」
「その男のことは、調べたのかね？」
「調べましたが、ちゃんと妻子がいます。小早川ゆきのことを聞いてみたんですが、弟のことはよく知らなかったといっていますね」
「何をしている人だ？」
「三十五歳で、商事会社で課長です。エリートコースを歩いている男です」
「家は、カメさんの近くじゃないのかね？」
「そうですね。一つ先の駅です。もっとも、彼は、電車に乗らずに車を使っていますが」
「その兄貴という人物に、大いに興味があるね」
と、十津川はいった。

11

十津川は、白石徹の兄、白石貢(みつぐ)を、徹底的に調べることにした。

白石徹が、天才的な才能に恵まれていたのに対して、兄の貢は、努力型の勉強家といったところらしい。

地味な勉強家の兄に、派手な天才型の弟ということで、二人の仲は良かったという。

兄は、弟の才能を買っていたし、弟のほうは、兄の常識的なところに頼っていたようなのだ。

努力家の兄は、国立大学を優秀な成績で卒業すると商事会社に入り、二十九歳のときに重役の娘と結婚した。

十津川は、この兄に、弟の徹はすべてを打ち明けていたのではないかと考えた。

徹から見れば、兄は、社会的に自分よりはるかに大人に見えたに違いないからである。

十津川は、亀井と、亀井の家の近くに住むこの白石貢を自宅に訪ねた。

土曜日の午後である。

週休二日制で、白石貢は、家にいた。

敷地百坪ほどの明るい造りの家だった。今の東京では豪邸だろう。

美しく聡明そうな奥さんと、賢そうな六歳の男の子がいた。

十津川が、弟さんのことで話をしたいというと、貢は、

「近くの公園に行きましょう」

と、急に立ち上がった。

三人は、歩いて五、六分のところにある公園に行った。

十津川は、じっと貢の顔を見つめた。

小早川ゆきとの仲をきけば、否定するに決まっていた。

だから、しばらく何もいわずに、相手の顔を見つ

めていたのである。
貢は、すぐ、耐え切れなくなったみたいに、
「何も知りませんよ」
と、甲高い声でいった。
「それですむんですか？」
十津川は、彼には珍しく、最初からきつい語調でいった。
亀井が、びっくりしたような顔で十津川を見ている。
貢の顔が、蒼くなった。
「何のことですか？」
「弟さんと、小早川ゆきさんのことですよ。私には、わかっているんです。弟さんが、自動車事故で人をはねて殺したことを、あなたは知っていたんだ。弟さんは、兄さん以外に相談する相手がいなかったろうからですよ。違いますか？」
十津川は、相手の顔をまっすぐに見すえて、いった。
貢は、眼をそらせて、
「私は、何にも知らないんだ」
と、いった。その声の弱々しさに、十津川は、自分の勘が当たっているという確信を強くした。
「いや、あなたは、知っていた。弟さんは、小早川ゆきと尾道へ旅行し、そこで殺されてしまった。殺したのは、弟さんがはねて死なせた女の夫だった。ひとりで帰京した小早川ゆきから、あなたは、そのことを聞かされたはずですよ」
「――――」
「彼女は、あなた以外に相談する相手がいなかったんだと思う。あなたは、きっと優しい人に違いない。小早川ゆきの相談にのっているうちに、あなたは、彼女を愛してしまった」
「――――」
「私は、別にそれを非難しているんじゃありません

よ。愛情というのは自然なものですからね。それに、あなたがいなかったら、あなたが、彼女の相談にのってやらなかったら、多分、彼女は、自殺したに違いないと思うからですよ」

と、十津川はいった。

その言葉で、貢の眼が動いた。十津川の言葉が当たっていたからだろう。

十津川は、言葉を続けて、

「彼女も、あなたを愛したに違いない。あなたは、大人だ。傷心の彼女には、そんなあなたの温かさが救いだったに違いありません。一年半の間、お二人は、愛し合ってきた。しかし、この関係が長続きするはずがない。あなたには、奥さんも子供もいる。彼女のほうにも弟さんのことがあるからです。今度、お二人の間に、何があったのかはわかりませんが、想像はできます。多分、奥さんが、お二人の仲に気付いたんじゃないかと思う。それを、彼女は、どう受け止めたのか。私は、こう考えます。かつて自分が愛した人は、尾道で殺された。自分が一緒にいながら、どうすることもできなかった。そのことへの後悔が、噴き出したのではないでしょうか。そのうえ、あなたの愛情がこわれたことの悲しみです。彼女は、自殺を考えた。ええ。もちろん、これは、私の勝手な想像ですよ。どこで、また、どんな死を選ぶか、そう考えたとき、彼女は、尾道を考えた。そして、尾道で殺された弟さんのこともです。彼女は、尾道へ出かけました。弟さんを殺した片桐が自分を尾道で張り込んでいて、殺そうとするだろう。そのときには、殺されてやろうと考えて」

十津川は、ゆっくり考えながら、貢の反応を見ながら話した。

貢は、相変わらず黙っている。だが、その場から逃げようとはしなかった。

覚悟を決めて、十津川の話を聞いている感じだっ

た。

「だから、彼女は、わざと本名で旅館に泊まったんです。彼女は、きっと、一年半前と同じ『きく乃』という旅館に泊まりたかったに違いない。しかし、この旅館は放火で焼けてしまい、現在、再建中でした。放火したのは片桐だと、私は、思っています。片桐は、殺したあなたの弟さんが、『きく乃』のおかみさんや従業員に、自分のことを話したのではないかと疑い、口封じに、火をつけて殺してしまおうと思ったんでしょう。しかし、彼女は、死を覚悟しながらも、あなたのことが忘れられず、尾道から、あなたに手紙を書いた」

「――――」

「あなたは、当惑した。すぐ、尾道へ行きたくても、奥さんの手前、それができない。警察へ行くのもはばかられる。そこで、考えた末、この亀井刑事に手紙を拾わせる方法を考えついたんじゃありませんか。あなたが、どうして、亀井刑事の帰宅の道順を知っていたのかはわかりません。とにかく、あなたは、封筒をとって、中の手紙だけを亀井刑事に拾わせることに成功したんです」

十津川は、亀井に眼をやった。

亀井は、じっと白石を見つめた。が、貢は、相変わらず何もいわなかった。

「われわれは、あの手紙をまじめに受け取りました。書いてあることは、事実だと思ったんです。しかし、『坂の多い町』が、どこか、わからなかったし、イニシアルでは名前もわからない。尾道とわかったときには、すでに、彼女は、殺されてしまったあとでした。これが、私の想像したことです。どこか間違っていたら、いってください」

12

しばらく、白石貢は、何もいわなかった。
やがて、顔をあげたとき、その顔に浮かんでいたのは、苦渋ではなくて安堵の色だった。
「警部さんのいわれたとおりですよ。しかし、それを指摘されて、むしろ、ほっとしています。じっと、自分の胸の中だけにおさめているのに疲れたんです。弟は、昔から、何事も僕に相談していました。弟は、才能は豊かでしたが、それだけに常識に欠けるところがあって、それを自覚していたからですよ。小早川ゆきさんのことも、弟は、僕に最初から話してくれていました。もちろん、紹介もされていましたよ。彼女は、どちらかといえば可憐な感じで、弟とは、似合いのカップルだと思っていました。弟は、天才建築家として有名になっていて、きっと、この二人は、幸福になれるだろうと思いましたよ。それが、ある日、弟が、真っ青な顔で、僕のところへやって来たんです」
「車で、ホステスをはねたときですね」
「そうです。昨夜、彼女を乗せてフェラーリで走っていて、人をはねてしまった。しかし、怖くて、そのまま逃げてしまった。そして、今朝、テレビのニュースで、その人が死んだことを知ったというんです」
「そのとき、あなたは、警察へ行けとはいわなかったんですね？」
と、亀井がきいた。
「それが、正しいんでしょうが、いざとなれば、警察へ行けなんていえるものじゃありませんよ。弟だって警察へ行きたくないから、兄貴の僕に相談したんでしょう。だから僕は、このことは、誰にもいうな。その代わり、もう二度と車は運転するなと、いいました」
「あなの奥さんは、知っていたんですか？」
と、十津川がきいた。

「いや、家内は、知らないはずです。それから僕も、毎日、不安を感じながら、テレビや新聞のニュースを見ていましたよ。しかし、あの人身事故が弟の犯行だと、警察は、気がつかないようでした。僕も、弟も、少しずつ不安が消えていったんです」

「しかし、ひかれたホステスの夫は、犯人を探して、弟さんを見つけていたんですよ」

「そのとおりです。二人が尾道へ旅行して、ゆきさんが一人だけ帰って来て、弟が殺されたことを聞かされました。弟がひいた女性の夫にです。ゆきさんは、自分だけ助かったので、自殺したいといっていました。僕は、なぐさめるのに懸命でした。家内には弟は、尾道で海に落ちて亡くなったといっておきました」

「同情が、愛に変わったというわけですか？」

「僕にもわかりませんよ。最初は、とにかく彼女が自殺しないように、なぐさめていたんです。それが、いつから男と女の愛情になってしまったのか、僕にもわからないんです。いや、責任逃れにいってるんじゃありません。事実をいっているんです」

「ええ。そう思いますよ」

と、十津川はいった。

「僕も彼女も、二人の仲をかくしてきました。死んだ弟にも家内にも、すまないことですからね。しかし、女は敏感です。家内が、うすうすでしょうが、気付き始めたんです。ゆきさんにも、それはわかったみたいでした。彼女は、急に旅に出たいといいました。そしてこの手紙が、尾道から、届いたんです」

「それで？」

「僕は、どうしていいかわからなくなりました。警察に行って、何もかも話そう。話してゆきさんを守ってもらおうとも考えました。しかし、そうしたら、何もかも公けになってしまう。弟が人をはねて死な

せたことも話さなければならないし、家内には、ゆきさんとの関係がわかってしまう。僕の家庭は、めちゃめちゃになってしまうでしょう。といって、ゆきさんを放ってもおけない。そこであんな姑息な手段に訴えたんです。警察に友人がいたので、警視庁の職員録を貸してもらい、僕の家の近くに刑事さんがいないか調べたんです。一番近いのが、亀井刑事さんでした。僕は、亀井さんが帰宅する道順を調べ、あの日、駅におりた亀井さんを見届けてから、車で先廻りして、あの手紙を落としておいたんです。警察の力で、何とか、ゆきさんを助けてもらいたかったんです。しかし、そのときすでにゆきさんは殺されていたんですね」

「なるほどね」

と、十津川はいった。

「片桐という男を、捕えてください。この男は、弟とゆきさんを殺したんです」

貢が、いった。

十津川は、「わかっています」と、いった。

「片桐は、必ず逮捕しますよ」

「頼みます。もういいですか？　家内が心配していると思うので、もう、帰りたいんですが」

と、貢がいった。

十津川は、帰りかける貢に向かって、

「最後に、一つだけ、あなたにいっておきたいことがあります」

「何ですか？」

「あなたは彼女の手紙を受け取って、すぐ、警察へ届けようと思ったが、家族のことを考えて、それができなかったといった」

「したらよかったのは、わかっていますよ」

「そうじゃない」

と、十津川は、語気を強めていった。

「あなたは、なぜ、すぐ、尾道へ駈けつけなかった

んですか？　あの手紙の文句を思い出してごらんなさい。彼女は、あなたに、助けに来てくれと叫んでいたんですよ」

初出誌一覧

日本海からの殺意の風	別冊小説宝石	昭和61年爽秋特別号	光文社
殺人へのミニ・トリップ	小説宝石	昭和61年2月号	光文社
潮風にのせた死の便り	小説宝石	昭和61年12月号	光文社

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

トラベル・ミステリー傑作集　日本海からの殺意の風

昭和62年1月30日　初版1刷発行　　定価680円

著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）

発行者　大坪昌夫

印刷者　盛庄吉
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社光文社
振替　東京6-115347　電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録　116613　© Kyōtarō Nisimura 1987

ISBN4-334-02682-6
Printed in Japan



KAPPA NOVELS

「カッパ・ノベルス」誕生のことば

カッパ・ブックス Kappa Books の姉妹シリーズが生まれた。カッパ・ブックスは書下ろしのノン・フィクション（非小説）を主体としたが、カッパ・ノベルス Kappa Novels は、その名のごとく長編小説を主体として出版される。

もともとノベルとは、ニューとか、ニューズと語源を同じくしている。新しいもの、新奇なもの、はやりもの、つまりは、新しい事実の物語というところから出ている。今日われわれが生活している時代の「詩と真実」を描き出す——そういう長編小説を編集していきたい。これがカッパ・ノベルスの念願である。

したがって、小説のジャンルは、一方に片寄らず、日本的風土の上に生まれた、いろいろの傾向、さまざまな種類を包蔵したものでありたい。かくて、カッパ・ノベルスは、文学を一部の愛好家だけのものから開放して、より広く、より多くの同時代人に愛され、親しまれるものとなるように努力したい。読み終えて、人それぞれに「ああ、おもしろかった」と感じられれば、私どもの喜び、これにすぎるものはない。

昭和三十四年十二月二十五日

光文社

〈カッパ・ノベルス〉出版目録

注
- この目録は、各著者別にまとめました。なお、順序は、発行順です。
- ＊印は昭和62年1月現在品切れ中です。

松本清張 長編推理小説 ゼロの焦点
松本清張 長編推理小説 眼の壁
松本清張 長編推理小説 波の塔
松本清張 長編推理小説 点と線
松本清張 長編推理小説 蒼い描点
松本清張 推理小説 黒い画集（全二冊 決定版）
松本清張 長編推理小説 影の地帯
松本清張 長編推理小説 砂の器
松本清張 長編推理小説 高校殺人事件
松本清張 長編推理小説 考える葉
松本清張 長編推理小説 危険な斜面
松本清張 長編小説 風の視線
松本清張 長編小説 黄色い風土
松本清張 長編推理小説 黒い樹海
松本清張 長編推理小説 時間の習俗
松本清張 長編小説 水の炎
松本清張 カッパ版全11巻 松本清張短編全集
松本清張 長編推理小説 花実のない森
松本清張 長編推理小説 山峡の章
松本清張 長編推理小説 連（れんかん）環
松本清張 長編推理小説 蒼ざめた礼服
松本清張 連作推理小説 黒の様式
松本清張 長編推理小説 二重葉脈
松本清張 長編推理小説 弱気の蟲
松本清張 長編推理小説 Dの複合
松本清張 長編推理小説 内海の輪
松本清張 長編推理小説 分離の時間
松本清張 長編推理小説 わるいやつら（全二冊 決定版）
松本清張 長編推理小説 けものみち（全二冊 決定版）
松本清張 長編小説 告訴せず
松本清張 長編小説 溺れ谷
松本清張 長編小説 球形の荒野
松本清張 長編推理小説 梅雨と西洋風呂
松本清張 長編推理小説 聞かなかった場所
松本清張 長編推理小説 生けるパスカル
松本清張 長編推理小説 歪んだ複写（税務署殺人事件）
松本清張 長編推理小説 不安な演奏
松本清張 長編推理小説 彩霧（さいむ）
松本清張 長編小説 白昼の死角
松本清張 長編推理小説 強き蟻
松本清張 推理小説 高台の家
松本清張 長編小説 黒い回廊
松本清張 長編小説 混声の森
松本清張 推理小説 雑草群落（上・下）
松本清張 推理小説 馬を売る女
佐野洋 イヌ・ミステリー傑作集 犬たちと殺人と
高木彬光 長編推理小説 成吉思汗の秘密
高木彬光 長編推理小説 白昼の死角
高木彬光 長編推理小説 刺青殺人事件
高木彬光 長編推理小説 検事霧島三郎

高木彬光 長編推理小説
密告者

高木彬光 長編推理小説
ゼロの蜜月

高木彬光 長編推理小説
都会の狼

高木彬光 長編推理小説
霧の罠

高木彬光 長編推理小説
炎の女

高木彬光 長編推理小説
灰の女

高木彬光 長編推理小説
一、二、三——死

高木彬光 長編推理小説
能面殺人事件

城山三郎 長編小説
乗取り

笹沢左保 長編推理小説
愛人関係

笹沢左保 長編推理小説
眠れ、わが愛よ

笹沢左保 長編推理小説
求婚の密室

笹沢左保 長編推理小説
地下水脈

笹沢左保 長編推理小説
他殺岬

笹沢左保 長編推理小説
不倫岬

笹沢左保 長編推理小説
無情岬

笹沢左保 長編推理小説
逃亡岬

笹沢左保 長編推理小説
愛人岬

笹沢左保 長編サスペンス小説
悪魔の部屋

笹沢左保 長編推理小説
悪魔の湖畔

笹沢左保 長編推理小説
悪魔の関係

笹沢左保 長編サスペンス小説
悪魔の人質

笹沢左保 長編サスペンス小説
悪魔の沈黙

笹沢左保 長編サスペンス小説
悪魔の誘惑

笹沢左保 長編推理小説
悪魔の魔岬

笹沢左保 長編推理小説
同行者

笹沢左保 長編推理小説
十五階の地獄

笹沢左保 長編サスペンス小説
背信の詩集

笹沢左保 長編推理小説
お前の名は地獄

三好徹 長編推理小説
コンピュータの身代金

三好徹 長編推理小説
モナ・リザの身代金

三好徹 長編犯罪小説
オリンピックの身代金

梶山季之 長編小説
人妻だから

黒岩重吾 長編小説
夜なき亀裂

黒岩重吾 長編推理小説
日本沈没（上・下）

黒岩重吾 長編推理小説
廃虚の唇

黒岩重吾 長編小説
女の小箱

黒岩重吾 長編推理小説
女の氷河

黒岩重吾 長編推理小説
闇の航跡

黒岩重吾 長編小説
肌と金

黒岩重吾 長編推理小説
詐欺師の旅

黒岩重吾 長編推理小説
闇の肌

黒岩重吾 長編小説
夜の駐車場

黒岩重吾 長編サスペンス小説
茜雲の渦

黒岩重吾 長編サスペンス小説
贅沢な被葬者

小松左京 SF長編小説
日本沈没（上・下）

大藪春彦 長編連作アクション
破壊指令No.1

大藪春彦 長編アクション小説
復讐の弾道

大藪春彦 長編アクション小説
復讐の弾道

大藪春彦 連作アクション小説
偽装諜報員

大藪春彦 長編アクション小説
非情の標的

大藪春彦 カー情報小説
全開で飛ばせ

大藪春彦 長編アクション小説
俺に墓はいらない

大藪春彦 長編アクション小説
裁くのは俺だ

大藪春彦 連作アクション小説
東名高速に死す

大藪春彦 連作アクション小説
曠野に死す

大藪 春彦 長編アクション小説
暴力列島

大藪 春彦 長編アクション小説
狼は暁を駆ける

大藪 春彦 長編アクション小説
マンハッタン核作戦

大藪 春彦 長編アクション小説
処刑軍団

大藪 春彦 長編アクション小説
処刑戦士

大藪 春彦 連作アクション小説
傭われ探偵

大藪 春彦 長編サスペンス・アクションバラード
戦士の挽歌(上・下)

島田 一男 長編推理小説
科学捜査官

島田 一男 長編推理小説
迷宮捜査官

島田 一男 連作推理小説
継続捜査官

島田 一男 長編推理小説
国際捜査官

島田 一男 連作推理小説
現場捜査官

島田 一男 長編推理小説
女捜査官

島田 一男 長編推理小説
検視捜査官

島田 一男 長編推理小説
広域捜査官

島田 一男 長編推理小説
機動捜査官

島田 一男 長編推理小説
特殊捜査官

鮎川 哲也 長編推理小説
沈黙の函

森村 誠一 長編推理小説
真昼の誘拐

森村 誠一 長編推理小説
悪夢の設計者

森村 誠一 長編推理小説
黒魔術の女

森村 誠一 長編推理小説
指名手配

森村 誠一 長編推理小説
凶通項

森村 誠一 長編推理小説
異型の白昼

森村 誠一 長編推理小説
悪しき星座

森村 誠一 長編推理小説
虹に立てる叛旗

森村 誠一 長編推理小説
伝説のない星座

森村 誠一 長編推理小説
流氷の夜会

森村 誠一 長編推理小説
致死連盟

森村 誠一 長編推理小説
日本アルプス殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
新幹線殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
東京空港殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
超高層ホテル殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
誘鬼燈

森村 誠一 長編推理小説
高層の死角

森村 誠一 長編推理小説
富士山麓殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
鎌倉静の舞殺人事件

森村 誠一 長編推理小説
致死海流

森村 誠一 長編推理小説
野性の証明

森村 誠一 長編推理小説
人間の証明

森村 誠一 長編推理小説
黒い墜落

森村 誠一 長編推理小説
青春の証明

森村 誠一 長編推理小説
火の十字架

森村 誠一 長編推理小説
日蝕の断層

森村 誠一 長編推理小説
密閉山脈

森村 誠一 長編推理小説
花の骸

森村 誠一 長編推理小説
死定席

森村 誠一 長編推理小説
大都会

森村 誠一 長編サスペンス小説
白の十字架

斎藤 栄 長編推理小説
謎の幽霊探偵

斎藤 栄 長編推理小説
女子大生短歌殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
OL現代詩殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
花嫁川柳殺人事件

斎藤 栄 長編推理小説
謎の人命電話

斎藤 栄 長編推理小説
方丈記殺人事件

清水一行 長編推理小説
動脈列島

清水一行 長編推理小説
女教師

清水一行 長編企業小説
副社長

清水一行 長編企業小説
頭取室

清水一行 長編推理小説
女患者

清水一行 長編企業推理
憤死(ふんし)

清水一行 長編推理小説
処刑教師

清水一行 長編企業小説
冷血集団

清水一行 長編痛快ビジネス
大(おおもの)物(第一・二部)

清水一行 長編企業小説
闘いへの執着

清水一行 長編経済ピカレスク
悪名集団

清水一行 長編推理小説
極秘指令

清水一行 長編企業小説
女重役

清水一行 長編経済小説
欲望集団

西村京太郎 長編推理小説
伊豆七島殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
消えたタンカー

西村京太郎 長編推理小説
消えた乗組員

西村京太郎 長編推理小説
発信人は死者

西村京太郎 長編推理小説
寝台特急殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜間飛行殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
終着駅殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜行列車殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
北帰行殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
ハネムーン・トレイン
蜜月列車殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
ミステリー・トレイン
日本一周「旅号」殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
スーパー・エクスプレス
東北新幹線殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
ラブ・トレイン
下り特急「富士」殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
トラベル・ミステリー・トレイン
富士山麓殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
最果てのブルートレイン

西村京太郎 長編推理小説
上野駅殺人事件

夏樹静子 長編推理小説
77便に何が起きたか

夏樹静子 長編推理小説
遠い約束

夏樹静子 交通推理小説
密室航路

夏樹静子 長編推理小説
Wの悲劇

夏樹静子 長編推理小説
Mの悲劇

土屋隆夫 長編推理小説
妻に捧げる犯罪

土屋隆夫 長編推理小説
盲目の鴉

蜷川(にながわ)幸雄 連作推理小説
デリシャス殺人事件

蜷川幸雄 長編推理小説
美食倶楽部

石沢英太郎 長編推理小説
21人の視点

石沢英太郎 長編推理小説
九州殺人行

西村京太郎 長編推理小説
超特急「つばめ号」殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
ハイランド・トレイン
高原鉄道殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
北能登殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
寝台特急「日本海」殺人事件

夏樹静子 長編推理小説
蒸発ある愛の終わり

夏樹静子 長編推理小説
喪失ある殺意のゆくえ

夏樹静子 長編推理小説
目撃ある愛のはじまり

夏樹静子 長編推理小説
霧(むひょう)氷

夏樹静子 長編推理小説
光る崖

藤本義一 長編アクション小説
やさぐれ刑事

藤本義一 長編推理小説
サスペンス
はぐれ刑事

菊村 到 長編推理小説
首 桶 伝 説

草野 唯雄 長編推理小説
女 相 続 人

草野 唯雄 長編推理小説
もう一人の乗客

草野 唯雄 長編推理小説
火 刑 の 女

草野 唯雄 長編推理小説
山口線〝貴婦人号〟

草野 唯雄 長編推理小説
満月殺人旅行

草野 唯雄 長編推理小説
街は狙われた

草野 唯雄 長編推理小説
北リアス海岸殺人事件

草野 唯雄 長編推理小説
「阿い宇え於」殺人事件

川上 宗薫 長編推理小説
狙われた女

川上 宗薫 長編推理小説
寝室探偵

山村 美紗 長編推理小説
花の棺

山村 美紗 長編推理小説
百人一首殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
エジプト女王の棺

山村 美紗 長編推理小説
燃えた花嫁

山村 美紗 長編推理小説
消えた相続人

山村 美紗 長編推理小説
京友禅の秘密

山村 美紗 長編推理小説
黒百合の棺

山村 美紗 長編推理小説
小野小町殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
ミス振袖殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
恋盗人

山村 美紗 長編推理小説
京都不倫旅行殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
京都化野殺人事件

福本 和也 長編推理小説
謎の巨人機

福本 和也 長編推理小説
謎の水上機

福本 和也 長編推理小説
成田空港殺人事件

福本 和也 長編ハードロマン
狼よ、逆潮を翔べ

福本 和也 長編アクションロマン
大阪極道戦争

福本 和也 長編ハードロマン
新・大阪極道戦争

生田 直親 長編推理小説
K峰殺人事件

和久 峻三 長編推理小説
偽証法廷

日下 圭介 長編推理小説
告発者は闇に跳ぶ

日下 圭介 長編推理小説
山頭火 うしろ姿の殺人

伴野 朗 長編アドベンチャー推理
必殺者

赤川 次郎 長編推理小説
ひまつぶしの殺人

赤川 次郎 長編推理小説
顔のない十字架

赤川 次郎 長編ユーモア・サスペンス
おやすみ、テディ・ベア

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの推理

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの追跡

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの怪談

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの狂死曲

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの駈落ち

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの恐怖館

赤川 次郎 ユーモア・傑作集
三毛猫ホームズの運動会

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの騎士道

赤川 次郎 ミステリー・傑作選
三毛猫ホームズのびっくり箱

赤川 次郎 ユーモア・傑作選
三毛猫ホームズのクリスマス

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの幽霊クラブ

赤川 次郎 ユーモア・傑作集
三毛猫ホームズの感傷旅行

西村 寿行 長編アクションロマン
梓弓執りて

西村 寿行 長編サスペンス小説
遠い渚

西村 寿行 長編サスペンス小説
風は悽愴

西村 寿行 長編バイオレンス・ロマン
昏き日輪

西村 寿行 長編ハードロマン
汝は日輪に背く

西村寿行 長編ハード・アクション傑作集
無頼船

西村寿行 長編ハード・アクション傑作集
二万時間の男

西村寿行 長編ハード・バイオレンス
妖獣の村

西村寿行 長編警鐘小説
滅びの宴

西村寿行 ハード・サスペンス傑作集
闇の法廷

西村寿行 長編ハード・ロマン
ふたたび渚に

西村寿行 長編スリー・痛快
風紋の街

西村寿行 長編復讐小説
蘭菊の狐

西村寿行 長編恐怖小説
オロロンの呪縛

西村寿行 長編バイオレンス
晩秋の陽の炎ゆ

西村寿行 長編伝奇バイオレンス
鬼（おに）

西村寿行 長編警鐘小説
鯊艙の宴

西村寿行 長編ハード・アクション・リバー
狼のユーコン河

西村寿行 長編アクション・ハード・アクション
黒猫の眸のほめき

西村寿行 官能ハード・アクション
症候群

西村寿行 長編ハード・アクション・サスペンス
魔境へ、無頼船

西村寿行 長編痛快小説
幻（めくらまし）戯

小林久三 長編推理小説
スーパーゴリラ

宇能鴻一郎 長編推理小説
濡れて探る

門田泰明 長編医学サスペンス
癌病棟のメス

門田泰明 長編サスペンス小説
大病院が霙える日

門田泰明 長編超時空バイオレンス
影の軍団

檜山良昭 長編スペクタクル小説
日本本土決戦

檜山良昭 長編スペクタクル小説
日本本土決戦

檜山良昭 長編近未来スペクタクル
日本潰滅

檜山良昭 長編スペクタクル小説
ソ連本土決戦

檜山良昭 トルーマン・ヤーチル・スターリン
ポツダム三巨頭を消せ

檜山良昭 長編冒険スペクタクル
剣竜と

高杉良 長編企業ドキュメント
対（たいけつ）決

内田康夫 長編推理小説
遠野殺人事件

内田康夫 長編推理小説
倉敷殺人事件

内田康夫 長編推理小説
津和野殺人事件

内田康夫 長編推理小説
白鳥殺人事件

勝目梓 長編ハード・アクション
血の狩人

勝目梓 痛快ハード・アクション
悪（わる）党

勝目梓 長編ハード・アクション
露（ろしゅつ）出

勝目梓 痛快ハード・アクション
悪女は午前二時に眠る

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの名推理

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの大活劇

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの檜舞台

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの蒸発

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの犬疑

内田康夫 長編推理小説
小樽殺人事件

勝目梓 長編アクション・ハード・アクション
過去からの狙撃者

長井彬 長編推理小説
北アルプス殺人組曲

長井彬 長編推理小説
奥穂高殺人事件

広瀬仁紀 長編企業ピカレスク
槍ヶ岳殺人行

広瀬仁紀 長編企業ピカレスク
乗取り屋

広瀬仁紀 長編企業ピカレスク
約束された明日

広瀬仁紀 長編企業小説
飛竜の如く

広瀬仁紀 長編経済ピカレスク
仕掛け屋

辻真先 長編ユーモア推理
迷犬ルパンの挑戦

鷲尾三郎 長編推理小説
過去からの狙撃者

長井彬 長編推理小説
奥穂高殺人事件

長井彬 長編推理小説
槍ヶ岳殺人行

広瀬仁紀 長編企業ピカレスク
乗取り屋

広瀬仁紀 長編企業小説
飛竜の如く

広瀬仁紀 長編経済ピカレスク
仕掛け屋

島田荘司 長編推理小説
寝台特急はやぶさ1/60秒の壁

島田荘司 長編推理小説
出雲伝説7/8の殺人

島田 荘司 長編推理小説
北の夕鶴2/3の殺人

島田 荘司 長編推理小説
高山殺人行1/2の女

泡坂 妻夫 長編推理小説
花嫁は二度眠る

大下 英治 長編サスペンス小説
視聴率ハンター

胡桃沢耕史 長編ミステリー
ズベ刑事

胡桃沢耕史 長編ミステリー
ズベ刑事コネクション

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝① 多魂の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝② 幽冥の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝③ 凶魔の巻

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
闘牌伝④ 奔雷の巻

南里 征典 長編推理小説
機密狩り

小野 博通 長編医学推理
腎移植殺人事件

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔戦線

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔軍団

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獣

夢枕 獏 長編スーパーバイオレンス
獅子の門 群狼編

山田 智彦 長編ビジネス小説
重役室午前零時

山田 智彦 長編推理小説
24時間の罠

有明 夏夫 長編連作推理
汚名をそそげ

井上 淳 長編アクション
殺戮者

都筑 道夫 長編連作ミステリー
死体置場の舞踏会

津村 秀介 長編推理小説
宍道湖殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
0・096逆転の殺人

西木 正明 青春冒険小説
想い出のグリーングラス

本岡 類 長編推理小説
武蔵野0・82t殺人事件

岡嶋 二人 長編推理小説
コンピュータの熱い罠

中津 文彦 長編推理小説
千利休殺人事件

E・クイーン編 第1・2・3集
日本傑作推理12選

E・クイーン編
新世界傑作推理12選

E・クイーン編 新庄哲夫訳
世界傑作推理12選&ONE

E・クイーン
日本文芸推理12選&ONE

石川番司 結城信孝 編
華麗なる賭け

石川番司 結城信孝 編
女は一回勝負する

志茂田景樹 長編ユーモア推理
怪盗とジゴロと孔雀警視Ⅰ

志茂田景樹 長編ユーモア推理
怪盗とジゴロと孔雀警視Ⅱ

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
下り〝はつかり〟

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
急行出雲

鮎川哲也編 鉄道ミステリー傑作選
見えない機関車

阿刀田高編 ニッポンの〝黒い哄笑〟
ブラック・ユーモア傑作選

佐野 洋編 医学推理小説
ミステリー総合病院

石川番司 結城信孝編
黄金の指

⊙アンソロジーシリーズ

大西巨人編 〔Ⅰ・Ⅱ〕
日本掌編小説秀作選

日本推理作家協会編
白骨ハンティング

現代ミステリー傑作選・上中下
生首コンテスト

鎌田 慧
狙われた教科書

藤子不二雄
落ちこぼれ軍団の奇跡

馬場 信浩
トキワ荘青春日記

⊙ノンフィクションシリーズ

磯村 懋
奇跡の対話教育

千田 夏光
従軍慰安婦・慶子

福田 洋
野獣の刺青

落合 信彦
日本が叩き潰される日

岩川 隆
日本の地下人脈

◉最新刊シリーズ

長編推理小説
山陰路殺人事件
西村京太郎

長編超伝奇バイオレンス小説
妖魔異伝 淫虐編
菊地 秀行

長編ハード・ロマン
極道株式会社
福本 和也

長編推理小説
「ガラスの城」殺人事件
小林 久三

長編企業小説
逆転の歯車
清水 一行

長編痛快小説
夢想幻戯
西村 寿行

長編推理小説
鎌倉流鏑馬殺人事件
斎藤 栄

長編推理小説
白馬山荘殺人事件
東野 圭吾

長編推理小説
函館駅殺人事件
西村京太郎

名探偵キャサリン傑作集Ⅲ
京都絵馬堂殺人事件
山村 美紗

長編推理小説
大雪山牙と顎の殺人
本岡 類

長編推理小説
ミセス捜査官
島田 一男

長編推理小説
三毛猫ホームズの歌劇場
赤川 次郎

長編推理小説
「阿蘇雲仙」逆転の殺人
深谷 忠記

長編伝奇バイオレンス小説
闇艫伝 5 宿業の巻
谷 恒生

最新傑作ミステリー 上
殺意の狂詩曲
日本推理作家協会編

長編スーパー・バイオレンス小説
獅子の門 玄武編
夢枕 獏

長編推理小説
殺人路・上高地
長井 彬

最新傑作ミステリー 中
犯罪の葬送曲
日本推理作家協会編

長編推理小説
グルメを料理する十の方法
栗本 薫

長編超バイオレンス・サスペンス
叛撃戦線
門田 泰明

長編推理小説
Yの構図
島田 荘司

最新傑作ミステリー 下
恐怖の変奏曲
日本推理作家協会編

トラベル・ミステリー傑作集
日本海からの殺意の風
西村京太郎

超バイオレンス・アクション
淫殺街
菊地 秀行

長編推理小説
新幹線多重衝突セヨ
和久 峻三

長編ハード・アクション小説
無頼船、極北光に消ゆ
西村 寿行